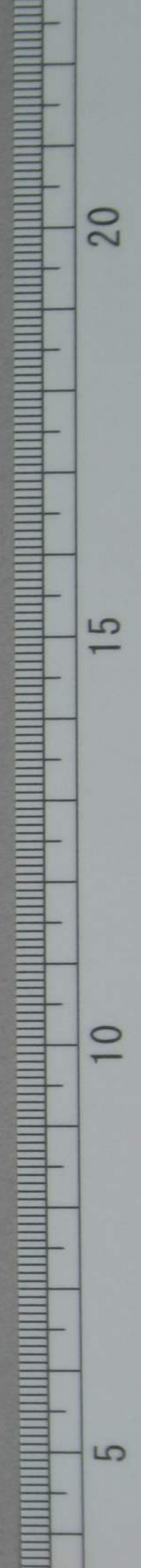
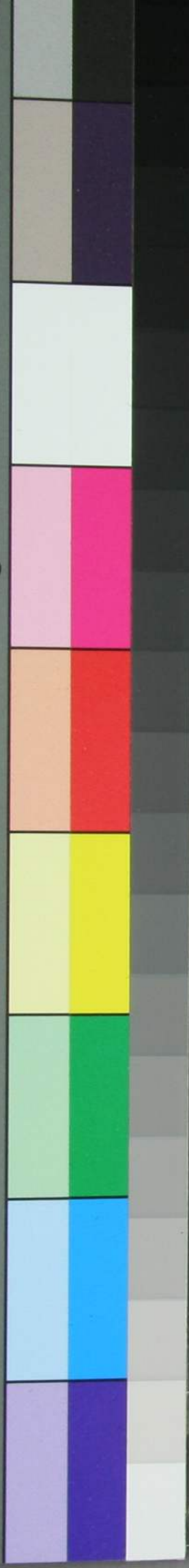


Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



濟

聲

卷之二





濤
聲

國木田獨步作



□ 新潮社出版 □

縮刷獨歩叢書

—刊行書目—

- 武藏野及渚
- 獨歩集
- 獨歩書簡
- 運命
- 獨歩小品集
- 濤聲

刊行書籍は此以外にも及ぶべく、出版は必ずしも上掲の順序によらず。毎編その装畫を異にするも、一様の體裁に據る可し。

—新潮出版社—

解題

『濤聲』は、明治四十年、即ち作者がその逝ける前年に公にしたもので、獨歩の短篇集中、死後に編せられた『第二獨歩集』を除けば、これは其の最後のものである。三十八年に『獨歩集』を公にした時は、世、未だ獨歩を認むるに吝であつたが、三十九年『運命』を出すに及び、彼は一躍して文壇最高の地位を得た。獨歩にして専念創作に没頭したならば、我等は更に多くの傑作を彼に得たであらうが、一面多感の詩人たり、しかも一面事業に熱した野心家であつた彼は、その名聲大に揚り、その作風益々渾熟するの時に當り、獨歩社の經營に過半の勞を致して、筆を執るや常に匆忙の間に於てした。此の一卷に收められたる諸篇皆、事務の卓上牙籌の傍に於て書かれたものであるが、而もその簡捷にして鋭敏、警拔にして深刻なる作風の特色は、その爲めに却つてよく發揮し得たものがあると思ふ。通卷いづれも、獨歩の藝術の極致を示すもの、當時の文壇に鳴つた名作揃ひである。此集を出したのが四十年の五月、病は既にその多感の胸を蝕んで、此年の末には全く病床の人となり、翌年の六月二十三日、此の一代の文豪は溘然として世を去つたのである。

編者識

濤聲目次

鎌倉夫人	二
神の子	一八
二少女	二七
帽子	四三
あの時分	五〇
死	五三
波の音	七九
號外	八九
歸去來	九九
別天地	一五三
戀を戀する人	一七六
園遊會	一九六

濤 聲

國 木 田 獨 步

秋 の 入 日

要するに悉み、逝やけるなり！
在らず、彼等は在らず。
秋の入日あかく、と田たの面に残り
野分はげしく颯々と梢こぶを拂ふ
うらがなし、あゝうらがなし。

水とすむ大空かぎりなく
夢のごと淡あき山々遠く
かくて日は、あゝ斯かくて此日は
古いにしへも暮れゆきしか、今も又！
哀かなし、哀し、我こゝろ哀し。
以て自序となす 獨歩吟客

鎌倉婦人

上

此頃病氣保養のため鎌倉に滞在して居る友人柏田勉から次のやうな手紙が来た、自分は此手紙を讀んで痛く感じたことがある、然し今それを此處では言はない、たゞ柏田が文學者でもなく、小説家でもなく、純粹の數學家であるだけ、書くことが餘り露骨で、艶も飾りもなく時に讀者をして慳慳せしめは爲ないかを恐れる許。けれども自分は美文家の手にならざる此蕪雜な手紙の中にこそ却つて多くの眞實を含んで居るやうに思ふから敢てこれを公にしたのである。

* * * * *

僕は昨日滑川に鯉を釣に行つた。釣にゆくといふと大變おぼげさであるが、釣れても釣れなくても、たゞ大公望然と糸をたれて居て、時間さへ経てば其で僕の目的は達して居るのであるから、小さな滑川の畔でも僕の釣には澤山なのである。

君も御存知の橋、長谷から海濱院の前を通つて材木座の方へゆく道にある橋、あの橋の下で、亂

二

三

杭の上に蹲まつて釣つて居ると、橋の上を折々人が通る、然し最早秋の中程であるから、通る者は多く地の者で、珍らしさうに他人の釣を橋の上から見物する悠長な都人士は殆ど居ない。

處が午後三時頃であつた、長谷の方から材木座の方へと橋の半までコロコロ下駄を引ずりながら来た二人連、一人は男、一人は女といふことは其聲で分る。立ちどまつて、

「貴女は久しく鎌倉に住つたことが有るとか言ひやしたね」と男が問うた。

「ハイ、半年餘り住んで居ました。もう古いことです」といふ女の聲を聞いて僕は愕然とした。僕は此女の聲を聞かざること既に六年、しかも遂に此聲を全く忘れてはなかつたのである。

橋の高さが二間半もあり、僕は其の直ぐ下に居るのであるから、上から下を見下す時、下から上を見上げなければ互の顔は見合すことは出来ない。

杉愛子の名を言へば君も亦た且つ頷き且つ驚くであらう、六年前、僕の妻であつた女、而も青春の戀燃ゆるが如く互に死をも辭せないで總ての故障を排し、僅に結び得たる夫妻の縁、それをすら半年ならずして自から打斷つた女、其女が六年の後會て愛する夫と共に住んで居た鎌倉に来て、他の男子と共に昔を語る、其物語を橋の下で昔しの夫が聞いて居る、これが小説ならば讀者の嘲笑を恐れて君も書くことは出来まいと思ふ。

けれども、僕の驚いたのは、橋の上に立つて居る女が杉愛子であるといふ一事のみではない、實は

先日一寸上京した時に、愛子の身の上に着て容易ならぬことを傳へ聞いた。其以前から僕の耳には愛子に就いて甚だ面白からぬ噂を傳へられて居たのである、僕は最早彼の女のことを何とも思つてゐないから、強ひて彼の女の其後の成行など聞かうとも思はぬに、不思議にも其噂が時々僕の耳に入る、一口に言へば杉愛子は到る處で情夫を作へるといふ淺ましい事實である。去年のこと、記憶するが、或日僕は所用あつて數學新報社を訪ひ外山先藏に會つた。用談が終ると外山は急に様子を變へて卓上に指を立て、「珍聞を聞さうか」と言ふ。「君に關することだ。君は鎌倉夫人の其後の事を知つて居るか」と聞くから「知らない」と僕は答へた。「大きな聲では言はれぬが鎌倉夫人はこの頃音樂學校へ通つて居るよ。まアそれも可いサ、それが眞面目なら祝すべしだが、實は音樂は附たりだといふことだぜ。情夫が三人。如何だ驚いたらう。」まさか。「さうサ、君は無論まさかと思ふだらう。僕も餘りのことだから段々様子を聞いて見ると全く事實らしい、ひどい女だね、僕はそんな人とは思はなかつた。」

それから今年の春であつた。義妹が赤坂の或教會から歸つて來ての話に今日兄上の鎌倉夫人に遇たといふ。「如何して其が分判つたか」と聞くと「私の知つて居る或奥様が一人の若い方をそつと指して、あれが貴女の義兄の以前の夫人ですと教へて呉れたから分判りました。そしてね、兄上、其奥様の被仰るには彼の人は貴女の義兄を酷い目に遇はしたばかりか、其後さん／＼男を欺して歩いて

彼人の爲に幾人困らされたか知れはしない、抑々教會などに足踏の出来る人ぢやアないのが何といふ圖々しい人だらうツて呆れて居ましたよ。」

右の一ツの噂で僕は愛子の身の上を十分想像することが出來たのである、處が最後に先日上京した時、更に甚だしい事を聞いた。君も御存知ならん、僕の同郷の友に沖といふ畫家が居る。暫く會はんので上京した序に訪ねて見ると寢て居るから、如何したと聞くと傻麻質斯で困つたといふけれども、氣分に變りはないので二人は雑談を爲て居ると、沖は急に思ひ出したやうに、

「さうだ、君に會つたら話さうと思つて居たが僕は思ひがけない處で面白い事を聞いたよ、面白いと言つては君へ失禮かも知れないが、」

「何だらう、僕に失禮なこと面白くないこといふのは？」

「鎌倉夫人のことサ。君は彼人の洋行一件を知つて居るか。」

「噂で聞いたばかりで實際の事は少しも知らんよ。」

「さうか、それなら僕の方が少しは詳しさうだ、實は彼人は先方へ着くや直ぐと同行者から追ひかへされたのだ、其理由は船中で船長と怪しい仲になつたのを看破されたのださうな。驚くぢやないか、彼人の渡米の目的はポストンとかに約束した男が行つて居て、其人の許にゆくべく、某夫人に甘く取入つて同行さして貰つたのださうな。處が途中で早くも亂行の沙汰、某夫人は驚いて了つて、

船が桑港に着くや否や直ぐと歸國さしたといふのも當然な處置サ、けれども君、未だく酷いことがある、其は其歸國の途中を監督する筈で汽船會社の寛某といふ男を彼人に附けた、すると、彼人は又寛と怪しい仲になつて了ひ、今では麻布聖坂の下で夫婦然と暮して居るさうな。其寛には妻君が有つて兒が二人も有るのだけ、如何だ驚いたらう。」

「イヤ其は容易ならぬことだが君は如何して其を知つて居る？」

「だから不思議な話サ、僕の醫者が以前から彼人を知つてゐて、何かの話の序に僕に以上の次第を話して聞かしたのだ。ハイカラ毒婦とは彼人のことだらうと憤激して居たよ。寛の妻の兄は非常に怒つて裁判沙汰にしてやると言つて居るさうだ！、寛は遂に其爲め會社の方も首になつたさうな。」

「それで寛先生は愛子と一緒になつて満足して居るのだらうか。」

「さうと見えるねえ。何しろ妻子を捨てゝまでといふのだから、愛子さんの腕も凄いや。」
との話を聞いて僕は其時は左までにも思はなかつたが、其翌日鎌倉に歸る汽車の中で、其昔を思ひだし、言ふ可からざる痛ましい思に惱されたのである。であるから橋の上の女を杉愛子と知るや、直ぐ其同伴の男は寛某であると推測した。

で二人の話を下で聞いて居た。まさか六年前、此鎌倉で一緒に暮した昔の夫が釣を垂れながら聞いて居るとは愛子も思はなかつたらう。

中

「一人ですか。」と男は聞いた。

「イ、え母とです。」と女は何氣なく答へ直ぐと「母は其頃から病身で困つて居ましたから度々鎌倉へは轉地に參つて居ました。」

「どうです、東京は煩いから我々も二三ヶ月此方へ来て長閑に暮しませうか。」

「さうですね、出来ることならさう仕たいもので御座います。」

「さう仕ませう。そして釣にでも出掛けませう。何だとか、かんだとか東京は煩くつて仕やうがない。」

「眞實です。今日は私も氣がのび／＼しました。」

「ア、佳い景色だ。この川ですか青砥藤綱が錢を落したといふのは。」

「さうださうです。」と愛子は例の如く言葉が少ない。

「何が釣れるのだらう？」と男は僕を見下す様子、愛子も僕を見て居るに違ひない。僕は海水浴用の鍔の廣い麥藁帽を被つて居るから横顔すら上からは見えないのである。僕は驚ですと言つて帽子を取つて見上げてやらうかと思つたが止した。

「何が釣れるのだらうね」と男は又言ったが愛子は黙つて居る。愛子は其以前僕と二人で此川に鯉を釣つたことが有るから能く知つて居る筈。

「貴所は釣がお好きですか」と今度は愛子が問うた。

「別に好きといふんでもないが、こんな處でのんきに釣つて居たら面白からうと思ひます。貴婦は如何です釣は。」

「私は釣を仕たことはありません。」

「さうでせうね、婦人の遊びや無いのだから。」

「でも亞米利加あたりでは貴婦人が釣を致さうぢやア御座いませんか。」

「さうかも知れません。銃獵さへ爲るといひますから然し日本でも愛子さんのやうな氣象の方なら何だつて出来ますよ。」

「今度此河に釣に来て見ませうか。」と愛子は初心らしい聲で言つた。

「明日だつて可。」

「さうですね。」

間もなく二人は材木座の方に去つて了つた。僕は帽の廂を少しあげて一寸二人の後姿を見た。愛子は十九の昔も二十五の今も様子が全然同じである、男は脊の高い肩の怒つた體格、ステッキを曳ずつ

て體軀を揺つて歩く様子は其心頭、妻もなく子もなく唯今の樂みに夢中になつて居るらしい。

僕は糸を巻き、竿を擔いで濱に出た。秋の空高く晴れ、沖なる海は果もなく空に連なり、大島の影鮮やかに波の上に浮び、眞帆片帆は西に傾く日を受けて白く、成程佳い景色である。砂山の下に腰を下して、僕は色々考へた。いふまでもなく愛子のこと就いて、冷やかに考へた。そして透明に、恰度秋の其の如くに。

何故自分は其昔、彼女にあゝまで夢中になつたらう。

彼女の心は彼の時も今も同じことであらうか。今も戀して居るのだらうか。

寛といふ男の心は自分の昔と同じであらうか。戀に燃えてるのだらうか。

戀といふものは幾度相手が變つても同じやうに熱し且つ楽しいものであらうか。

僕は種々の問を出して其答を得ようとしたけれどもなか／＼數學のやうに式が立たない。其處で僕は先づ杉愛子の十八の時、僕と相知つてから後、二人が戀で夢中になつた時のことを想ひ起した。

それからそれと想ひ起すに連れて、當時二人の情の清くして深く、高くして哀しきを思ひ二人とも未だ世の塵に染まないうで偏へに理想の境を仰ぎつゝ、或時は歌ひ、或時は月光流水の如き下に相擁して泣いたことなどを思ひだした。

當時の愛子を思ふと、罪のない少女といふの外、如何に冷やかに考へても、別に鑑定の下しやう

がない。どうせ人間だから彼女とても當時既に種々の邪惡を有して居ただらう。しかし其爲に其時の戀の純潔なると熱誠なるとを疑ふことは出来ない、外の人には出来ても僕には出来ない。僕は其頃のことを思ひだすと、今でも楽しい夢路を辿りつゝ何處よりともなく風に送られて来る哀しい懐かしい優しい笛の音を聞くやうな氣がして来る。

其處で僕は一の斷案を下し得る、曰く柏田勉と杉愛子の戀は所謂る神聖なるものであつたと。で自分が愛子に夢中になつたのも決して怪しむに足りないのみならず、愛子も亦た自分に夢中になつたのも當然である。

けれども、それならば愛子と何故結婚後半年も經つか經たぬに其戀人を捨てたか。曰く、戀が醒めたからである。外來の事情は色々あつたに違ひないが、其事情に動かされたのは心の力、則ち戀が消えたからである。何故消えたらう。

其處までは解らない。恰度何故戀したといふことが解らぬ如く、これは解るものでないけれども愛子の其後の舉動に就いて推測すれば、僕は一言ふことがある。曰く僕が鼻について來たのだ。其處で愛子の性質がやゝ解つて來る。命をかけて？少くとも少女心の後先を考へないで無我無中に突進して漸く遂げた戀すらも、時が経てば其男が鼻に付いて堪らなくなる女。其女が其後、男を作らへては又た鼻につき忽ち得て忽ち捨てるは怪しむに足りないのである。

そして男といふ奴は元來助平に出來て居るから愛子のやうな外見極めて柔和温順貞淑に見えて、實は大膽不敵な女が、靜かに近づいて來れば、直ぐ自惚れて了ひ忽ち捕獲せられて了う。

僕のは戀であつた、然し愛子はそれを世間でいふ情の如くに打壞して了つた、そして其後愛子は情を戀の如く見せかけて、多くの眞面目な青年や、浮氣な男を甘くあやなして其時其時の情慾を充たして來たのである。

故に僕は遂に斯ういふ最後の斷案を下した。戀と夫婦の愛と情と此三つは別なものであると。愛子は戀の深くして哀しきよりも、情の艶くして楽しきを好み、そして遂に夫婦の愛の淡くして清く、哀樂兼ね備はり、理義の滋味を加へて「時」のために容易に腐らざる味を知らない。

寛は愛子の艶き情に動かされて、遂に夫婦の愛を無視するに至つたのだらう。年甲斐もなく。然し寛は愛子に對する情を戀だと思つてぬるかも知れない。又戀かも知れない。猛烈な戀かも知れない。ひそかに紙治を以て任じ、泣いて居るかも知れない。しかし少くとも愛子は小春ではない。今の僕は御存知の通り、妻あり子あり、昔の戀は夢の如く覺めて、別に平穩な世界に住んで居る。であるから寛のことを思ふと、氣の毒でならない。紙治の悲劇は義太夫で聞いてこそ泣きもすれ、實際に演じては餘りに馬鹿々々しく、お三の役に廻された者は餘りに可哀さうである。

そして愛子の舉動は如何にも憎い。然しあの女が其以前、戀の川邊に泣いたかと思ふと僕には又、

遣る瀨ない悲痛が起る。

何とか仕て呉れようと色々考へた末、あの二人に此鎌倉で會つて見ようと決心した。

下

今更二人に會つて見た處で如何する積りかと君は怪しむかも知れないけれども僕の決心には二の理由がある。其の一は理由といふよりは誘惑であらう。

兎も角も會つて見たいといふが則ち誘惑。僕が突然名乗り出たら二人はどんな顔をするだらう。寛は僕のことには知らないだらう。けれども愛子は寛の前で僕を如何取扱ふだらう。と思ふと一寸、

此式を立て、見たい氣もするのである。

次には、僕の力に出来ることなら、寛を説いて其家庭に復したい。又、愛子と語つて早く一生の計を立てさせたい。今のまゝで押しゆけば、愛子は遠からず寛を捨てるだらう。そして又遠からず他の情人を作るであらう。遂に其將來は如何なる。

僕の愛を踏みつけて去つたほどの女ゆゑ、如何ならうと僕の知つたことでは無い筈でありながら昔の清き少女なりし愛子と思ふと、さうは行かない。

其處で材木座なら多分光明館と當をつけ今朝早く長谷なる我宿を出た。若し濱で出遇でもするな

ら猶ほ妙と、毎朝散歩する様に、波打際を歩き滑川の川口迄來ると二人が此方に向いてやつて來る。

僕は川の此方に立ち、二人は彼方の水際に立ち川幅三四間を隔て、僕と愛子は顔を見合はした。

僕は黙つて居る、愛子も黙つて居る。喜怒哀樂を容易に顔に出さない彼女は、眞面目な顔をして僕を見て居たが、靜に踵を轉じかゝつた。

「愛子さん！」と僕は一聲呼んで、直ぐさま膝までも届かない此川口の瀨を渡つた。

寛ならんと思ふ男は驚いて僕を見て居る。

僕は三年前、新橋の停車場で一度愛子に遇つたことが有る。其時愛子は笑味を含んで僕に近づき、「しばらくで御座いました」と言ひさま、手を伸して握手した。そして僕と愛子は二言三言挨拶の言葉を交し平然として分れた。僕は其時の愛子の度胸を知つて居るから、川を渡るや、

「愛子さん如何しました、暫くですな」と言ひながら其傍にづかゝと寄つた。

「まア珍しい處でお目にかゝりました。其後お變りも御座いませんか。」と愛嬌ある言葉、例の如く手を差出したから僕も握手した。

「難有う、相變らずよぼ／＼して居ます。」と言ひ終るや直ぐと傍の男に向ひ、

「イヤ初めてお目にかゝります。僕は青木と申しまして、愛子さんとは子供の時からのお友達で御座います。」と出たらめをやつてのけた。

「私は寛と申します。宜しく。と言葉少なに物慣れた舉止、そして頗る澄して御座る。お見受申すに紙治氏三十三四。」

「どうでせう。甚だ失禮ですが愛子さんを五分間ほど貸して戴きたう御座いますが、實は二人だけで話したい馬鹿々々しい可笑しな話もあるので。」と思ひきつて無様に言ふと、愛子は少し狼狽へて、「青木さん、何の話です、二人で話すつて、可ぢやありませんか寛さんが居らしたつて！」と笑を帯びて言ふ處は巧いもの。

「處が不可ないのでですよ。」と僕も笑つて言ふと、

「愛子さん、それでは私散歩して居るから、青木さんと悠然お話しなさいな、別に私共は用事があるわけでもないのだから」と言ひつゝ、寛は二三歩踏み出した。愛子も其後に従つて行きかけたから僕は目でこれを止めた。寛は大股に歩いて材木座の方に引きかへし、忽ち數十歩の間が離れた。波の音で最早何を言つても聞えない。僕と愛子は緩かに歩きながら、

「愛子さん眞實に暫くしたねえ」と僕は親しく言ひかけた。

「眞實ですね、何時か新橋でお目にかゝつたきりですね」と言ひつゝ、砂ばかり見て居る。

「貴女と此處に住んで居た時から最早六年になりますよ。」

「最早そんなになりますかね、此間のやうですが早いものですね。」

と言つて愛子は嘆息をした。

「以前のことを思ふと夢のやうですね。」

「けれども彼の夢は楽しう御座いましたね。」

と言つて愛子は一寸僕の顔を見たが又直ぐ下を向いて終つた。

「しかし最早醒めて了つたから仕方がありません。其後貴女は度々楽しい夢を見ただせう面白い夢

を？」

「貴所はさうお思ひになつて？」

「たゞ聞いて見るのですよ。」

「それなら申しますが私は、貴所と二人で見た夢ほど楽しい夢を見たことはありませんよ、其後。」

「それは當然です。あの時の眞實の戀ですもの浮氣の沙汰ぢやアなかつたのです。だから楽しみ裏に深い哀みがあり、能く貴女も泣いたぢやありませんか、その戀を泥の中に沈めたのは貴女ぢやありませんか。」

「だから私は今でも時々思ひだして悔んで居るのでよ。」

「浮氣を爲る暇々にですか。」

「貴所は酷いことを言ひますね。」

「それぢやア彼の寛とかいふ人は彼方の何ですか？」と切り込んだ。愛子は暫く黙つて居たが、
 「こんなことを聞いて私を苦しめんでも可いぢやア御座いませんか。私は最早一生獨身と決定して居
 るのですよ。」

「それが可いでせう、自由で。」

「さうですよ、死にたい時に死ねますから。」

と言ふ聲は半分泣いて居る。僕も何時しか釣りこまれて、

「けれども、愛子さん！獨身でも何でも可いから早く生涯の目的を定めて眞面目な生活を送るやう
 になさると、終には眞實に死んでも足りないほどの淺ましいことになりますよ。」

「難有う御座います。如何か貴所、此の先私の力になつて下さいな、ね」と言つて僕に寄り添つた。
 力になることは情人になることである。僕が第三の紙治になることである。けれども僕は不幸にし
 て愛子の御意に應じ兼ねた。

「だつて寛さんが力になつて居るぢやア有りませんか。」

「あんな人、力にも何にもなるもんですか。」

「最早鼻に着きましたか」と言ふや直ぐ大聲を揚げて、

「寛さん」と呼んだ。寛は砂に引上げた船の横に腰をかけて二人を待つて居たのである、僕は愛

子におかまひなく、其傍に急いでゆき、

「イヤ大變お待せ申しました。」

「どう致しまして。」

二人とも無言で居る所へ愛子が來たので僕は笑ひながら寛に向ひ、

「愛さんが今、力になつて呉れる人がないとこぼして居ましたから、貴所何卒か何分宜しくお願
 ひ致します。左様なら。」と言つて僕は直ぐ踵を轉らした。

滑川を渡る時振り返つて見ると、二人は並んで歩いて居る。

君、君は小説家である。人間の研究者である。だから以上詳しく申上げて問ふ、鎌倉婦人は毒婦
 だらうか、ハイカラ毒婦だらうか。

僕は君等の所謂る本能満足主義の勇者だと思ふ以て瞑すべきであらう。

神の子

上

「君は能く死といふことをいふが、僕は死なんといふことは思つたこともない。思つた處で仕方がないではないか、生あるもの必ず死あり、當りまへのことで別に不思議は爲さうなものだ。如何だねと仔細らしい顔附をして髭を撫でながら一人が言つた。對手は年頃二十七八、神經質らしい顔附をした色白の男である。」

「さうサ、不思議はないと思ふものには不思議はなく、不思議だと感ずるものには不思議なのだ。」

けれども聞くが君は果して死を不思議でないと思つたことがあるだらうか。」

「無論ある、何時もさう思つて居る」と、髭の男は身を反して自信の厚さを示した。

「眞實に思ふか？」

「眞實に思ふかは情ないね」と微笑を含んで言つた言葉は眞實に情なさうである。

「イヤ別に情ながるにも及ばない。世の中に死を不思議とも不思議でないとも思はず、實は初から死などいふことを思つたこともない癖に、死のことを語るを一概に無川の辯としてこれを嘲る輩

が随分少くないからね。」

「實は僕もそれなのだ。」と髭は頭を搔いた。

「さうだらう、だから眞實に思つたかと聞いたのだ。」

「それなら言を更めるが僕は死など思はないでも澤山だと思ふ、全く無益なことだと思ふ。」

「眞實にさう思ふかね。」

「眞實にさう思ふ、今度こそ眞實にさう思ふ。」

「さうか、それなら可いが、世の中には死を思ふことの無益か有益か、そんなことを眞實心から思ひめぐらしたこともない癖に、自から欺むいて自分は左様いふ思想を持つて居ると公言する輩が幾多もある。さういふ輩は死の不思議など無論思つたこともなく、又死と思ふことの如何をも實は思ひめぐらしたこともなく、てんで死などいふことには一切無頓着なので君もその一人ではないかと僕は思ふのだが、如何いふものか知らん。」と色白の男は何處までも冷かにいふ。

「さうだ、さうだ、全く無頓着なのだ。」

「寧ろ無感覺といった方が適切だらう。」

「可し、可し、無感覺でも可らしい。全く死なんといふことには無感覺なのだ。けれども僕は無感覺結構と思ふ。」

「眞實に思ふかね？」

「又か」と髭は苦笑して「よろしい！、今度は眞實にさう思ふ、以前は知らず、今さう思ふ。」

「何故さう思ふのだ。」

「理窟は知らない、たゞ無感覺結構と思ふのだ。」

「それは強辯に過ぎない！君の眞實のことは僕の方が能く知つて居る。君はたゞ夫れ無感覺なので、君はそれを認識すれば可いのだ、結構も結構でないも入らんことだ。理窟を知らない者が是非をいふ権利はない。」

「それでは君は如何だ、君が僕に反對する理由を承まはらう。」と政治問題でも討論するやうな口調で髭は卓をトンと敲いた。對手は靜かに、

「反對もなにも爲ない。君は死に無感覺、僕は其反對、此二個の事實を正直に認識した丈けだ。」

「可ろしい。それでは君が死なるものを思ふことの利益なる理由を承はらう。」

「死は事實だよ。僕は利益が有るからこれを思ふのではない。たゞ此事實を視て、これが不思議を感じざるを得ないのだ。君は此事實を視す、これを感じないのだ。無感覺が結構か不結構か、そんなことは問題となり得ないのだ。」

「問題になるとも、大になる。そして僕は無感覺なるが故に一の不利益を來たしたくない證據

に依つて、無感覺結構を賛成し主張する。」

「何故君等の心はさう不正直で、自から欺き且つそれを誇らうとするのだらう。死なる事實を感じないものが、如何して無感覺の利や不利を研究するだらう。若し僕が君ならば「成程自分は死なる事實に無感覺であつた」と自分の心の状態を認識するだけで、それが利かは問題とならない、といふのは自分が死なる事實を感じたる心の状態を経験しないから第一、比較することが出来ない。比較することの出来ないのに如何して結論することが出来る。」

「負けた、負けた、君は豪いよ！哲學者だ、けれども終に臨んで一言するが、全くの處僕はたゞ生を思ふばかり、死を思ふの暇がないのだ。」と兩手で腮を支へ、靴の爪先で床をコツコツと鳴らす。

「生を思ふとは？」と若い男は眞面目である。

「生とは生命さ、現にお互、斯うやつて生きて居るぢやアないか。」

「それを君は思ふと言ふのか。」

「さうサ、生きて居るうちは生きて居ることを思ふの外、別に妙案もないやうだ。」

「矢張君は自から欺むいて居る。」

「何故や、何故や。正直さうぢやアないか。君だつて現に生命を有して此天地に存在して居るぢやないか。」

「勿論。然し君はその存在を自覺して居るかね？ 恐くさうであるまい。」

「これは怪しからんことを言ふ。生きて居るものが生きて居ることを自覺しないで如何するものか。君は妙にひねくつて僕をからかうね。」

「決して、か、かはない。僕は常に思つて居る、千萬人の中生存を自覺するものは殆ど稀だらうと。」

人は死を感じる者の少ない如く人は自己の生存を自覺する者はめつたにないのである。」

「けれども現に生きて居て、生きて居ることを知つて居るぢやアないか。」

「たゞ生きて居るから生きて居るので、犬もさうだ。」

「人と犬とは一緒にならない。」

「さうサ、幾千か違ふだらう。けれども犬も動物、人も動物、犬は生命の約束に従つて生命を保つことを力め、人も其通である。たゞ人は社會を作つて居るから、生命を保つ上に多少複雑になつて居るばかりだ。」

「君の言ふことは何のことだか解らない、今日は失敬しよう、何れ其中高論名説を承りたいものだ。」
「それぢやア止さう。」

下

若い男は髭の友に別れて一人家路を辿りながら色々と考へたのである。

「成程自分の言ふ處は人に解るまい。殊に彼の友などには解るまい。然しこれは到底人から人へ、心から心へ傳へることの出来ない感ではあるまいか、若しそれならば辯を費やす程無益で黙つて彼の人達の言ふまゝに言はさして置く外に仕方がない。」と思つた。けれども彼はさう思ふや、言ふべからざる孤獨を感じたのである。

其夜は殊に月が冴えて居たので、彼は家を出て野を歩いた。林の間の小路を行くと、行く手邊に笛の音がするので、其音を當に林を分け入ると、小さな湖水の濤へ出た。冬枯の林は鏡のやうな水面に其影を涵し、湖水の奥は銀色の霧に包まれて朧に光つて居る。

彼は最初、笛の音の起る處は湖の底深に神祕の宮居ならんと思ひ、耳を澄して水際に立つて居ると其音の妙なる、彼は魂を動かし、永遠の倂を見る心地し、今更我生存の嚴然として動かすべからざる事實に感じ、無窮の天地に介立する此生の孤なるを感じて思はず岸に伏して聲を放つて泣いた。

暫くして頭を上げると、一艘の小舟が此方を指して漕ぎ寄せるのを見た。近づくまゝに見る舟には一人の翁と一人の少女とが乗込んで居る。

舟は岸に着いた。翁と少女は彼の傍に來た。翁は笑味を含んで、

「泣いて居たのはお前かな」と優しく問うた。

「さうです、私です。」と彼は静かに答へつゝ、少女を見ると、手に一管の笛を持つて居たのである。
 「何故泣いたのかね、何が悲しいのだね。」と翁の言葉は何處迄も柔和なれど、其顔には犯す可からざる威厳が備はつて居るので、彼は畏敬の念に打たれつゝも、

「私は天地生存の感に堪へないので泣きました。」

「何時でも其感に堪へないかね？」

「何時でもは御座いません、時々で御座います。けれど其時々之感は恰も電のやうに小子の心を射るので御座います。」

「そしてお前は其電光に照して日常の生活の暗黒を見るだらう。そしてお前は何時も此電光の中に住んで居たと思ふだらう。」

「さうで御座います。若し私を此先に導いて呉れるものがあるなら、それこそ私の神で御座います。」翁は此言葉を聞いて微笑し、

「まづお前に聞きたいのはお前が時々打たれるといふ其電の模様だ、それを詳しく話してお呉れ」
 「刹那の感で御座いますから一口で申されます。或夜のことでした。真夜中にふと眼が覺めました。夜は更け萬籟寂として居ました。私は眼は開いて床の上に身動きもしませんでした。其時です、私は卒然、我生命の此大いなる、此無限無窮なる宇宙に現存して居るのを感じたのです。そして言ふ

べからざる畏懼の念に打たれたので御座います。

又或時です、小子は友の家から途を急いで町を行くと、秋の日は西に傾むいて斜に其鮮かな光を家並に投げ、町をゆく人々の影長く地に這うて居ました。子供は群で遊び、飴賣の太鼓は虚空に響き渡り、道普請の男は鶴嘴を振つて居ます。私は此間を何心なく歩いて居ましたが、思はず我を顧みて、我も亦此生を此天地に享け、消えてゆく此世の一片として此悠久にして不思議なる宇宙に生きて居る魂ぞといふ感に打たれたのです。あの時の私の眼には目に見る世の様を直に過去に移し、此身をも過去の人として見たのであらうと思ひます。その外、或は高山の頂に立つて落日の光を送る時或は多人数の席上に坐して衆人の喋々と共に喋々し、ふと窓外の白雲に眼を轉じた時、或は砂山を歩いて種々の空想に耽つた後、卒然我に復つた時、私は此生を此天地の間に見出すのです。

老翁は聞き終つて嚴かなる面持し、

「それならば平常は如何だね？」

「紛々たる世の中に身を入れて、月が美だとか、敵とか味方とか、意志とか感情とか獨立とか自由とか、英雄とか凡夫とか、戀とか夫婦とか申して、感じて、唱へて、酒に酔ひ、肉の味を嘆美へ、富とか貧とか、彼の人は堅いとか、彼の人は感心だとかいふことを話し合つて暮して居るのです。けれども要するに死は冷笑して總てを支配し、私共はそれを忘れて可い氣になつて居るのです。」

「犬と相去る一步とお前が今日友に話したのは其處だ。お前は未だ幸福だ、泣け、泣け、社會生存の暗室から、天地生存の事實を直視する人は、人の中の最も進んだ人で、やがてそれは神の子だ。」
「總てを捨て、乃公に従へ！」

二一 少女

上

夏の初、月色街に満つる夜の十時ごろ、カラコロと鼻緒のゆるさうな吾妻下駄の音高く、芝琴平社の後のお濠ばたを十八ばかりの少女、赤坂の方から物案じさうに首をうなだれて来る。

薄闇い狭いぬけるじの車止の横木を俛つて、彼方へ出ると、琴平社の中門の通りである。道幅二間ばかりの寂しい町で、(産婆)と書いた軒燈が二階造の家の前に點いてゐる計りで、暗夜なら眞闇黒な筋である。それも月の十日と二十日は琴平の縁日で、中門を出入する人の多少は通るが、實、平常、此町に用事ある者でなければ餘り人の往來しない所である。

二 少女

少女はぬけるぢを出るや、そつと左右を見た。月は中天に懸つてゐて、南から北へと通つた此町を隈なく照らして、森としてゐる。人の住むて居ない町かと思はれる程で、少女が(産婆)の軒燈の前まで来た時、其二階で赤兒の泣聲が微かにした。少女は頭を上げてちよつと見上げたが、其儘すぐ一軒置いた隣家の二階に目を注いだ。
隣家の二階といふのは、見た處、極く軒の低い家で、下の屋根と上の屋根との間に、一間の中窓

が窮屈さうに挟まつてゐる、其窓先に軒がさも鬱陶しく垂れて、陰氣な影を窓の障子に映じてゐる。少女は此二階家の前に來ると暫時く佇立つて居たが、窓を見上げて「江藤さん」と小聲で呼んだ、窓は少し開いてゐて、薄赤い光が煤に黄んだ障子に映じてゐる。

「江藤さん、」と返事が無いから、少女は今一度、やはり小聲で呼んだ。

障子がすつと開いたかと思ふと、年若い姿が腰から上を現はして、

「誰だ？」

「私。」

「オヤ、田川さん。」

「少し用事が有つて來たのよ、最早お寢？」

「オヤさう、お上がんなさいよ、でも未だ十時が打たないでせう。」

「晩く來てお氣の毒様ねエ」と少女は少しもぢくして居る。

二階の女の姿が消えると間もなく、下の雨戸を開ける音がゴト／＼して、建附の歪んだ戸が漸と開いた。

「オヤ好い月だ事ね、田川さんお上がんなさいよ。」といふ女は今年十九、歳には少し老けて見ゆる方なるがすらりとした姿の、氣高い顔つき、髪は束髪に結んで身には洗曝の浴衣を着けて居る。

「ちよつと平岡さんに頼まれて來た用があるのよ、此處でも話せますよ、もう遅いもの、上ると長座なるから。……」と今來た少女は言つて、笑を含んでゐる。それで相手の顔は見ないで、月を仰いだ目元は其丸顔に嗜好しく、品の好い愛嬌のある小軀の女である。

「用といふのは大概解つて居ますが、色々話もあるから一寸お上んなさいよ。」

「さう、あの局の歸りに來ると宜いんだけど、家に急ぐ用が有つたもんだから……」

といひ乍ら二人は中に入つた。

入ると直ぐ下駄直しの仕事場で、脇の方に狭い階段が附いてゐて、仕事場と奥とは障子で仕切つてある。其障子が一枚開かつてゐたが薄闇くつて能く内が見えない。

「遅く來つて御氣の毒様、」と來た少女は軽く言つた、奥に向つて。

「どう致しまして、」と奥で啞た聲がして、續て咳嗽がして、火鉢の縁を叩く煙管の音が重く響いた。

「この亂暴さを御覽なさい、坐る所もないのよ。」と主人の少女はみし／＼と音のする、急な階段を先に立つて陞つて、

「何卒此處へでも御坐んなさいな。」と其處らの物を片附けにかゝる。

「すこし頼まれた仕事を急いでゐますからね、……源ちゃん、お床を少し寄せますよ。」

「いゝのよ、其様してお置きなさいよ、源ちゃん最早お寢み、」と客の少女は床なる九歳ばかりの少

年を見て坐り乍ら言つて、其のこやかな顔に笑味を湛へた。

「姉さん、氷！」と少年は額を少し擧げて泣聲で言つた。

「お前、さう氷を食べて好いかね。二三日前から熱が出て困つて居るんですよ。源ちゃんそら氷。」

主人の少女は小さな箱から氷の片を二ツ三ツ、皿に乗せて出して、少年の枕頭に置いて、「もう此限ですよ、また明日買つてあげましょねエ」

「風邪でもおひきななつたの？」と客なる少女は心配さうに言つた。

「もう快いんですよ。熱いこと、少し開けましょねエ」と主人の少女は窓の障子を一枚開け放した。

今まで蒸熱かつた此一室へ冷たい夜風が、音もなく吹き込むと「夜風に當ると悪いでせうよ、私は宜いからお閉めなさいよ」と客なる少女、少年の病を氣にする。

「何に、少しは風を通さないと善くないのよ。御用といふのは缺勤届のこととせう、」と主人の少女は額から頬へ垂れかゝる髪をうるさうに撫てあげながら少し體軀を前に屈めて小聲で言つた。

「ハア、あの五週間の缺勤届の期限が最早されたから何とか爲さらないと可けないツて、平岡さんが、是非今日私に貴姉のことを聞いて来て呉れるツて……明朝は私が午前出だもんだから……」

「成程さうですねエ、眞實に私は困まツちまつたねエ、五週間！もう其様になつたらうか、」と主人の少女は嘆息をして、「それで平岡さんが何とか言つて？」

「イ、エ別に何とも仰らないけエど、江藤さんは最早局を止すのだらうかつて。貴姉どうなさるの」

「ソ、夫れで實は私も迷つてゐるのよ」と主人の少女は嘆息をついた。

客の少女は密と室内を見廻した。そして何か思ひ當ることも有るらしく今まで少し心配さうな顔が急に爽々して満面の笑味を隠し得なかつたが、ちよつとあらたまつて、

「實は少々貴姉に聞いて見ることがあるのよ、」と一段小聲で言つた。

「何に？」と主人の少女も笑ひながら小聲で言つた。これも何か思ひ當る處あるらしく、客なる少女の顔をぢつと見て、又た密と傍の寢床を見ると、少年は兩腕を捲り出したまゝ能く眠つてゐる、其手を靜かに臥被の内に入れてやつた。

「怒つちや可けないことよ」と客の少女はきまり悪るさうに笑つて言出し兼ねてゐる。

「凡そ知ツてゐるのよ、言つて御覽なさい、怒りも何もしないから。可笑しな位よ、」と言ふ主人の少女の顔は羞恥さうな笑のうちに何となく不穩のところが見透かされた。

「私の口から言ひ悪くいけれど……貴姉大概解かつてゐませう……」

「私が妾になるとか成つたとかいふ事なんでせう。」

と言つた主人の少女の聲は震へて居た。

此二人の少女は共に東京電話交換局の交換手であつて、主人の少女を江藤お秀といふ、客の少女は田川お富といひ、交換手としては兩人とも老練の方であるがお秀は局を勤めるやうになつた以來、未だ二年許りであるから給料は漸と十五錢であつた。

お秀の父は東京府に勤めて三十五圓ばかり取つて居て夫婦の間にお秀を長女としてお梅源三郎の三人の兒を持つて、左まで不自由なく暮らしてゐた。夫れでお秀も高等小學を卒へることが出来、其後は宅に居て針仕事の稽古のみに力を盡す傍、讀書をも勉めてゐたが恰度三年前、母が病ついで三月目に亡くなつて、夫れを嘆く間もなく又た父が病床に就くやうに成りこれも二月ばかりで母の後を逐ひ、三人の兒は半歳のうちに兩親を失つて忽ち孤兒となつた。さうして殆ど丸裸體の樣で此世に残された。

そこで一人の祖母は懇意な家で引受けることになり、お秀は幸ひ交換局で交換手を募つて居たから直ぐ局に勤めるやうになつて、妹と弟は兎も角お秀と一緒に暮してゐた。それも多少は祖母を引受けた家から扶助でもらつて僅かに糊口を立てゝゐたので、お秀の給料と針仕事とでは三人の口はとも過活されなかつた。しかしお秀の勞働は決して世の常の少女の出来る業ではなかつた。あちら

此方と安値さうな間を借りては其處から局に通つて、午前出の時は午後を針仕事に、午後出の時は午前を針仕事に、少しも安息む暇がないうちにも弟を小學校に出し妹に自分で裁縫の稽古をしてやり、夜は弟の復習も驗てやらねばならず、炊事から洗濯から皆な自分一人の手でやつてゐた。

其うち物價は次第高くなり、お秀三人の暮は益々困難に成つて來た。如何するだらうと内々局の朋輩も噂してゐた程であつたが、お秀は顔にも出さず、何時も身の周圍小清潔として左まで見悪い衣装もせず、平氣で局に通つてゐたから、奇怪なことのやうに朋輩は思つて中には今の世間に能くある例を引いて善くない噂を立てる連中もあつた。

すると一月半ばかり前からお秀は全然局に出なくなつた。初は一週間の病氣届、これは正規で別に診断書が要ない、其次は診断書が付て五週間の缺勤届。其内五週間も経た、お秀は出て來ないのみならず、缺勤届すら出さない。いよいよ江藤さんは妾になつたといふ噂が誰が口からともなく起つて、朋輩の者皆んな喧嘩騒ぎ立てた、遂に係の技手の耳に入つた。そこで技手の平岡は田川お富に頼むで、お秀の現状を見届けた上、局を退くとも退かぬとも何とか決めて呉れると傳言したのである。お富は朋輩の中でもお秀とは能く氣の合つて親密い方であるからで。

しかしお富が局を缺勤でからもお秀とは二三處會つて多少事情を知つて居る故、かの怪しい噂は信じなかつたが、此頃になつて、或といふ疑が起らなくなかつた。といふのもお秀の祖母といふ人が餘

り心得の善い人でないことを兼ねて知つてゐるからで。
お富はお秀の様子を一目見て、もう殆んど怪しい疑惑は晴れたが、更らに其室のうちの有様を見
てすつかり解かつた。

お秀の如何に困つて居るかは室のうちの様子で能く解る。兼ねて此部屋には戸棚といふものが無
いからお秀は其衣類を柳行李二個に納めて室の片隅に置いてゐたのが今は一個も見えない、そして身
には浴衣の洗曝を着たまゝで、別に着更へもないやうな様である。六疊の座敷の一疊は楷子段に取
られて居るから實は五疊敷の一室に、戸棚がない位だから、床もなければ小さな棚一つない。

天井は低く疊は黒く、窓は西に一間の中窓がある計り東のは眞實の呼吸ぬかしといふ丈けて、室
のうち何處となく陰鬱で不潔で、とても人の住むべき處でない。

簿記函と書いた長方形の箱が鼠入らずの代をしてゐる、其上に二合入の醤油徳利と石油の罐とが
置いてあつて、箱の前には小さな塗膳があつて其上に茶碗小皿などが三ツ四ツ伏せて有る。其横に
眞黒に煤ぼつた涼爐が有つて凸凹した薬罐がかけてある。涼爐と膳との蔭に土鍋が置いて有つて其
に飯七が添へて有るのを見れば其處らに飯桶の見えぬも道理である。

又室の片隅に風呂敷包が有つて其傍に源三郎の學校道具が置いてある。お秀の室の道具は實にこ
れ限である。これだけがお秀の財産である。其外源三郎の臥て居る布團といふは見て居るのも氣の毒

なほどの物で、これに姉と弟とが寝るのである。この有様でもお秀は妾になつたのだらうか、女の
節操を賣つてまで金銭が欲しい者が如何して如此な貧乏の有様だらうか。

「江藤さん、私は決して其様なことは眞實にしないのよ。しかし皆なが色々なこと言つてゐますか
ら或と思つたの。怒つちや宜ないことよ、」とお富の聲も震へて左も氣の毒さうに言つた。

「否エ、怒るところか、貴姉宜く来て下さつて眞實に嬉しう御座います、局の人が色々なことを言
つてゐるのは薄々知つてゐましたが、私は無理はないと思ひますわ……」と、さも悲しげにお秀は
言つて、ほつと嘆息を吐いた。

「何故。私は口惜いことよ、よく解りもしないことを左も見て来たやうに言ひふらしてさ。」

「私だつて口惜いと思はないことはないけれど、あんな人達が彼是れ言ふのも尤ですよ、貴姉……
祖母さんね……」とお秀は口籠つた、そしてじつとお富の顔を見た目は濡むでゐた。

「祖母さんが何とか言つたのでせう……眞實に貴姉はお可哀さうだよ……」とお富の眼も涙合むだ。
「祖母さんのことだから他の人には言へないけれど……そら先達貴姉の來ていらつしやつた時、祖
母さんがあんな妙なことを言つたでせう。處が十日ばかり前に小石川から來て私に妾になれと言は
ないばかりなのよ、あのお前の思案一つでお梅や源ちゃんにも衣服が着せてやられて、甘味ものが
食べさされるツて……」

「それで妾になれつて?」「お富は眼眶を袖で摩つて丸い眼を大きくして言った。
 「否、妾になれつて明白とは言はないけれど、妾々つて世間で大變悪く言ふが藝者なんかと比較する
 と幾何いゝか知れない、一人の男を旦那にするのだからつて……まあ何といふ言葉でせう……私は
 口惜くつて堪りませんでしたの。矢張身を賣るのは同じことだと言ひますとね、祖母さんや同胞の
 ために身を賣るのが何が悪いって……」

「まあ其様なことを!」

「實、私も困り切つてゐるに違ひないけれど、いくら零落ても妾になぞ成る氣はありませんよ。私に
 はそんな淺間しいことが何で出来ませうか。祖母さんに、どんな事が有つても其様な眞似は私にはしな
 い、私のやれる丈けやつて妹と弟の行末を見届けるから心配して下さるなと言切つて其の時餘り口
 惜かつたから泣きましたのよ。それからね寧のこと針仕事の方が宜いかと思つて暫時局を缺勤むで
 やつて見たのですよ。しかし此頃に成つて見ると矢張仕事ばかりぢやア、有る時や無い時が有つて
 結局が左程の事もないやうだし、それに家にばかりゐるとツイ妹や弟の世話が餘計焼きたくなつて
 思はず其方に時間を取られるし……ですから矢張半日づゝ、局に出ることに仕ようかとも思つて居
 たところなんですよ。」

「ですから今の處、とても私一人の腕で三人はやりきれない!小石川の方へも左迄は請求れないも
 んですから、お梅だけは奉公に出すことにして、丁度一昨々日か先方へ行きましたの。」

「まあ何處へなの?」

「ぢき其處なの、日蔭町の古着屋なの。」

「おさんどんですか。」

「ハア。」

「まあ可哀さうに、やつと十五でせう?」

「私も可哀さうでならなかつたけれど、つまり私の傍に居た處が苦しいばかりだし、又た結局あの
 暫時は辛い目に遇つて生育つのですから今時分から他人の間に出るのも宜からうと思つて、心を
 鬼にして出してやりました、辛抱が出来ればいゝがと思つて……それ源ちゃんも斯様だし、今も彼
 の裁縫しながら色々なことを思ふと悲しくなつて泣きたく成つて来たから、口のうちに唱歌を歌つ
 てまぎらしたところなの。」

「そして貴姉、矢張局にお出なさいな。その方が宜いでせうよ。それに局に出て多忙の間だけでも
 苦勞を忘れますよ」とお富は眞面目にすゝめた。お秀は嘆息をついて、そして淋びしさうな笑ゝ顔
 に浮かべ、

「ほんに左様ですよ、人様のお話の取次をして何番々々と言つて居るうちに日が立ちますからねエ」と言つて「おほ、ムム」と軽く笑ふ。「女の仕事はどうせ其様なものですわ、」とお富も「おほ、ムム」と笑つた。そしてお秀は何とも云ひ難い、嬉しいやうな、哀れなやうな、頼もしいやうな心持がした。兎も角も明後日からお秀は局に出ることに話を極めてお富に約束したものの、忽ち衣類の事に思ひ當つて當惑した。若い女ばかり集る處だからお秀の性質でもまさか寢衣同様の衣服に着てゆかれず、二三枚の單物は皆な質物と成つてゐるし、これには殆んど當惑した。お富は流石女同志だけ初めから氣が附いてゐた。お秀の當惑の色を見て、

「氣に障へちやいけないことよ、あの……」

「何に、どうにか致しますよ」とお富は少し顔を赧らめて、「おほ、ムム」と笑つた。

「だつてお困りでせう？ 明日私が局から歸つたら母上さんと相談して……四時頃又來ませうよ。」

「あんまりお氣の毒さまで……」

お秀は眼に涙一杯含ませて首を垂れた。お富は何とも言ひ難い、悲しいやうな、懐かしいやうな心持がした。

夜が大分更けたやうだからお富は暇を告げて立ちかけた時、鈴蟲の鳴く音が突然室のうちでした。「オヤ鈴蟲が」とお富は言つて見廻はした。

「窓の處に。お梅さんが先達で琴平で買つて來たのよ、奉公に出る時持つてゆきたいつて……。」
「まだ子供ですもの、ねえ」とお富は立つて二人は暗い階段を危なさうに下り、お秀も一緒に戸外へ出た。月は稍や西に傾いた。夜は森と更けて居る。

「そこまで送りませう。」

「宜いのよ、其處へ出ると未だ人通りが澤山あるから」とお富は笑つて、

「左様なら、源ちゃん御大事に、」と去きかける。

「御壕の處まで送りませうよ、」とお秀は關はず同伴に來る。二人の少女の影は、薄暗いぬけるじの中ちに消えた。

ぬけるじの中程が恰度、麵麩屋の裏になつてゐて、今二人が通りかけると、戸が少し開いて居て、内で麵麩を製造つてゐる處が能く見える。其焼たての香しい香が戸外までぶん／＼する。其焼く手際が見てゐて面白いほどの上手である。二人は一寸立つて見てゐた。

「お美味さうねエ」とお富は笑つて言つた。

「明朝のを今製造へるのでせうねエ」とお秀も笑うて行かうとする。

「ちよつと御待ちなさいよ」とお富は止めて、戸外から。

「その麵麩を少し下さいな。」

三十計の男と十五位な娘とが頻に焼いてゐたが、驚いて戸外の方を向いた。

「お幾價？」

娘は不精無精に立つた。

「お氣の毒さま、これ丈け下さいな、」とお富は白銅一個を娘に渡すと、娘は麵麩を古新聞に包んで戸の間から出した。

「源ちゃんにあげて下さいな、今夜焼きたてが食べさせたいことねえ、そら熱いやうですよ。」とお秀に渡す。

「まあお氣の毒さまねえ、明朝のお目覺にやりませう。」

二人はお塚邊の廣い通りに出た。夜が更けてもまだ十二時前であるから彼方此方、人のゆきゝがある。月はさやかに照つて、お塚の水の上は霞むでゐる。

「左様なら、又た明日。お寝みなさい、源ちゃん御大事に。」お富に淑に辭儀して去かうとした。

「どうも色々難有う御座いました。お母上にも宜しく……それでは明日。」

二人は分れんとして暫時、立止つた。

「ああ、明日お出になる時、お花を少し持つて来て下さいませんか、何んでも宜いの。佛様にあげたいから」とお秀は云ひ悪くさうに言つた。

「此頃は江戸菊が大變よく咲いてゐるのよ、江戸菊を持つて來ませうねえ。」とお富に首をちよつと傾げてニコリ笑つて。

「貴姉の處に鈴蟲が居て？」

「否エ、どうして？」

「梅ちゃんの鈴蟲が此頃大變鳴かないやうになつて、何だか死にさうですから、どうしたら宜いかと思つて。」

「さう、胡瓜をやつて？」

「ハア、それで死にさうなのよ。」

と言つてる處へ、巡查が通り掛つて二人の様子を怪しさうに見て去つた。二人は驚いて、

「左様なら……」

「左様なら……急いでお歸んなさいよ……。」

帽子

春の日の午後四時頃、乗合馬車が一つの驛に止まった。山岸に沿うて流る、溪流が此處で一迂轉する其岸に二三十軒の田舎町が出来て居る。

乗合の客五人ばかりは弾機も有るか無きかの亂暴な馬車で田舎道をがた／＼行られた疲勞を暫時でも休めんと、降りた。自分もその一人。

見ると十二三の童が一人、小さな蓆を敷いて其の上で獅子藝を行つて居る、其周圍に町の子供や怠惰者、兒守娘など十四五人取りかこんで見物して居た。乗合の者二三人もこれに加はつた、自分も其一人。

童は其小さな身體をくる／＼獨樂の様に廻轉て見せる、或は兩手を足にして倒に立つ。見物は譽めたり、笑つたり、冷かしたり、そして銅貨一つ與る者もない。其中馬の仕度が出来て御者は早く乗れと怒鳴り初めた。

自分は銅貨一つ出して、そつと童の傍に投げた、すると自分の傍に立つて居た客の一人が銅貨一つ出すよと見るや、直に手荒く之を童の頭に投げつけた。額に中つて鮮血サツと流れ出る、人々は驚い

たが投げた當人はにやりと冷笑つて馬車の方へのそ／＼行つて了つた。

童はと見ると、血まみれになつた手で投げられたものを拾ひ取り羞恥しさうな笑を含み、見物を見廻したばかり。

馬車に歸ると自分は今の男と差向ひに座を取らされて、さなきだに此男の言葉から態度が二時間前より自分を苦しめて居るのに、これからさき又二時間ばかり膝を突き合はし居なければならぬかと、不快に堪へなかつた。

此男が某町の商人である事は先程からの彼の問はず語りで自分には解つて居た。年は四十二三でもあらうか、骨格逞ましく、木綿の筒袖を着て前垂に中折帽子、其帽子は新調の品で乗合の一人が眞面目か愛嬌か一寸賞めたら、これは先日大坂に上つた時何とかいふ大阪第一の店で買ったのだとか、羅紗が何だとか色々自慢話ありし末、「しかし此様ものは」と、鼻にぬけた聲で話頭を止められた品である。

車中は女が一人、此男が一人、自分の外二人、其二人は多少此男の身の上を知つて居るらしく毎時彼の言ふことに逆らはず合槌を打つを見て、自分は此男が町で中以上の富と勢力とを持つて居るものと推測した。

彼の眼は異様に光つて居る。そして土色を帯びた黒い顔は逞しい鼻と厚い唇とで凄味を加へ、聲

は高くないが人を壓しのけるやうで、折り／＼手荒く自分の額を摩る癖がある。自分は厭悪な男だと思ふ中にも如何しても彼の神経に多少の異常があるものと思はざるを得なかつた、さうだと言つて彼を厭ふ心は少しも薄らがない、何故ならば、人の性格の相違は神経作用の相違とも言へるから純然たる狂人でない限り彼は厭悪な性格の男と言ふことも出来ると思つた。自分は断定したのである。其外彼の顔を見ては種々な感想に耽つて、自分は全く沈黙し、彼等の談話に加はらなかつた。

其處で物語は前に返り、馬の更りしたため馬車は以前より景氣可く走り御者は亦た空模様を氣にしながら、無暗と鞭を加へる、どんより曇りし春の空は夕暮近くなるに連れ益々怪しくなり、山の頂、野の末は既に雨を帯びて來た。

自分は成るべく眼を閉ぢて前の男を見ないようにと力め、談話も耳に入らないやうにと空想を喚び起して其中に身を隠して居た。其中夢心地になつて半ば居睡をして居たが、ふと眼を開けて外を見ると、何時しか雨となつて、春雨しと／＼と野も山も霞み、その静けさ、穩かな景色の中を馬車は飛ぶやうに走つて居た。雨に濡れて綠深き林を過ぎたと思ふと、直ぐ一簇の家村に出て馬車は止まり、一人の客が乗つた。

「ヤア先生、何處へ旅行になりました？」と自分を見て挨拶をする、これは某町に於ける自分の生徒の一人であつたので、二十七八歳の晩學を止め、今では家業に従事して居るのである。彼は自分

に言葉をかけて傍に腰を下し、そして自分の前の男に一寸目禮した。先方は例の帽子に指先をかけたが、互に別に言葉を交さず。

馬車は直ぐ走り出した。自分は談話の對手が出来たので、不快から救はれ、今度の自分の遠足の事など語り、をり／＼外を眺めて居たが、夕暮近く、遠近の茅屋から上る炊烟は絲の如き雨に和して重く軽く樹林を包んで居る景色、田舎慣し自分にも悪くはなかつた。前の厭な男は相變らず他の者と喋舌つて居たが、町へは最早や十町とない所まで來た頃、彼は何と思つたか硝子窓を開けて身體を横に捻て外に頭を出した。其途端例の帽子が飛んだ、彼の對手はあつと驚き、彼も驚き、人々は御者に馬車を止めると叫んだが、御者臺の若者には此事が知れない、馬車はどし／＼走る、此時彼は、

「何、あんな帽子、構ひませんわ！」と低い重い聲で言つて、冷やかに笑みだした。

「だつて、捨てるといふ事はありませんわ」と相手の一人が息急いで言ふ。

「フ、ン！」と言つて、彼は手荒く額を摩つた。

其中馬車が靜かに止つたのが、如何した事かと自分も醉興に窓を開けて、來し方を見ると一人の農夫が、「オイ／＼」と呼びながら帽子を持つて懸命に追駈けて來るのであつた。

間もなく農夫は馬車の傍まで來て、其泥だらけの手にて帽子を捧げながら、麥に手入れをして居た

自分の傍に落ちたから拾つて来て進ぜたとの意を、呼吸づかひ苦しげに、とぎれ／＼に言つた。すると帽子の主は、

「そんな帽子お前に呉れてやる、欲けりや持つてゆけ不飲んなら捨てる！」と言ひ放つた。これを聞いて、さなきだに飛ぶが如き馬車を追駈けた爲め、蒼ざめて凄味を帯びて居た農夫の顔色は土の如く、唇は顫動き、眼光鈍く悲しげに、じつと前の男の顔を見つめて其處に直立つた。餘りの事に何人も一語も發し得ない。

「未か！」と御者臺の男は叫んだ。

「早く出さんか！」と前の男は怒鳴り返した。鞭音高く馬脊に響くや、馬車は遠慮なく駈だした。

前の男は外に帽子なき頭を出して後を見て、

「未だ此方を見て立つて居やがる。フン！」

舌打ちして荒く窓を閉めた。

「折角だから取つてやれば可う御座んすに。」

と對手の一人は僅かに口を開いた。

「何に彼な帽子、拾うたから與れば可え」

「けれど、彼の漢が可憐さうな」

「貰つて結句、嬉しからう」

對手は黙つて了つた。最早餘り口をきく者がない。其中間もなく馬車は町に着いて佇つた。夕闇薄暗く、家々は既に燈を點けて居た。

合乗の者はそれ／＼挨拶をして車を出た。彼の男も外に下りて、駒下駄を爪立て、二足三足歩いたと見るや、アツと叫んで、尻餅をついた。誰も驚ろいて何事かと近づき、彼の知る人は、

「如何したの、如何なされた」と援け起しにかゝつた。動かない、彼は殆ど氣絶の體である。其處で人々は愈々驚き側の店先に擔ぎこんで水を吞すなど、種々介抱すると、漸く正氣づきし如く立上つて四邊をきよろ／＼見廻して居たが、嘎れた聲で、

「皆様今こゝで先刻の漢を見やしませんかの」

「先刻の漢というて何人？」と一人が聞く。

「そら先刻の農夫、あれが今、自分が馬車から出たと思ふと、眼の前にひよつくり出て来て彼の時と同じ顔をして帽子を突き出しましたと思ひなされ……」

人々は殆んど戰慄をした、恐らく何人も其刹那に彼の農夫の顔が何人の眼先には顯はれたらうと思ふ。

兎も角、彼の男を慰めて一同は散じた。

それから三四日経つと、馬車に乗合はした彼の知人がやつて来て、

「先生、彼の男を如何思ひなされます。」と聞く、それは氣絶の一件である。

「實に妙な事もあるものだね。」

「實際農夫が現はれる筈はありませんが、先づ罰で御座いませう。」

「そうかも知れんけ、けれど我々にも彼時の農夫の顔は目にあり〜と残つて居るから、彼奴にだつて左様だらう、それが出たのサ。」

と自分は答へたが然し自分は此事を然く淡白に考へては居なかつたので、實に言ひ難き或問題に觸れた氣がして、此二三日は少なからず之に惱まされて居たのである、人の心に潜む殘忍、冷刻、又は他が之に觸れて傷いた心、そんな事ばかりでない、尙ほ或物。

これらを對手の知人に話しても解らず、寧ろ彼から聞いた方が可いので、彼の男の身の上を彼是と尋ねた。

彼男は町で評判は餘り可くないが、口きゝて勢力は可なり有る上に商法にかけて抜目なく彼一代で今の一萬ばかりの身代を作つたといふこと。彼は變物で、折り〜氣が變になる事があるといふ事。夫婦の間に子なく、其爲め姪を貰つて育て、居るが、不思議とそれを非常に可愛がるといふ事。

以上よりも重大の事は、彼の今の妻は後妻で、先妻は彼が商用で旅行して居る留守に、不義をして情夫と逃亡したといふ事。けれど氣の變になつたのではなく初めより彼は荒々しき氣性を有しやゝともすると、妻を亂打して非常に虐待し、妻の不義をしたのも一つは其爲彼を厭うたといふこと。そして彼の唯一の嗜好は釣魚であるといふ事を聞き得た、

其後、夏の初めである。自分は郊外に出て河岸をたどり散歩して居ると彼の釣を垂れて居るのを見た自分は思ふところがあるので、傍に寄り、

「釣れますか」と軽く言葉をかけた、彼は振りかへつて自分を見たが、直ぐ又た水面を熟視して居る。

「釣れますか」と自分は今一度言つて、更に傍に近づいた。すると振向いて例の凄い顔で自分を見て、傍に在りし魚籠を取つて、自分からは見えぬ側に置き、そして何の返事もせず直ぐと眼を水面に轉じた。

結局、自分までがやられて了つた。自分は物思に沈みながら暫らく散歩して居たが、名残りなく晴れた美しい蒼空も、聲清く啼く雲雀も面白くなつて、間もなく歸路に就いた。

あ の 時 分

講 聲

さて明治の御代もいや榮えて、彼の時分は面白かつたなど、學校時代の事を語り合ふ事の出来る紳士が澤山出来ました。

落ち合ふ毎に、色々の話題が出ます。何度となく繰り返されます。繰り返してもく飽くを知らぬのは亦た此懷舊談で浮世の波にもまれて、眉目の何處かにか苦闘の痕を残す方々も「彼の時分」の話になると、我知らず、青春の血潮が今一度其の頬にのぼり、眼もかじやき聲までが艶をもち、やさしや、涙さへ催されます。

私が来た十九の時でした、城北大學といへは今では天下を三分して其一を有つともいひさうな勢力で、校舎も立派になり、其周圍の田も畑も何時しか町にまでなつて了ひましたが、所謂「あの時分」です、それこそ今のお方には想像にも及ばぬことで、じやんと就業の鐘が鳴るそれが田や林や、畑を越えて響く、それ鐘がと素人下宿を上草履のまゝ飛び出す、田圃の小路だ肥料を擔いで百姓に道を譲つて貰うなどいふ有様でした。

或日樋口といふ同宿の青年が何處からか鸚鵡を一羽、美しい籠に入れたまゝ持つて歸りました。こ

の青年は何故か其頃學校を休んで何とはなしに目を送つて居ましたが、私には別に不思議にも見えませんでした。

午後三時頃、學校から歸ると、私の部屋に三人、友達が集まつて居ます、其一人は同室に机を並べて居る木村といふ無口な九州の青年、他の二人は同じ此家に下宿して居る青年で、政治科及び法律科に居る血氣の連中でした。私を見るや、政治科の鷹見が、

「窪田君々々、珍談があるよ」と聲を低く、「昨日から出て居ない樋口が何處からか鸚鵡を持つて來たが、君まだ見まい、早く見て來給へ」と言ひますから、私は直ぐ樋口の部屋に行きました。

裏の畑に向いた六疊の間に、樋口と此家の主人の後家の四十七八になる人とが、差向ひで何か談話をして居る處でした。此後家の事を私共は皆なおツ母さんと稱んで居ました。

おツ母さんは頗るむづかしい顔をして樋口の顔を見て居ます、樋口の平時の癖に下唇を噛では又舌の先で咎で、下を向いて居ます。そして鸚鵡の籠が本箱の上に置いてあります。

「樋口さんく」と突然鸚鵡が間のぬけた調子で鳴いたので、

「ヤ、此奴は奇體だ、樋口君、何處から買つて來たのだ、此奴は面白い」と私は未だ童子です、實際面白かつた籠の側に接つて眺めました。

「うん、面白い鳥だらう」と、樋口は淋しい笑を洩して一寸振り向きましたが、直ぐ又、下を向い

て了ひました。

何故かおッ母さんは、泣面です、そして私を叱るやうに「窪田さん、そんなものを御覽になるなら彼方へ持つて去つしやい」

「可い君、」と、私は持主の樋口に聞きますと樋口は黙つて頷いて軽く嘆息をしました。

私が鸚鵡を持つて來たので、臥そべつて居た政法の二人は跳起きました。

「どうした」と鷹見は鸚鵡の籠と私の顔を見比べて而も笑ひながら、聞きますから。「どうしたつて、どうした」

「樋口の部屋におッ母さんが居たらう」

「居たよ」と、私は何氣なく答へましたが、様子の變であつたことは別に言ひませんでした。併し政法の二人は顔を見合して笑ひました、聲は出しません。そして籠の上に結んである緋縮緬の紵紐を拵くり乍ら「こんな紐など結つて來るから尙ほ不可ない露見の因だ、何よりの證據だ」と法科の

上田が其四角の顔を更に尤らしくして言ひますと、鷹見が、

「しかし樋口には何より此紐が嬉しいのだらう、嗅いで見給へ如何な香がするか」馬鹿言へ樋口ぢやあるまいし」と、上田の聲が少し高かつたので、鸚鵡が一聲高く「樋口さん」と叫びました。

「此畜生！」と鷹見が唸るやうに言ひましたが、鸚鵡は一切平氣で、

「お玉さん」

「人を馬鹿にして居る！」と上田が眼を丸くしますと、「お玉さん、……樋口さん……お玉さん……樋口さん……」と響き渡る高い調子で鸚鵡は續けざま叫び出したので、政法も木村も呆氣に取られて居ますと、驅け込んで來たのが四郎といふ十五になる此家の兒です。

「鸚鵡を下さいつて」と籠を取つて去つて了ひました。此四郎さんは私と仲善で、近い中に裏の田圃で雁を釣る約束があつたのです、ところが其晩おッ母アと樋口は某坂の町に買物があると出てゆき、政法の二人は校堂で行る生徒仲間の演說會にゆき、木村は祈禱會にゆき家に残つたのは、下女代りに來て居る親類の娘と、四郎と私だけで、頗る淋しくなりましたから、雁釣りの實行に取りかゝりました。

兼て四郎と二人で用意して置いた——即ち田溝で捕へて置いた鱒を釣鈎につけて家を西へ出ると直ぐ在る田の此處彼處に撒きました。田は其昔、或る大名の下屋敷の池であつたのを埋たのでせう、周囲は築山らしいのが幾個か凸起して居るので、雁には可き隠場であるので、其頃毎晩のやうに一群の雁が下りたものです。

戀しき父母兄弟に離れ、はるくくと都に來て燃ゆるが如き功名の心に鞭ち、學問する身にてありながら、私は未だ、ほんのこともてしたから、かういふ惡戯も四郎と同じ心の面白さを持つて居たのです。

十幾本の針を風糸につけて、其根を一本にまとめて、これを栗樹の幹に結び、これで可しと四郎

と二人が思はず星影寒き大空の一方を望んだ時の心持は何時までも忘れる事が出来ません。勿論雁の釣れるわけがないので、其後二晩ばかり試つて見ましたが、人々に笑はれるばかり、四郎も私も断念しました。悲しい事には此四郎は其後間もなく脊髄病にかゝつて、不具同様の生命を二三年保つて居たさうですが、死にました。そして私は其墓が何處にあるかも今では知りません。断命められさうで居て、さて思ひ起すごとに断念め得ない哀別の情に沈むのは此類の事です、そして私は縁が薄い」といふ言葉の悲哀をつくづく身に感じます。

ツイ近頃のことです、私は校友會の席で、久しぶりで鷹見や上田に會ひました。尤も此二人はそれぞれ東京で職を持つて相當に身を立て、居ますから年に二度三度會ひますが、私とは方向が違ふので餘り親しく往來は仕ないのです。けれども會へば何時以前のまゝの學友氣質で無遠慮な口をき、合ふのです。此日も鷹見は歸路に是非寄れとすゝめますから、上田と共に三人連れ立つて行つて、夫の御手料理としては少し上等すぎる馳走になつて酒も飲んで「あの時分」が初まりましたが、鷹見は以前の快活な調子で、

「時に樋口といふ男は如何したらう」と話題が鸚鵡の一件になりました。

「如何なるものかね、田舎に煤ぼつて居るか、それとも死んだかも知れない、長命を仕さうもない

男であつた。」と法律の上田は矢張もとの如く嚴しいことを言ひます。

「可哀さうなことを云ふ、然し實際あの男は何處となく影が薄いやうな人であつたね、窪田君。」と鷹見の言葉の如く、私も同意せざるを得ないのです。口数を餘り聞かない、顔色の生白い、額の狭い小形な、歳は二十一か二の青年を思ひ出しますと、如何も其身の周圍に生々した色が有りません、灰色の霧が包んで居るやうに思はれます。

「けれども艶福の點に於て、われ／＼は樋口に遠く及ばなかつた」と上田は冷やかに笑ひます、鷹見は、

「イ、あんな男に限つて女に可愛がられるものサ、女の言ひなり放題になつて居て、それで矢張り男だから、チョイと突張つて見る所謂張だね、女はさういふ風な男を勝手にしたり、亦た勝手にされて見たりすると、夢中になるものだ。だから見たまへ、あの五十面の婆さんが。まるで恥も外聞も忘れて居たぢやあないか。鸚鵡の持主は如何な女だか知らないが必然、海山千年の女郎だらうと僕は鑑定する。」

「まあそんな事だらう、何しろ後家婆さん、大に通をきかした積で樋口を遊ばしたから面白い、鷹見君の所謂、あれが勝手にされて見たのだらうが、鸚鵡まで持ちこまれて「お玉さん樋口さん」の掛合まで聞かされたものだから、可哀さうに婆さん全然持餘して了つて、樋口の居ない留守に鸚鵡

を逃したもんだ、窪田君あの滑稽を覚えて居るかい。」

私は頷きました、樋口が鸚鵡を持込んだ日から二日目か三日目です、今では上田も鷹見も婆さんと
言つて居ます、彼の自分のおツ母さんが鸚鵡の籠を開けて鳥を追ひ出したものです。すると樋口が
歸つて来て、非常に怒つた様子でしたが、間もなく鸚鵡がひとりで籠へ歸つて来たので、それな
りに納まつたらしいのです。

「けれども君は彼の後の事は能く知るまい、間もなく君は木村と二人で轉宿して了つたから……何
でも君と木村が去つて了つて一週間も経ない中だよ、婆さん堪らなくなつて、到當樋口を口説て故
郷に歸して了つたのは、婆アさん、泣きの涙だか何かで可愛い男を新橋まで送つたのは今から思ふ
と滑稽だが、可憐いさうだ、それで無くてあの氣の抜けたやうな樋口が益々ぼんやりして蒼くなつ
て鸚鵡の籠と一緒に人車に乗つて、彼の薄ぎたない門を出てゆく後姿は、未だ僕の目にちらついて
居る。」と流石の上田も感に堪へない風でした。

それから樋口の話ばかりでなく、木村の事なども話題にのぼり夜の十一時頃まで面白く談話して
分散れましたが、私は歸路に木村の事を思ひ出して、懐かしくなつて堪りませんでした、如何して
彼人は居るだらう、如何かして會つて見たいものだ、誰に聞き合すれば彼の人の様子や居所が分明
るだらうなど色々考へながら歸宅りました。

私がおツ母さんの素人下宿を出たのは全く木村に勧められたからです。鸚鵡の一件で木村は初め
て苦々しい事情を知つて、私に、それとなく言葉少なに、轉宿をすゝめ、私も同意して二人で他の
下宿に移りました。

木村は細長い顔の、眼尻の長く切れた、口の小さな男で、脊丈は人並高く、痩せてひよろりとし
た上につんつるてんの着物を着て居ましたから、随分と見すばらしい風でしたけれども私の目には
それが何となく難有くつて聖者の佛を見る氣がしたのです。朝一度晩一度、彼は必ず聖書を讀みま
した。そして日曜の朝の禮拜にも金曜日の夜の祈禱會にも必ず出席して日曜の夜の説教まで聴きに
行くのでした。

他の下宿に移つて間もなくの事でありました、木村が今夜、説教を聴きに行かないかと言ひます。
それも強つて勧めるのではなく、彼の癖として少し顔を赤らめて、もちくとして、丁寧に一言「行
きませんか」と言つたのです。

私は否と言ふことが出来ないどころでなく、嬉しいやうな氣がして、直ぐ同意しました。
雪がちらつく晩でした。

木村の教會は麴町區ですから一里の道程は確にあります。二人は木村の、色の褪めた赤毛布を頭
から被つて、肩と肩を寄合つて出かけました。折り／＼立止つては毛布から雪を拂ひながら歩みま

す、私は其以前にも基督教の會堂に入つたことがあるかも知れませんが、此夜の事ほど能く心に残つて居ることはなく、従つて彼の晩初めて會堂に行つた氣が今でもするのであります。

道々二人は色々な話を仕たせうが能く憶えて居ません。たゞ是れ丈け頭に残つて居ます。木村は平時の眞面目な、人を壓しつけるやうな聲で、

「君はベツレヘムで生れた人類が救主エスキリストを信じないか。」

別に變つた文字ではありませんが、「ベツレヘム」といふ言葉に一種の力が籠つて居て私の心に響いて無いものを感じさせました。

會堂に着くと入口の所へ毛布を丸めて投げ出して、木村の後について内へ入ると、先づ華やかな煌々とした洋燈の光が堂に漲ぎつて居るのに氣を取られました。これは一里の間、暗い山の手の道を辿つて來たからせう。次にふわりとした溫暖い空氣が冷え切つた顔に心地よく觸れました。之は熾にストーブが燃いてあるからです。次に婦人席が目につきました。毛は肩に垂れて眞白な花を挿した少女や其他、何となく氣恥しくつて能くは見えませんでした、たゞ一様に清かで美しいと感じました。高い天井、白い壁、其上ならず壇の上には時ならぬ草花、薔薇などが綺麗な花瓶に挿して有りまして、その故ですか、どうですか、軽い柔かな、佳い香氣が折り／＼溫暖い空氣に漂うて顔を撫でるのです。うら若い青年、未だ人の心の邪なことや世の態の儼しい事など少しも知らず、身

に翼の生えて居る氣がして思ひのまゝ美しい事、高いこと、清いこと、そして夢のやうなこと許り考へて居た私には如何なにか此等のことが、先づ心を動かしたでせう。

木村が私を前の席に導かうとしましたが、私は頭を振て黙つて後の方の席に小くなつて居ました。牧師が讚美歌の番號を知らすと、堂の隅から物々しい、重い、低い調子でオルガンの一節それを合圖に一同が立つ。そして男子の太い聲と婦人の清く澄んだ聲と相和して、肉聲の一高一低が巧妙な樂器に導かれるのです。そして「たへなるめぐみ」とか「まことのちから」とか「愛の泉」とか言ふ言葉を以て織り出された幾節かの歌を聴きながら立つて居ますと、總身に或る戰慄を覺えました。

それから牧師の祈と、熱心な説教、そして總てが終つて、堂の内の衆人一齊の黙禱、此時の暫時の間のシンとした光景——私はまるで別の世界を見せられた氣がしたのであります。

歸路は風雪になつて居ました。二人は毛布の中で抱合はんばかりにして、サク／＼と積る雪を踏みながら、私は殆ど夢心地になつて寒さも忘れ、木村とはろ／＼口もきかずに歸りました。歸つて如何したか、聖書でも讀んだか、讚美歌でも歌つたか、皆な忘れて了ひました。たゞ以上の事だけが明白と頭に残つて居るのです。

木村は其後二月ばかりすると故郷へ歸らなければならぬ事になり、歸りました。

其理由は何であらうか知りませんが、多分學資のことだらうと私は憶えて居ます。そして私には

木村が假令あの時、故郷に歸らないでも、早晚、何處にか隠れて了つて都會の人として人中に顔を出す人でないと思はれます。木村が好んで出さないのでもない、たゞ彼自身の成行が、さうなる様に私には思はれます。樋口も同じ事で、木村も遂に「あの時分」の人となつて了ひました。

先夜鷹見の宅で、樋口の事を話した時、鷹見が突然、

「樋口は何を勉強して居たのかね」と二人に問ひました。記憶の可い上田も小首を傾げて、

「さうサ、何を讀んで居たか知らん、まさか全然遊んでも居なかつたらうが」と考へて居ましたか。

「机に向いて居た事は能く見たが、何を専門にやつて居たか、如何も思ひつかれぬ、窪田君憶えて居るかい」と問はれて私も樋口とは半歳以上も同宿して懇意にして居たに關らず、さて思ひ返して

見て樋口が何を眞面目に勉強して居たか、遂に思ひ出すことが出来ませんでした。

そこで木村のことを思ふにつけて、矢張り同じ事でありませぬ。木村は常に机に向いて居ました、

そして聖書を讀んで居たこと丈は今でも思ひ出しますが、其外のことには記憶にないのです。

さう思ふと樋口も木村も何處か似て居る性質があるやうにも思はれますが、それは性質が似て居るのか、同じ似た其頃の青年の氣風に染んで居たのか、確と私には判断がつきませぬ。けれども此

二人は兎に角或る類似した色を持つて居ることは確かです。

さう言ひますと、彼の時分は私も朝早くから起きて寝るまで學校の課業の外に、矢鱈無精に讀書

したものです。歐洲の政治史も讀めば、スペインサーも讀む、哲學書も讀む、傳記も讀む、一時間三十頁の割合で、日に十時間、三百頁讀んで未だ讀書の速力が遅いと思つたことすらありました。そして唯だ色々な事を止め度もなく考へて思に耽つたものです。

さうすると私も唯だ亂讀したいといふ丈で、樋口や木村と同じやうに夢の世界の人であつたかも知れません。さうです、私ばかりではありません。彼の時分は誰れも皆なやたらに亂讀したものです。

死

一

自分は今も數學と語學との教授を以て身を立て、居る者であるが、今より數年前のことであつた。西京に新たに出來た某私立學校の教師になるやうな相談が自分と其係の者との間に有つて、自分も略々先方からの條件などにも同意し、遠からず西京に向けて出發することに決定して、其由を諸方の友人へも通知した。

西京の地は其時自分には初めて、學校の方は兎に角、京都云ふ名は自分をして多少の好奇心を惹かしてゐた。そこで彼是、西京の様子も聞いて置きたいと思つて富岡竹次郎といふ友を訪ねた。

富岡は西京の人で自分の親友の一人である。渠の父は渠五歳の時東京で亡くなり、其後渠は兄孝太郎及び母と西京に歸つて住んでゐたが渠青年となるや東京に留學して遂に獨立し、某省に職を奉じて茲に足かけ三年、乃ち今は二十七歳であつた。

自分と富岡との交際は左まで舊るくはなかつたが、互の交情は随分深かつた。渠の人物に就ては今以て自分の疑問であるが、先づ一口に評すると、内部火のやうに燃えてゐる流動體を外皮鐵の如

き冷やかな固形體で包むでるやうなと形容することが出来る。そこで外皮が固形體だけに内部の火の性質が自分には能く了解なかつた。たゞ其火の力が外皮を衝き破るほどに強かつたといふこと丈けは渠自身で證據を示したから能く知れてゐる。

従つて富岡の交友は多くなく、其多くない朋友すらも渠を「氣の置けない變人」と言つてゐた。自分もさう思つてゐた。

二

頃は春五月の初で、自分が富岡を渠が麴町三番町の宅を訪はむとて自宅を出たのは金曜日の夕暮であつた。自分は終日の讀書で少し頭を悪くしてゐたから、戸外に出ると風が冷や〜と襟頭のあたりを吹きつけて何ともいへず好い心持で、緩々と歩いて日も殆んど暮れた頃、富岡の宅に着いた。富岡は一人の忠實な老婆を雇ひ其人に家事一切を託して其外には家内同居のものなく、たゞ一人寂しく又た氣樂に生活してゐた。

門を入ると書齋の横を通つて玄關にゆくのである。然るに書齋の中窓が障子になつてゐて外からのぞくと腰から上を室内に傾けることか出来る位な高さであつた。自分は富岡が、其敷居に腰をかけて柱にもたれたまゝ、默然と空を眺めてゐるのを見たことも何度であるか知れない。

そこで自分は門を入つて書齋の横まで來ると、室内には未だ燈火が點いてゐないで、内が靜か

あつた。「不在かな」と自分は思った。

「富岡君！」と自分は軽く呼んでみた。

返事がない。其時障子の少し開いてゐることに気がついた。自分はつか／＼と窓の下までゆくと、靴が脱ぎ捨てゝあつて、障子が恰度人の身體の入るだけ開いてゐた。此窓から室に這込むのは随分當岡のやり兼ねない藝であるから、自分は安心して室をのぞき込むて今一度、「富岡君！」と呼んだ。返事がない。室内は暗くつて、僅かに隅の机と椅子とが朧ろに見えるばかりである。自分は愈々不在ときめて、兎も角老婆に聞かんものと、其處を立去らうとしたが其時、ふと眼についたのは室の片隅に黒いものが横たはつてゐるので、様子が人の臥てゐるらしかつた。篤と氣を付けて見ると全く人の形である。

先生うたゝ寢をしてゐるなと自分は點頭いて、

「富岡君！」と少し大きな聲で呼んだ。起きさうにも爲ない、

「オイ富岡君、オイ！」

彼は身動きも爲なかつた。自分は少し焦慮つて、

「オイ！富岡君、餘り早や過ぎるぢやあないか、富岡君！又た能く寝入つたものだ、富岡君！」と續けさまに大聲で呼んだ。

彼は依然として起きない。自分は其靜かなる鼻息すら聞かなかつた。此時一間を隔てた勝手の方から足音がして次ぎの間の襖を明けた。自分は直ぐそれを老婆と知つた。間もなく老婆は書齋の襖をあけて一寸と内をのぞいて見たが、

「オヤ今なんだかお聲がしたやうだと思つたが、」と呟いて其まゝ立去らうとした。

「お婆さん旦那を起してお呉れ、旦那を。今時分から寝るものがあるものか、」と突然自分が窓の外から聲をかけたので老婆は吃驚した。

「オヤ貴君ですか、イー旦那はお不在ですよ、今日はお役所が平常より少し早く退けたさうで、さあつきお歸りになつて又一寸と出てくるつてお出かけになりましたよ、マアお氣の毒様ですなえ」といつて「ホ、ホ、」と笑つた。

「何んだ其處に寝てゐるなア富岡君らしいが、其處を見なさい、そこ」と自分は壁の下の黒いものを指した。

「オヤ／＼何時お歸り遊ばしたらう。」

老婆は富岡の傍に寄つて、

「モシ／＼旦那々々、」と其肩に手を掛けたやうであつた。富岡はどうしたものか起きさうにも見えなう。

「よく又た寝こんだものねえ、」と自分の言葉のまだ終らぬうち、お政(老婆の名)は「オヤツ」と叫んだ。

「何んだ」

「旦那様々々々！オヤツ大變！」

「何んだ、何んだ！」

「オヤツ短刀が！」

老婆は後に二三歩飛び退いた。自分は室に飛び込む。

三

富岡は自殺してゐた。

自分は泣くにも泣かぬにもたゞ餘りの事に愕然たるばかりで涙も出なかつた。悲しいとも痛ましいとも未だ其のやうな明白な感情の起る餘地が無い。弾力ある粘りある一種の力が感情の泉を塞いでゐるやうでそれが胸に悶えて重く呼吸苦しく身體の血悉く頭腦に集つたやうで而も怪しい戦慄が爪先から頭髮までゆきわたつた。

たゞ身體がふわついてそれで落着くともなき一種の落着き拂つたやうな心地がした。

「早く燈火を！」

自分は漸くのことに叫むだ、私語くやうに叫むだ、老婆はまご／＼と書卓の上を探したが燐寸の見つからないので勝手の方へ駈けてゆく後を自分は追つて、

「燈火は私が點ける、早く近處の醫者を招待しておいで、直ぐ来るやうに」

燐寸を老婆から受け取つて自分は書齋に返る、お政は裏口から駈けて出た。

書卓の上の洋燈に火を點けると今まで暗かつた室が俄かに明るくなり机の脚もとまで流れてゐる鮮血が一時に物すごく光つた。

不幸にも渠の顔は此方に向いてゐる、其兩眼は半ば開き紅の血顔の半面にまみれ齒を喰ひしぼり拳を固く握り其拳も亦た血にまみれてゐた、渠は役所から歸宅つて其儘衣服も着換へないと見えて洋服を着てゐた、顔の半面血に染まらぬ處は洋燈の光を受けて兼ねて蒼白な顔が愈々蒼白に見えた、此慘澹たる光景に自分は思はず顔を背けんとする時ピカリと眼を射たものは傍に投げてある短刀であつた。

近づいて身體に觸つて見たが最早少しの體温もなかつた、自分は「とても駄目だ」と思った。無論駄目である、さまで時は經つてゐないやうだが全く絆斷れてゐた。

親友の自殺それを目前に見る其鮮血淋漓たる亡骸が眼前に横はつてゐる、是れ何の事ぞ、自分は椅子に身體を投げてジツと富岡の死體を睥視してゐた、此時やゝ感情がはつきりして來たやうであつ

た、そして始めて夢のやうに感じて眞實夢ではないかと思つた。

しかし夢ではない事實である、富岡は現に死んだのであると思ひ直した、然るにたゞ夫れ思ひ直したといふ許りで、夢なる歎と思つたのと別に何の異なる感も起らない、たゞ富岡は現に死んだのであると確めたばかりであつた、恰も石を指して石なりと確めたやうに。

然り！夢と現と此時の自分に何の違ひがあらう、夢を見て夢のうちこれ事實なりと確めることがある、自分が今現に居て眼前の死の事實を是れ事實なりと確めるのはこれよりも更らに意味も感情もないものであつた。

死の影は此慘澹たる一室を覆うてゐる、しかし自分と富岡の死との間には天地の隔離があつて却て自分の脳底暗黒の裡には生きてゐる富岡が分明に微笑してゐる、渠の平常の行爲容貌性癖一口にいへば生命ある活動する平常の渠が極めて分明である、眼を開けると富岡の血にまみれた死體が横はつてゐる、眼を閉ざると富岡は生きて現はれて来る、乃ち此時は自分の目前に在る「死」の事實よりも自分の脳底に深く刻まれてゐる「死體」の幻影の方が自分の感情に取つては更らに力ある事實であつた。

此時一陣の風が庭樹にざわついたと思ふと颯と室に吹込んで洋燈の火がフツと消えた、室は暗々黒々。

此暗黒のうち自分の眼底には鮮血に染んだ富岡の死體が分明に現はれた。「死體」の幻影が此刹那に自分の脳底深く刻み込まれた。

自分が再び洋燈を点けた時醫師の後藤といふ三十五六の男がぞろりとした衣裝で悠然とやつて来た、老婆は呼吸せき乍ら、

「先生！サアどうも大變な事に……」

後藤は先づ静に自分に挨拶して一寸と死體を見てそして言つた、

「とんだ事で……」

「とても駄目らしい御座いますが一應どうか」と自分は亡骸の傍に坐つた、後藤は彼是れと傷などを檢して見たが、

「つまり動脈を切つたので出血のために……」

「先生どうか爲すつて……」

老婆はおろ／＼聲で言つた。

「イヤ此では別に手術の施しやうもありません」

醫師は頗る平氣なもので、

「動脈を切つては醫師が現場にゐたところが餘程手早く手術を加へないと難かしい位ですから」と

例の冷然たる風で言つて「どうか水を」と老婆をうながした。

四

變死であるから其夜直ぐ警察の方からも出張があつて彼是れの手續も總て式の如く運こんだ、自分分は先づ番町附近にゐる友人二名に急報して直ぐ來てもらひ此等の人々と共に色々と立働らいた、其間は富岡の死んだゝめに奔走し乍ら富岡の死のことは何時しか忘れて了つた如くであつた、たゞ生きてゐる富岡のために何事をか盡してやる心持と左まで相違はなかつた。

富岡の交友は甚だ少なかつたが皆な親密の仲であつたから此等の人々には直ちに電報で知らしめやると五六名の朋友は皆んな馳せつけて來た、誰も彼も愕然たる許りであつた、何故自殺したのだらうといふ問を發する外別に誰れも言ひやうを知らなかつた、黙然と坐つたまゝ首を垂れてゐる者もある、黯然として涙を呑むものもある、しかし要するに「何故だらう」と互に問ひ合つた。

「大野君、君心當りがあるか」と自分の向に坐つてゐた男が自分の顔を見て問うた、これは自分が諸友のうちでも別して富岡とは懇意であつたから、

「イヤ僕も頻りと原因を考へて見たが、別にこれといふ程のことがないので不審に堪へないがね婆さん今日役所から歸つた時の様子はどんなだつた」

「別にお變りもないやうでしたが、あのそれに平時餘り戲言なんか仰らないものですから、少し

お顔の色が悪るいやうでしたが、たゞ一寸と出てくると仰つて直ぐ又たお出かけになつていつマア窓からおはひりになつたか私は少しも存じませんでしたよ……」

老婆は涙ぐむだ、ひたすら自身の氣の付かなかつたのを辯解するやうに言つた。

書置らしいものは無論無かつた、日記を見ると最後の一句は「空しく今日一日も過ぎぬ」の語であつた、これは別に意味のある言葉ではなく富岡は非常な勉強家であつたから月日の空しく過ぎゆくのを歎息するのは渠の癖の一つで怪しむに足らないといふことは皆んなも同意であつた。

厭世より起つた自殺だらうか、自分も諸友も富岡の人物の裡に何處か厭世の風があることは臆ろに感じてゐたがそれも明らかに意識してゐたのではない、自分とても渠の口から厭世思想を聞いたことはない、さりとて樂天主義をも聞かない、渠はたゞ鷹揚な風でゐて沈鬱な性で非常な讀書家で重に科學に關する英獨の書を読むてゐた、自分とは重に數學に關する談話を好むだ爲で自分が出す難問をよるこんで研究した。

死

さらば氣が狂つたのか、それにしても前兆が少しも見えなかつた、それとも突然發狂したのか自分も人々もたゞ自殺の原因が解らない丈けに何故自殺したかといふことのみ不思議で何んだか恐ろしい謎語を掛けられて解さ得ないやうな心地がして頗る屈託した、斯くて富岡の自殺したのために互に集まつて來て其原因を推測する中何時しか誰れも富岡の死を忘れてしまつたやうになつた。

「まさか失戀ではあるまいね」

「まさか」

「富岡だつて男だもの、それでないとも限らないサ」

「富岡が失戀のために死ぬるやうな男だらうかそんな事はなからう」

「さうも言へないよ」

「何か心當りでもあるの？」

「イヤそんなことはないがね」

「富岡のやうな男は却て知れないものだよ、世間によく例がある」

自分は人々の此等の問答には口を入れなかつた、しかし生きてゐる富岡が腦底に現はれて來て渠の平常の行爲や性癖の實例が彼れより是れと連續して思ひ出された、そして自分は其中より失戀の要素を集めんと企てた、無論そんな要素は少しもなかつた、人々も多分心の中で富岡を描いて其平常を聯想してゐるだらう、富岡の死體は隣室に臥かしてある、其次ぎの間で吾等は渠の噂をしてゐる、諸友皆な富岡の自殺を痛ましく感じた、それ故に知らず／＼其原因を知りたく思つた、原因を推測してゐる中に同時しか渠の噂をはじめた。

突然の發狂といふ外に誰れも終に原因を見出し得なかつた。

「發狂するものは富岡のやうな人物に多いやうだ」

「さうとも限らないが富岡のやうな生活をしてゐると誰れでも發狂するだらう」

「發狂といふと何んだか可笑しな様だがつまり富岡は自分の心の壓力に堪へなかつたのだらう」

「遺傳性ぢやアあるまいか」

「富岡が或時お父さんも自分で早死をしたとか言つたことがある！」

「自殺かも知れないねエ」

「さうすると矢張原因は遺傳にあるのかも知れない」

「さうだらう」と自分も言つた。

人々は漸く満足したやうであつた、それと共に急に富岡の死が痛ましくなつて來た、誰も富岡の友情の厚いことを感じてゐるので其人が今突然斯る無殘な最後を遂げたかと思ふと悲哀を感じるのは當然である。

「しかしお母さんが來たらどんなに泣くだらう、とても見てゐられないねエ」

「サア私も其れを思ふと胸がさけるやうで……さぞお泣きになることだらうと思ふと……それに私が丸で氣の附かないやうで申譯の仕やうが御座いませぬ……」

老婆は涙を止め得なかつた、此時西京から返電が來た、

「ハ、スグタツ」
 「マアお母さんが！」と老婆は泣き伏した、自分等は暫らく顔を見合はした。

五

自分等は相談の上で西京には先づ急病の由を知らして置た、そして朝になつて死亡の電報を打つことに定め、變死のことは西京の人が着京した上で知らす方がいゝだらうといふことで其運びにしつゝ、併し成る可く母が來ない様と願つた甲斐もなくかゝる返電であるから皆んな當惑した。
 富岡の母といふは一目見て誰れが目にも神経質で感情の強い人だと了解る、果して富岡の亡骸を見るに聲を上げて泣き倒れた。老婆をはじめ自分も其他の友も慰藉めやうがない、たゞ自分は悲哀が胸を衝いて來て殆ど座にゐたゝまられなかつた。

あはれな母は頻りと老婆に生前の様子を聞いては泣き老婆は富岡の平常の生活の様を小さな事まで語つては泣いた。母は眼を泣き腫らして了つた。自分達に富岡生前の交誼を謝して又た今度の世話の禮を述べ、

「いくら泣いたところが何とも爲やうがない、もう止めませう」と言つて涙をはらゝこぼした。

翌日亡骸を落合村の火葬場に送り富岡竹次郎は一片の煙、一握の灰、一壺の白骨となつた。
 自分は彼空に突立つ煙突の吐く煙は見えない、それは棺を籠に入れるのは晝間であるが、これを焼

くのは夜中だから吾々には見ることが出來ないのである。

自分は母親と共に骨を拾つた、衣服と肉とは灰となつたまゝ軽く骨を包むてゐた。

其翌夜の九時五十五分の汽車で富岡の母は西京に歸つた、自分は老婆及び四五名の友人とこれを新橋停車場に送つた。

自分が母親の切符を買ひ手荷物の世話などをしてゐる間、母親と老婆とはをりゝゝ何か話してゐたが二人とも涙ぐむてゐたやうであつた、諸友は少しく二人より離れて立つてゐたがこれも亦ただ茫然と四圍の人々の立ち騒ぐのを眺めてゐた。をりゝゝ母親が携へてゐる風呂敷包に眼を注ぐものもあつた、これは骨壺を箱に入れそれを風呂敷で包むのである。

衆人雑沓のなかで吾等一組は殆んど人の不審を惹く程に沈黙で陰鬱で、たまさか互に物言ふにも私語くやうであつた。鈴のなるや自分は一種の不穩を感じた、老婆は人目も憚からず掌を合して壺を拜むだ、念佛を唱へた。

吾等は列車の動くまで其前に立つてゐた。パイプが鳴つて車が前進をはじめると、
 「左様なら富岡様、左様ならお母さま左様なら！」
 と老婆はおろろ聲で言つて口の中で念佛を繰返した、自分は一種の離愁を感じた、それは母親に對してではない、實に既に幽明境を分つて居る富岡竹次郎が今更ら西京に歸るのを送るのを多少

の相違あるだけであつた、人々も皆な惜然として汽車を見送つた。

六

富岡竹次郎なる一個の小官吏が自殺を遂げた其原因は發狂である、諸友が其死後の世話をした、母親が國元から來て其白骨の靈を持ち歸つた、諸友はこれを新橋停車場に見送りした、斯く言へば自分の物語は極めて單純である、又た殆ど何の意味もないものである、然るに自分は最初富岡の書齋で渠の死骸を見てよりこのかた母親と富岡の骨とを停車場に送るまでの間の自分の心理的傾向を反省し併せて諸人の舉動を観察して知らず、一個の意味深き事實に衝突つた。

其後ち自分は暫時此事に思ひ悩むで今は益々自分を苦しめてゐる。意味深き事實とは人は容易に「死」其者を直視することが出来ない、従つて其測り知られざる大不思議に打たれることが出来ないといふことである。

自分は親友富岡の死を哭した、母親は眼を泣き腫らした、然し其れが何んであるかこれば唯だ生命を希ふ生物的本能が恩愛の情と化合して發する死者に對する同情たるに過ぎない、そして大概は我と彼との離別の悲しむのである。されば人は多く死者が未來に永劫の生命を有つといふ信仰と彼我決して無窮の離別ではないといふ信仰とに由つて其悲哀を慰めることが出来る、さなくば大概は人力及び難きことゝ絶念めるのである、未だ死を哭するといふことを以て「死」其者の秘義に打たれた

とはいへない。

自分は富岡と交際して其生命ある一個の男を腦底深く印象してゐる。渠の鮮血淋漓たる亡骸を視て又たこれを頭腦に刻み込むだ。其灰と白骨とを見て又たこれが印象を頭に打ち込むだ。自分は更らに焼場の煙突から立ちのぼる煙を想像した。深夜の辰星光を加ふる時、一道の青煙が煙突の口から吐き出されて暫時大空を漂ひ次第に其形を失つて空中に融け去るのを想像した。そして其想像が又た自分の頭に實見したものと如く印象された、自分が富岡の死を思ふ時は此等の形體的變化が環のやうに再現して來るに過ぎない。

自分はたゞ斯く腦の幻影を追うてゐて遂に「死」其者を見ることが出来ないのである。微笑する富岡の幻影は確かに富岡其人の幻影である、鮮血に染むで室内に横はる幻影は半ば富岡其人の幻影で半ば普通人間の死體其者の幻影である、灰に包まれた白骨に至つては已に殆んど灰と白骨其者の幻影であつて富岡には何の關係もない、されば富岡の死を思ふ時、此等の幻影を追うてゐながら遂に自分の腦底には富岡が微笑してゐる。されば地上何れの處にか渠は生存してゐると思ふのと大差がない。

つまり生命ある富岡の幻影の方が「死」其者より自分に取つては力があつたのである、自分はこれに由て推測した、普通人が親や子や朋友の死んだ當座は大變これに動かされるが時が立つと次第に

薄らいて来るのは、つけり死者生前の幻影のみが長く腦底に残つてゐて其人を思ひだす毎に微笑して現はれて来るからだらうと。醫師後藤が富岡の死體に向つて何等の感動をも起さずたゞ動脈を切つたから死んだのだといつて平然たるのと諸友が自殺の原因を推測して遂に發狂と定めて満足したのと何の相違があるか。醫師は極めて「死」に對して冷淡である、しかし諸友とても五十歩百歩の相違に過ぎない、吾等は生から死に移る物質的手續を知らばもう「死」の不思議はないのである、自殺の原因が知れた時はもう其れ丈で何の不思議もないのである。

自分は以上の如く考へて來たら丸で自分が一種の膜の中に閉ぢ込められてゐるやうに感じて來た天地凡ての物に對する自分の感覺が何んだか一皮隔てゝゐるやうに思はれて來て堪らなくなつた。

そして今も悶もがいてゐる自分は固く信ずる、フェイスツーフフェイス面と面、直ちに事實と萬有とに對する能はずんば「神」も「美」も「眞」も遂に幻影を追ふ一種の遊戯たるに過ぎないと、しかしてたゞ斯く信ずる許りである。

波 の 音

一

自分は同じ一郡でも海岸から三四里も奥の山の手の方ばかり勤めて居たのが、今度は始めて海濱に轉任を命ぜられて、尋常の生徒七八十人をあづかる事となつた。

自分には家がないから學校に寢泊りすることにした。そして助手は村の者ゆゑ、外そとから通ふ。すべて此學校の校長となつたものは此例に洩れないさうである。

尤も自炊ではない。清兵衛といふ老爺おやぢが給仕で、煮燒にやき其他の女のする役ともいふべきを一手に引受けてやつて呉れる。この老爺おやぢは學校の前の縣道を越えた田圃に在る小さな茅屋わらやに住んで居る。これは百姓の住古した家に多少の修繕を加へたるに過ぎない、校舎が狭いから小使の住む處がないからである。何事も御儉約の世の中、殊に教育費だけは差當つて品物にならないと云ふ所から切りつめる丈け切りつめる世の中のことにしあれば、是等は寧ろ當然であると何人も怪しまない、自分も怪しまない。

たゞ如何にも淋しい。此校舎に一人て寢て居ると思ふと淋しくて堪たらない。遠い生徒は一里半、

近いと云ふも五六丁を通ふ生徒を有つ此の孤屋の住居は、自分ばかりでなく、誰でも淋しきを感じ
るだらうと思ふ。

山の手に住た自分は當直以外、大概は大農家の一室など借りて居たから頗る安氣であつたのが、
今度は流罪の状態である。

流罪には恰度ふさはしき波の音だ、來た晩から耳についてならない。學校の前を西から東へ通ず
る縣道が一丁ばかり先で急に右折する、其の曲り角が下ると濱で北の海を受けて居る。

自分の來たのは冬の真中であるから別して波の音が物すごく聞える。第一夜の晩は其中にも激し
かつたので自分は眠ることが出来ない。洋燈を消して、眞暗な中で、夜具から頭を出して聴耳を立
てゝ居ると、大地に響き、虚空に反響する重々しい音の中に、物の軋るやうな音、叫ぶやうな聲、
千萬の人が古く、昔の世に居て何等かの哀歌を合唱するやうな聲、——それから、それへと空想
を馳せて聞くと果がない。

嘗て或學校に居た時、何人が貼着けたのか當直部屋の壁に一枚の繪がある。西洋雜誌の切抜らし
い。荒涼たる海濱の眞夜中とも覺しく、海から老若男女の裸體の亡者が數限りなく躍り出て舞踏し
て居る様を書いたもので、名畫か何か少しも解らないけれど、一見人をして物凄く思はしたのであ
る。其畫が生憎と眼の先にちらつく。學校から波打際迄は三四丁しか無い。浪の有様が恰度亡者の畫

と同じやうに眼の先に現れて來る。そして叫ぶやうな聲は亡者共の舞踏の歌とも聞える。

午前二時の柱時計が打つても寝られないので、かゝる場合に何人も能く起す一種の反撥心、別し
て神經質の人には有りがちな反撥心を奮ひ起した。

濱へ出て見ると決心した。脱ぎ捨てた綿衣を寢衣の上に引掛け、更にどてらを着て、太いステツ
キを携へて外へ出た。冬の夜は能く晴れて星の光は冴えきつて居る。星光で左迄暗くない縣道の曲り角
を左、其處から砂山の長堤が東へ連り、校舎の在る丘の斷崖が右手に聳つ、此間に急な下道がある。
それを駈け下りると濱へ出る。

自分は空想の濱から現實の濱に出た。朦朧たる怪異の幻影は消え去せて、森嚴なる、壯大たる、
そして眞に物すごく海濱が自分の眼前に擴つて居る。北風はビュ／＼吹きすさんで、波濤は轟々と
鳴り響く。星光低く垂るゝ水天の界は初め遠く／＼して自分を引きこむやうに思はれたのが、ちつ
と見つめて居ると次第と近づき來つて果は眼前に迫り自分を壓倒するかと思はれた。間近に直立し
た白濤が一端から崩れて灰色の雲を巻きつゝ、矢の如く渚を走る。

倒れては流れ、流れては起ち、相せめぎ、重り、亂れ狂ふ現象が若し少しの音も立てずば更に物
すごかるべしなど思ひながら、ちつと眺めて居ると、其刹那に自分は校舎で聞いたあらゆる音を忘
れて了つた。そして間近の渚から次第に遠く眼を移して、四五丁の處までゆくと、今まで全然眼

に入らなかつた異形のものを見出した。同時に全身、冷水をあびた心地がした。すかし見ると猿ほどの大きさと思はるゝが、波を追ひ、波に追はれ、そして折り／＼躍り上がる、自分は大急ぎで學校に歸り夜具を被つて縮み上つて居ると、疲れたので何時の間にか眠つて了つた。

二

晝の中は生徒を相手の忙しい身であるから何事も打忘れて居るが、夜になると兎角波の音が耳についてならない。そして例の如く種々の空想に耽る、必ず彼の異形の者を思ひ出す。不快で堪らなけれど、まさか異形の者を見た人に言つて問ふ譯にもゆかない、自分の妄想の作用かも知れないと、尙ほ人に聞くわけにゆかない。

その内一月も経ちて頃は二月の末であつた。夜の十二時過ぎ、戸を激しく叩いて、「先生様、先生様！」と呼ぶ者がある。かばと跳起きて、

「誰だ？」と怒鳴つた。

「清兵衛で御座ります。」

「何だ、今時分」と言ひながら寢衣の上にとてらを引掛けて戸を開けると、小使の清兵衛爺さんが其處に直立つて居る。

「何だ？」

「遅く起してお氣の毒ぢやが、今、磯村善助様の子息と若い者とが来て、先生様に直ぐ来て呉れといふのぢやが、行つてやりますか」と問はれて自分は何の事とも解らず、但し磯村善助といふは此近郷で第二流位の大農家なることは既に承知して居たのである。且つ彼の娘のの十一になるお繁が尋常四年の生徒である事も知つて居た。

「お繁といふ娘をお知りて御座りますか。」

「うん知つて居る、私の可愛がつて居る子だ。」

「それが今、死にかけて居るので御座います。」

「それは氣の毒だ、一週間ばかり學校を休んで居たが、さうか？」

「それで、先生様、先生様と囁語に申して居るので、親共が嘆きまして、せめて死際に先生様に一目遇はしてやりたいと、それで今お迎ひに來たので御座ります。可憐さうだ！行つておやりなされませ。」

風邪で休んで居る位に思つて居たのが、死にかけて居るとは自分も驚いた、色白の、丸顔の、眼のパチリとした可愛い娘。

「それは氣の毒だ、直ぐ行かう。」

「先生様は必定行くから、私が連れて行くから」と言うて使者を遣しました。それではこれから直ぐ

「参じませう。」

そこで二人は出かけた。外は寒いこと。濱に下る所から直線に砂山の土堤の内側を通ずる小徑を辿つて十町以上も行くと、右に折れて間もなく磯村の家へ着いた。

初めて来て見ると成程、可なりな構造である。馬鹿丁寧に迎へられ、直ぐに一室に通されると、其處にお繁が寝て居る。八字髭を生じた若い醫師、お繁の父母、其他に十七八歳とも覺しき娘、十四五の男兒、二十一二の此家の長男らしい青年など心配顔に居並んで居る。小使の清兵衛も席末に列した。

「お繁や！先生様が來ましたよ。サア先生様が來ましたよう。」とおろ／＼聲で呼んだ。

少女は眼を開けて、自分を見て、にっこり笑つて、起き上らうとする。若いドクトルは急に、起してはいけませんと止める。

自分は思つた、これが死ぬる程の病人だらうかと。けれども専門のドクトルが左様診断なされたのを疑ふわけにもいかない。

「磯村さん」と言ひかけて、これは學校の呼名であるから、直ぐ改めて、

「お繁さん、病氣は直ぐ癒るよ。安心してお薬を飲むのだ。私が癒ると言うたら必定と癒る、先生が癒ると言うたら必定と癒る、平癒たら學校へ出るのだ。卒業前だから、しつかり爲るのだ！」

思ひ切つて斯う言つて置いて、清兵衛と共に歸路に就いた。

「オイ老爺さん、彼の醫師は何と言ふのだ。」

「諸岡さんと申します。」

「確實かの。」

「さて？」

「私はお繁は死ななと思ふ。」

「老爺も左様思ひます。」

「イヤな醫師だ」と獨言のやうに言ふと、清兵衛は、

「ウ、フン」と妙な聲を出したぎり、無言で歩む。二人ともすたこらく大急ぎで歩む。寒い。海は荒れて居る。波は怒號して居る。而も風なく、空は薄曇。道程の中途まで來ると突然清兵衛が足を止めて、

「先生様！あれを御覽うじろ。早く隠れませう。」

自分は前途を透見て、何となしに驚いて老爺のするが儘に、砂山の藪の中にもぐずり込んだ。

「何だい彼者は？」と自分は老爺の耳に口をつけて聞いた。

「狂人！」

「男か女か？」

「女！少し黙言つて居て御座りませ。」

二人はしゃがんで小さくなつて居ると、何事か喚きながら此方へ駈けて来て、自分達の居る所で、バタリ足をとめ、暫時考へて居たが、自分達の直ぐ傍を掻き分けて、猿の如く敏捷に、砂山の頂上の上つて了つた。お互の距離は五六間に過ぎないので、狂女の姿こそ能く見えないが、其言ふことは解かる。「オーイ〜」と沖を見て呼んで居たが、間もなく海濱の方へ駈け下りた。

其内に二人は大急で歸へる。其途中で、此狂女は夫が漁に出て溺死したのが原因で狂氣になり、今では親家に歸つて居るといふ話を清兵衛が仕て聞かした。

但し、此狂氣は折り〜思ひ出したやうに起るので、毎日毎夜の事ではないとのことである。自分が最初、此學校に來た晩、濱で見た、異形の物は此狂女であつたと思ひあたつた。

三

縣道まで歸ると、清兵衛は自分に向ひ、

「今夜、淋しくつて寝る事も出来ずまい。私の處へ來て爐にあたりながら語すことゝ致しませう。最早夜の明けるの間が御座りません。」

自分は直ぐ同意して清兵衛の家に伴なはれた。小さな農家の一間に爐が切つてある。一間と辯明

る程の事のない、一間しかないのである。清兵衛はドロクを持出して自分には何の頓着もなく飲みながら、

「先生様、磯村の娘を見ましたか。」

「姉様の事か。」

「さうとも。今夜母親の傍に居た娘。」

「可愛い娘だの。」

「それなら此ドロク一杯飲むのぢや、」と清兵衛やゝ酔つたらしく、一合もはひりさうな湯呑を自分に突きつける。自分は受けてなみ〜とついで貰つて飲み干して返した。まさかドロクの一杯や二杯にはめげない積りと思ひの外、平常、酒に慣れて居ないので直ぐ酔つて了つた。

「先生！あの子を嫁にしる〜」

「嫁にする前に嫁に呉れると言ふ不都合なわけがある。清兵衛さん、それをやつてくれるか。」

「やるとも。あの娘は必定先生様にほれて居ると私は今夜、ちやんと見て取つた。」

「ほれて貰へば尙ほ有難い、それぢや清兵衛様に萬事頼んだ。」

と自分は面白半分答へて、清兵衛を見ると彼は既に居眠りを初めて居た。

自分も爐の煖かさに眠くなつて來て可い心持になつて身も溶けさうである。波の音が遠く聞え

て、例時の物すごさを感じない。

「喃、先生様！」と老爺は突然頭を舉げて、「あん娘は佳えちやらう。」

「佳さうだ。」

「佳えとも、是非貫つて上げますぞ。」といふ中まただん／＼老爺の頭が下つて来る。……自分もとりとしたと思ふや戸の透き間から天明の薄光が射して居た。

號 外

襦袢洋服を着た男爵加藤が、今夜もホールに現はれて居る。彼は多少キじるしだとの評がホールの仲間にあるけれども、恐らくホールの御連中にキ的傾向を持つて居ない方はあるまいと思はれる。かく言ふ自分も左様、同類と信じて居るのである。

此處に言ふホールとは、銀座何丁目の狭い、窮屈な路地に在る正宗ホールの事である。精一本の酒を飲むことの自由自在、孫悟空が雲に乗り霧を起すが如き、通力を持つて居玉ふ「富豪」

「成功の人」「カーネギー」「何とかフェラー」「實業雑誌の食物」の諸君に在りては何でも無いでせう、が、我等如きに在りては、でない、左様でない。正宗ホールでなければ飲めません。

感心に美味しい酒を飲ませます。混成酒ばかり飲みます、此不愉快な東京に居なければならぬ不幸な運命のおたがひに取つてはホールほどらしい所はないのである、

男爵加藤が、何時も怒鳴る、何と言うて怒鳴る「モー一本」というて怒鳴る。

彫刻家の中倉の翁が何というて、其太い指を出す、「一本」
悉く飲み仲間だ。悉く結構！

今夜も「加と男」がノツツリ御出張になりました。「加と男」とは「加藤男爵」の略稱、御出張とは、特に男爵閣下に我々平民乃至、平ザムラヒ共が申上げ奉る、言葉である。けれどもが差向へば、些の尊敬をするわけでもない、自他平等、海苔の佃煮の品評に餘念ありません。

「戦争が無いと生きて居る張合がない、あゝツツマラ無い、困つた事だ、何とか戦争を初める工夫はない者か知ら。」

加藤君が例の如くはじめました。「男」はこれが近頃の癖なのである。近頃とは、ポーツマウスの平和以後の冬の初の頃を指さす。

中倉先生は大の反対論者で、斯ういふ奇抜な事を言つた事がある。

「モシ出来る事なら大理石の塊のまん中に半人半獣の二人が噛合つて居る處を刻つて見たい、塊の面に其のからみ合つた手を現はして。といふ次第は彼等争闘を續けて居る限りは其自由を得る時がない、則ち幽閉である。封じ且つ縛せられて居るのである。人類相争ふ限り彼等は未だ、其眞の自由を得て居ないといふ意味を示して見たいものである。」

「お示しなさいな。御勝手に」「男」は冷やかに答へた事がある。

其處で「加と男」の癖が今夜もはじまつたけれど、中倉翁、最早や強ひて對手になりたくもない風であつた。

「大理石の塊で刻て貰ひたいものがある、何だと思はれます、我黨の老美術家、加藤は先づ當りました。」

「大砲だらう」と中倉先生も中々これで負けないのである。

「大差ひです。」

「それなら何だ、解つた〜。」

「何だ」と今度は「男」が問うて居る。

二人の問答を聞いて居るのも面白いが、見て居るのも妙だ、一人は三十前後の瘦せがたの脊の高い、汚ならしい男、けれども何處かに野人ならざる風貌を備へて居る。しかし何と言ふ亂暴な衣装だらう、古ぼけた洋服、鼠色のカラー、櫛を入れない亂髪！一人は四十幾歳頂邊が禿げて居る、比ぶれば幾干か服装は優つて居るが、似たり寄たり、何故二人とも洋服を着て居るか、寧ろ安物でも可いから小ザツぱりした和服の方が可きやうに思はれるけれども生憎と二人とも一度は洋行なるものをして、二人とも横文字が讀めて、一方はボルテヤとか、ルーソーとか、一方はラファエルとか何とか、若し新聞記者ならマコーレーをお題目としたことのある連中であるから、無理もない。斯く申す自分がカーライル！隅の方に、やり〜笑ひながら、グビついて居るゾラも在り。

綿貫博士が傍で皮肉を言はない丈けが未しも、先生が居ると問答が殊更に込み入る。

「解つたとも大解りだ」と楠公の祠に建られて、ポーツマウス一件の爲めに神戸市中を曳ずられたといふ何侯爵の銅像を作つた名譽の彫刻家が小兒のやうにわめいた。

「イヤとても解るものか、私が言ひませうか」と加と男。

「言うて見なさい」と今度は又彫刻家の方から聞く。

「僕が言うて見せる」と遂に自分が口を入れてお仲間に入つた。

「何です、男が意味のない得意の聲を出した。」

「戦争の神を彫つて呉れると言ふのでせう」

「大ちがひ！」

「則ち男爵閣下の御肖像を彫つて呉れるといふのでせう。」

「ヒヤ／＼、それだ／＼大に僕の意を得たりだ、中倉さん全く僕の像を彫つて貰ひたいのです、斯く申す「加と男」其人の像を。思ふにこれは決して困難なる業でない。この如く殆ど每晚お目にかゝつて居るのだから、中倉君の眼底には歴然と映刻せられて居るだらうと思ふ。」

「そして題して戦争論者とするが可からう。」と自分がいふ。

「敗戦の神といふ方が適當だらう」と中倉先生は亦自分が言はんと欲して言ふ能はざる事をいふ。

「題は僕自身がつける、敢て諸君の討論を煩はさんやだ、僕には僕の題がある。何しろ御承諾を願

「ひたいものだ。」

「行りませうとも。王侯貴人の像をイヂくるよりか、それは我黨の「加と男」の爲めに、ぢやアない、爲にぢやアない、「加と男」をだ、……をだ／＼、……。だから承知しましたよ。承知の助だ。

加と公の半身像なんぞ、眼をつぶつても出来る。こねは面黒い。是非やつて見ませう、だが。」先生、此時、チョイと、眼を轉じてメートルグラスの番人を見た、これはおかはりの合圖。

「だが、……コロット、へ老人は老人らしい、接續詞を用かう。題は何と致しませう、男的閣下。題は、題は。」

「だから言ふぢやアないか、題は乃公が、乃公が考案があるから可と言ふに。」

「エーと仰せられましても、エーで御座せん。……面倒臭え、モーやめた。やめた、……加と男の肖像をつくること、やめた！、ねえ、さうぢやアないか満谷の大將」と中倉先生の氣焔少しくあがる。自分が満谷である。

「今晚」はと柄にない聲を出して、同じく洋服の先生が入つて来て、も一ツの卓に着席して、我等に黙禮した。これは、すぐ近所の新聞社の二の面の（三の面の人は概して、飲みさうで飲まない）豪傑兼愛嬌者である。けれども連中、何人も黙禮すら返さない、これが定例である。

「さうですとも、考案があるなら言つたが可いぢやアないか、加藤さん早く言ひ玉へ、中倉先生の

御意に逆らうては萬事休すだ。」と満谷なる自分がオダテた。ケシかけた。

「號外といふ題だ。號外、號外！ 號外に限る、僕の生命は號外に在る。僕自身が號外である。然り而して僕の生命が號外である。號外が出なくなつて、僕死せりだ。僕は、これから何をするんだ。」男の顔には例の慘痛の色が現はれた。

げに然り、我が加藤男爵は何を今後に爲すべきや。彼は兎も角も衣食に於て窮する所なし、彼には男爵中の最も貧しき財産ながらも、猶且つ財は是れ在り、狂的男爵の露命をつなぐ上に於て、何の「露西亞征伐」に於て初めて彼は生活の意味を得た。と言はんよりも寧ろ、國家の大難に當りてこれを舉國一致で喜憂する事に於て其生活の題目を得た。ポーツマウス以後、それが無くなつた。

彼れ男爵、たゞ酒を飲み、白眼にして世上を見てばかり居た加藤の御前は、かつかりして了つた。世上の人は悉く、彼等自身の問題に走り、それが爲めに喜憂すること、戦争以前の如くに立ち返つた。けれども、男は喜憂の目的物を失つた。即ち生活の對手、もしくははま、或は生活の煽動者を失つた。

が、つかりしたのも無理はない。彼の戦争論者たるも無理はない。

「號外」、成程加藤男爵の彫像に題するには何よりの題目だらう、……男爵は例の如く其のポケットか

ら幾多の新聞の號外を取り出して、

「號外と僕に題するに於て何かあらんだ。ねえ、中倉様、是非、その題で僕を、一ツ作つて貰ひたい。……こんな風に読んで居る處なら猶更にうれしい。」と朗讀をはじめた。

第三報、四月二十八日午後三時五分發、同日午後九時二十五分着。敵は鰐河右岸に沿ひ九連城以北に工事を繼續しつゝあり二十八日も時々砲撃しつゝあり二十六日九里島對岸に於て斃れたる敵の馬匹九十五頭外に生馬六頭を得たり——

「どうです、鴨綠江大捷の前觸だ、うれしかつたねえ、彼の時分は、胸がどき／＼したものだ」と更に他の號外に移る。

——戦死者中福井丸の廣瀬中佐及び杉野兵曹長の最後は頗る壯烈にして同船の投錨せんとするや杉野兵曹長は爆發藥を點火する爲め船艙に下りし時敵の魚形水雷命中したるを以て遂に戦死せるものゝ如く廣瀬中佐は乗員を端艇ボートに移らしめ杉野兵曹長の見當らざる爲め自から三たび船内を搜索したるも船體漸次に沈没海水甲板に達せるを以て止むを得ず端艇ボートに下り本船を離れ敵彈の下を退却せる際一巨彈中佐の頭部を撃ち中佐の體は一片の肉塊を艇内に殘して海中に墜落したるものなり。「どうです、聽いて居ますか」と加藤男爵は問へど、當時のことゆゑ、聽いて居る者もあり、相手にせぬ者もある。けれども御當人は例に依つて夢中である。

「どうです、一片の肉塊を艇内に残して海中に墜落したるものなり——何といふ悲壯な最後だだらう、僕は何度讀んでも涙がこぼれる」

酔が廻つて來たのか、それとも感慨に堪へぬのか、眼を閉ぢてうつら／＼として、體を揺動つて居る。恐く此時が彼の最も樂い時で、又た生きて居る氣持のする時であらう。しかし間もなく眼を開けて、

「けれども、だめだ、最早だめだ、最早戦争は止んぢやつた、古い號外を讀むと、何だか急に歳をとつて了つて、生涯がお終結になつたやうな氣がする、……」

「妙、妙、其處を彫るのだ、其處だ、成程號外の題は面白い、成程加藤君は號外だ、人間の號外だ、號外を讀む人間の號外だ」と中倉翁は感心した聲を出す。

「其處といふのは」加藤男が聞く。

「其處とは君が號外を前へ置いて甚くがっかりして居る處だ」

「それは不可ない、そんな氣のきかない處は御免を蒙る、——」と彼の諳記し居る公報の一つ、常に朗讀といふより朗吟する一つを初めた、「敵艦見ゆとの警報に接し、聯合艦隊は直に出動之を撃滅せんとす本日天候清朗なれども波高し——此處を願ひます、僕は此號外を讀むと堪らなく嬉しくなるのだから——是非此處を行つて下さいな。」

中倉先生微笑を含んで暫時黙つて居たが、

「それぢやア、貴君に限つた事はない。誰でも今の公報を讀めば愉快だ、それを讀んで愉快な氣持になつて居る所なら平凡な事で、別に此大先生を煩はすに及ぶまいハ、ハ、ハ、」

「何故だ、これは可笑い、何故です。」と加藤號外君、せきこんで詰問に及んだ。

「號外から縁がなくなつて君ががっかりして居る處が君の君たる處ぢやアないか。」

「大に然りだ」と自分は賛成する。

「それぢやア諸君は少しも落膽しないのか」と加藤君大に不平なり。

「どうだらう？ 滿谷君、」と中倉先生も少し此問には困つたらしい。自分も即答は爲兼ねたが加藤男爵の事に就て兼て多少か考へて見た事のあるので、

「さうですねえ、全然落膽しないでもないだらうと思ふ、といふ理由は戦争最中はお互に何人でも國家の大事だから、朝夕これを念頭に置いて喜憂したのが、それがお止になつたのだから、氣拔の體に一寸何人もなつたに相違ない、それを落膽と言へば落膽でせう。」

「そら見玉へ、僕ばかりぢやアない、決してない、だから、喜んで居る所を彫るのが平凡ならばだ、落膽して居る處だつて平凡だらう、どうですね、中倉の大先生、」と「加と男」やゝ得意なり。

「だつて君のやうなもの無い、君は號外が出ないと生きて居る張合が無いといふ次第ぢやアないか」

と中倉翁の答頗る可し。

「ぢやア僕ががつかりの總代といふのか」と加藤男亦た奇抜なことをいふ。

「だから君は我々の號外だ。」と中倉翁の言、更に妙。加藤君此時、椅子から飛上つて、

「流石、中倉大先生様だ、大に可からう、落膽した處、大に可からう、是非願ひます、題して號外、妙、々、」と大満足なり。

それから一時間ばかり更に談じ且つ飲み、中倉翁は一足お先に、「加と男」閣下はグウ／＼卓にもたれ眠て了つたので、自分はホールを出た。

銀座は銀座に違ひないが、成程我が「號外」君も無理はない、市街まで落膽して居るやうにも見える。三十七年から八年の中頃までは、通りがりの赤の他人にさへ言葉をかけて見たいやうであつたのが、今では亦た以前の赤の他人同志の往來になつて了つた。

其處で自分は戦争でなく、外に何か、戦争の時のやうな心持に萬人がなつて暮す方法は無いものか知らんと考へた。考へながら歩いた。

歸 去 來

其 一

母上には唯だ墓參のためとばかり、其餘は以心傳心のつもりで何事も言葉には出さなかつた。「そんなら私も」

と言はれたを打消して、

「一昨年もお歸國りになつて又た……」

と答へた言葉に何となく角の立つたやうで、氣に爲つたが、それでも母上は自分の顔を見て微笑まれたばかりであつた。其夕暮には御自身で土産物などを買整へて直ぐにも出發れるやうにして呉れた。たゞ一品、自分は母上に隠して自から買求め、行李の底に、大事に納つて置いた。匿す程の品物ではない、たゞ、

「それは誰に呉れるの？」

母上は問はれるであらう。

「小川の綾さんに。」

此答が自分の口から澀みなく出るだらうか、頗る覺束ない。

其二

蒸熱い雲が空一面に垂れて、今にも大粒の雨が襲て来さうな頃、自分は一人、新橋に来て少し時間があるから其處らをぶらついて居た。肩を抑へる者がある。振向いて見ると前田といふ何時も快活な男、同國の者で辯護士をして居る。

「何處へゆく。」

「ちよつと國へ歸つてくる。」

「一人でか。」

「さうだ。」

「そして今度は二人連で上京するといふ趣向かね。」

「馬鹿ア言つてる。」

「未だお目に懸らんが宜しく言つてくれ玉へ、何れ御上京の節は拜顔の榮を賜はるだらうけれども」

「馬鹿ア言つてる。」

「明後日の會には出席できないね」

「手紙は出して置いたが、君からも諸君に宜しく言つて呉れ玉へ。」

「あゝ宜しく言ふよ。」

と妙に笑つて帽子を取つて、ステッキを振りながら行つて了つた。「彼奴また會で餘計な事を饒舌で皆なて馬鹿な噂をするだらう」と、自分は前田の後姿を見送りながら思つた。併し別に不快な感も發らなかつた。

間もなく瓦斯燈が点く。雨が降つて来る、横濱から汽車がつく、停車場内は混雑を極めて来た。其間を自分は煙草を啣へたまゝ見るともなく人々の騒ぐのを見て居ると、群衆の蒸暑い中へ折りく飛沫を含んだ冷たい風が舞込むて来る、いゝ心持だ。自分は暫時何もかも忘れて居た。

其三

汽車はさまでこまず、自分の臥べる餘地は十分あつた。雨の降り込むのを恐れて、風上の窓を閉め切つて居たから何とも言へぬ熱さである。隅の西洋人は顔をしかめて居る。自分も堪へ兼ねて後の窓を少し明けて見たが、品川沖から吹きつける風で雨は遠慮なく舞込む、仕方なく又た閉めると、「夕立だ、今に晴れる」と言つた聲が彼方の方でした。

大森を過ぎると、雨は果して小やみになつた。人々いそがしく窓を明け放つ、雨の名残が心地よく舞ひ込む、吐息をついて顔を見合はず、巻煙草に火を移ける者もある、しかし誰一人話をする者はなかつた。

窓から頭を出して見ると、早や天際に雲ぎれがして、夏の夜の蒼い空が彼方此方の黒澄んで、涼しい星の光がきらめいて居る。田舎家の燈火があちこちに見える、それも星のやうである。田舎一面に蛙が鳴いて稻の香をこめた小氣味よい風が吹きつける。

あゝ此香だ、此香だ、自分は思った、「己は確に今わが故郷に歸りつゝあるのである。」

「あゝ此香だ！これだ。」自分は肺一ぱいに此氣を吸った。

自分は四年前に一度故郷に歸つた、其と今度の歸國とは全く異つて居る。二十三歳の男が二十七歳になつて居る、これが第一非常な異である。彼時は學校を卒業したばかりで、其自慢がてらに歸つて、たゞもう子供のやうになつて一夏を海に山に河に遊びたい放題をして過ごした。随分面白く遊んだ。何卒か此度も面白く遊びたい。併し最早二十七の分別男である、兎も角も東京で一個の職業を持つて居る、未熟ながらも既に世間に出て一人前の位置を占めて居る男、まさか先に先度のやうな亂暴な眞似も出来まい。實は最早妻を持つても宜い歳である。

「さうだ妻が有つても宜い歳だ、自分は其目的で歸郷なのだ。」

「甘くゆけば宜いが。」運命の神が囁く。

其 四

自分は空氣枕を出して横になり、はんげちを顔にあてゝ更に空想の世界に入つた。實はそのまゝ

眠入つて了ひたい積りで。

自分が二十七歳ならば綾子は十九歳である、十五の子娘が十九になる、虚のやうな眞である。五人の姉妹の中で一番美しう成人するだらうと叔母も言はれたが、あの眼は誰に似たのだらう。姉妹とも皆な人柄のよい處は母に似たのだらう。父も好人物だが少し頑固で困る、一徹者を自慢にして居る丈け、正直は正直であるが。

自分は頻りと綾子を想像の絹に描いて見たが明白りしない。大きな、睫毛の長い、周防灘のやうに穩やかな眼は微かに浮んで來るが、顔だちが霞につままれたやうで、如何しても明白りしない、其中我が叔母のやさしい丸顔が霞の中から現はれて、にこ／＼しながら「峯雄峯雄、汽車のなかでぐづぐづしないで一足飛びに歸つてお出でなさい、私は待ち切つて居ます、」と例の靜な沈着いた聲で仰る。自分は關ヶ原、琵琶湖、大阪、播磨灘、水島灘を遙か下界に見下ろして、雲の峯を幾個も幾個も蹴破つて飛びゆく。

物音に目がさめて、頭を上げると、汽車は停つて居て、國府津々々々と呼ぶ聲が自分には眠むさうに聞えた。

「未だ國府津か。」自分は欠伸もしないで其儘寢てしまった。

其 五

其翌日、神戸で下車して少しばかりの、用事を済し、又た夜汽車に乗込む。今度は乗合の客に自分と同年輩の海軍士官が居て、何時しか雑談をはじめたが、さて結極がない。ブランデーも少しは手傳つて居たらうが兎に角、年少士官の氣焔は凄まじかつた。列國東洋艦隊の比較論も出る。黄海の役の手柄話も出る。其れかと思ふとミチップメンからケビテンに成るまでに順當に行つても幾年はかゝる、況んやアドミラルになるには何年かゝるか知れないといふ愚痴も出る。

「其くせ少尉で女房を持つて老耄れる準備をする先生が在るから驚く。」

「それも氣樂さ！」と自分は相手の赤い顔、高い鼻、光る眼、まばらの口髭を見つめながら云つた。

「さうサ氣樂サ、併し氣樂がしたければ軍籍に身を置かないが宜い、船乗のくせに女房もないもんだハ、、、、、、、」

海軍士官特有といふ快活な高笑をして、時計を出して見て、

「最早十時半だ、少し寝ないと困るぞ。」獨言のやうに言つて、其儘横になり、自分の方を見乍ら、

「しかし總領に生れた者は氣樂サ、君も其一人だらう、親には孝を盡し妻には忠を盡し玉へ」とにこゝ笑ふ其顔が無邪氣で可愛かつた。見て居る内に其眼が次第に閉ぢて、巻煙草が手から落ちたと思ふと、「あゝ眠くなつた、失敬、寝るよ」と仰向になり、直ぐやすくと心地よげに未來のアド

ミラルは寝て了つた。

喫ひかけた煙草を手荒く投げて、自分は窓の外に顔を出した。ブランデーと議論と煙草とで少し逆上せた顔を夜風がひやり／＼と吹きつける心地よさ。東の森の上が赤くなつて今にも月が出さうにして居る。大空には星が嘩燦さわたつて雲一つ無い。あゝ穩やかな夏の夜！軌道近く並ぶ田舎家が折り／＼飛ぶが如くに開の中に消えて行く。汽車の車の單調な音夜通し鳴く蛙の聲、それが自分の耳には交る／＼聞える。自分は靜に東の方を見て月の出を待つて居た。

二十七年の秋の初、廣島の大本營詰で派遣された時、其時も夜汽車で此處を通つたが、あの時の事を思へば今も心が躍る。今夜の心持と比べて見ると、あの時は高山に登りながら一足一足と眼界が擴がるやうで一足々々氣が勇んでゆく、併し絶頂は噴火口かも知れない。今夜はそれと異つて、平原をゆる／＼流れる大川に舟を泛べて、照りわたる月の夜を靜に下つてゆくやうで、穩やかな樂しい小さな港が自分を待つて居るやうである。而も一昨年せとの秋と今夜とは何か意味深い約束が有つて相呼吸して居るやうに自分には思はれる。

汽車が突然山の麓を回つた爲め、月の出が見えなくなつた。自分は尙も窓に倚つたまゝ、思想に沈むて、見るともなしに黒い山影を見つめて居た。

楽しい追懷の念には必ず一種の哀れが之を包む。併し、之れに花を包む霞のやうなもので、臙る

ぼなるだけ却つて情は深くなる。一昨年こゝろの事など思ふと、自分は何となく哀れを催して来て、都に
残した母のことや、十年前に亡くなつた父の事や、親しい友の事や、あれより是れと思ひつゞけて、
懐かしい悲しい楽しい心の波に漂うて居た。そして此心持が更けゆく夏の夜の晴れわたつた静かな
而も何となく哀れた今夜の様に能く適つて居るやうに思はれる。

身體からだも溶けゆくかと思ふと、眠氣がさして来て堪へられなくなつた。此時、

「君は未だ寝ないのか」と士官が寢惚け聲で呼んだので我に返り、

「イヤ眠くなつて来た」と横になるや間もなく寢入つて了つた。

其六

廣島には朝着いた、宇品うしなからの汽船は薄暮に出る。最早何となく故郷に着いた氣がした、甲板の
上に集つて居る人々の多くが郷音を操つて居る。

船は恰度山中の湖水をゆくやうである。島々の裾には蒼煙が稠曳しういいて居る。大空高く晴れて西天
の餘光水の如き邊りに宵の明星が大きく輝いて居る。其光の長く水に映れる方向に船の軸はしが向いて
居る。動くともなく船は動く、近づくともなく前の島が近づく。吹くともなしに潮風が船の進行につ
れて面を拂ふ。清涼の氣が海面うみに行き渡つて居る。處々に白帆が見える、流石に風は吹いてるらしい。
柳井津やなぎいづに着いたのは夜の十時頃であつたか、港から二里に近い道を車くるまで走ても家に着くのは夜中

になる。深夜叔母を騒がすのも氣の毒と、其夜は其處そこに一泊して、明日、朝早く我懐しき家路へと向
つた。

田布たぶろぎ岳木の峠を越えると、我家の後なる丘の松林が、微にそれと見分けがつく。水場みづばの入江に續
いて遙に天際の一線を劃するは波靜なる周防灘、日に映じて白く立騰るは鹽濱の煙。豊年だな！自
分は思つた。青々と續く田面たづらの末遠く眺めて、

「今年はどうだな、米の出来は。」

「上出来でさア！」車夫は勢ひこんで駈けながら答へた。路傍の萱は朝露に光つて居る。

水場みづばの入江に注ぐ八海川を渡つて、右に堤をさかのぼると間もなく田圃道たんぼみちの車も通らぬやうにな
る、其處そこから下りて車夫くるまに行李を擔はせて歩むと、三方丘に圍れた淋しい小さな谷が直ぐ前に現れ
る、これが自分を育てた搖籃である。谷の奥の丘の麓に、石垣で築き上げた家敷の白壁が朝日をま
ともに受けて居る。それが自分の生れた家である。

門に着いて、石段を上りかけると、鶏が勇ましく鳴いた、家敷は森として居る。目に見えざる力あ
りて、自分を後うしろに押しもどすやうに感じた。自分は直立つた、そして耳を傾けた。

其七

叔母は不在であつた。下婢お光の話に依ると昨日、麻里布まりふの小川せがはに行つて一泊し、今日歸宅けふかへする筈

であるとのこと。

麻里布の小川とは綾子の家である。我が吉岡家及び叔母の近藤家と此小川家は親戚でこそなけれ、古くから親族同様の交際をして居て、互に訪問すれば其夜は泊つて歸る位は常のことである。叔母は自分の爲めに小川を訪うたに違ひない。

自分は東京を立つ三日前に、叔母に向つて歸國の報知を出して、同時に小川の一室、海に突出してある離座敷を此夏の間借りて貰ふやうに依頼した。自分は神戸に一泊する筈が、用向が早く済むだゆゑ、豫定よりか一日早く歸郷つたのである。

叔母は自分の歸宅を今夜か明朝と豫想して居るから、多分麻里布からは今日早く歸るだらうとは思ふが、一時も早く逢ひたく、直に村の若者を使者に立て、迎にやつた。元來自分の叔母といふのは自分の父の妹で此時四十になる寡婦である。三十三の時夫に死なれて、其後は一人の子を相手に何家へも再婚し玉はず、山林田畑、かなりの財産に頼つて安穩に生活して居たのが、自分の一家東京に移轉した後は、我家の不動産總て叔母の監督に任かし、叔母は其家を疊むて我家に住むで居るのである。

叔母は色の白い丸顔の小づくりな人で、思慮深く温厚な女である。自分を可愛がること我子の如く、其樂みは我子の孝一を一日も早く東京に出して自分の監督の下に十分教育したいことである。

自分は叔母を信ずる、非常に信ずる、そして小川綾子の事は豫ねて其れとなく叔母に知らして略自分の意をほめかしてある、賢明なる叔母は多分之を覺つて居るに違ひない。

自分は叔母に一時も早く逢ひたい、其優しい顔が見たい。しかし叔母は昨夜小川に泊つたのである、歸つて来て如何な笑を湛へて自分を見るであらうか、如何な話をするであらうか、さて左様思ふと何となく我胸が穩かでない。ちつとして其歸宅が待つて居られない。

洋服を脱いで浴衣に着更へ、庭へ飛出した。

其 八

井戸傍に行つて、山の井の深い底から汲上げた水で身體を拭き頭を洗ひ、後で釣瓶から直に一口飲むと腸に沁みわたる。井戸の家根から物置の家根へと葡萄棚がわたしてある、青葉をすかして朝日がきらめき、紫の房累累と珠玉を連ねたやう。

家鶏の一族が鷹揚なる牡に導かれて藪から出て來た。藪や山ではしやん／＼蟬が勇ましく鳴き出した。日はぢり／＼照りはじめた。仰げば空は今日も高く晴れて蒼々として深碧の色を凝らして居る。ア、夏だ！夏らしき夏だ！自分は身うちに健康の充ちあふれるを覺えた。

香戸の小門を出ると直ぐ丘に登るべき小徑が有る。丘には一抱以上の松ばかり樹つて居て、自分の家敷を覆ふやうにして高く空を衝いて群り聳えて居る。今朝柳井津からの路すがら田布呂木の坂

より望むだのは此松林で有る。丘の頂まで數百歩ばかりの小さな山ながら、自分の爲めには小兒の時の樂しき記念其大半はこの丘に在るのである。

自分は此丘で啄木鳥を捕へた。此丘で捉迷藏をした。朝早く起きて松茸の得ならぬ香を嗅ぎながら其處か此處かと探した事も幾度ぞ。夕暮には頂の西に蟠屈して居る一座の巖に登つて、兩足を垂れて腰をかけながら麻里布の浦に沈み行く夕日を見送つた事もある。學校友達を引連れ來て、戦争の眞似をした事もある。或歳の秋の初、恐ろしき暴風吹きすさんで戸を破り垣を壊はし葡萄棚を落すなど大荒れに荒れた事がある。其時大概の風では倒れなかつた丘の松が、林の端に樹つて居た中の二三本、根から吹倒されて、暴風が過ぎ去つたあと、自分は總ての小兒の如くに、歡聲を放つて外へ飛出して直に倒れた松を見出し、其一本が彎曲して橋のやうに横はつに居るのを見るや、下駄を脱捨て、恰度藝人が危き綱渡りでもするやうに恐るゝ此橋を渡りはじめた。この様を父上が見給ひ、「危いぞ〜」と叫ばれたが、其翌日父上は木挽を命じて此橋を落してしまはれた。あゝ懐しの丘よ！斯る果敢なき小演劇も、我小兒の時に於て、總て寛大なる爾の額を舞臺としたのである。自分が都に居て様々の事に遇ひ色々思ひ沈む、その忙しい間にも我深き魂、實に幾度か爾の上に飛びしぞ。

「お光！」自分は下婢を呼んだ。「山へ上るから叔母さんが歸宅つたら拍子木を撃つてお呉れ。」山家

では拍子木を種々の合圖に用ゐて居る。

丘の頂は平たくなつて、松の根が蛇のやうに其處等一面、這つて居る。北及び西は小松ばかりゆゑ可成りの眺望が有る。自分は子供の時よく馬乗に乗つて遊んだお馴染の松の根に、先づ腰を下ろした。そして氣が初めて落ちついた。

二日前には東京に居て足を爪立て、「將來」をめぐりて跣足をして居たのが、今は故郷の丘に歸つて、松の根にとつかと尻を下ろして居る。騒々しい現から靜かな夢の世界に入つたと言はうか將た、怪しい、重くするしい夢が忽然として醒め、長閑かな、日の永い現の世界に歸つたと言はうか。

自分は其まゝ少時が間ぼんやりして居た。突然、「若旦那様！」と呼ぶ者がある。誰だらうと見廻はすと小松の上に顔を出して居るのは、自分と同年輩の宇之助と呼ぶ、村の若者である。

「何時お歸いんされました。」

「今朝歸つた。」

「長く御滞留で御座りますか。」

「この夏一ばいは居るつもりだ。誰も變りはないかね。」

「難有う御座ります。」

「徳三は達者かね。」宇之助を見れば自分は必ず徳三を想出す。二人は兄弟も同様の仲よし。

「徳三は此春から布哇へ行きました。」

「さうか」自分は驚いた。

「菊藏も行きました。」

「さうか。」

「私も行かうかと思つて居ります。」

「まア何れ晩にでも緩り遊びに来るが宜い。」

宇之助は去つて了つた。布哇出稼！これが我故郷の流行の一とは兼て知つて居たが、斯くまで村の若者相率ゐてゾコ／＼と出て行く程には思はなかつた。中にも布哇から直ぐ歸らないで亞米利加のはてまで流れ行き、其儘消えて了ふ者もある。それやこれやで出稼のために我故郷では色々の悲しい痛ましい話説が幾多も出来て居るのである。

『世界を家となす！』結構な話である。勇ましい文句である。併し其故郷に於て確實なる生活の中、限りなき平和を享有し得る運命を棄て、黄金の山でも發見するやうに、騒いで、浮立つて、天涯萬里に流浪するのが目出度い事であらうか。幸福であらうか。

『何が不足なんだ！この長閑な、豊かな、冬寒からず夏暑からず、四時の風光に富み、天の祝福を十二分に享けて居る村落に生れながら何が不足なんだ！』自分は思つた。

併し、突然、『我も亦た其一人ではないが、布哇と東京と何の選ぶ處ぞ』と思ふと、豫ねて自分の心の底深く潜み居て、折り／＼現はれて自分を難まして居る『歸去來』の一念が火の如く燃え上つた。少時は叔母も綾子も忘れて了ひ、抑へ難きプライドの氣胸を衝き、昂然として、松の間を彼處此處と大步して居た。

拍子木が鳴つた、激しく、そして急に。自分は引落さるゝ様にして丘を下りた。

其九

叔母は兼ねての優しさを以て自分を迎へた。

「私は今夜か明日の朝あたりお歸りかと思つて居ました。」

「イヤ其積りでしたが神戸の用が早く済みましたから一日も早くと思つて急ぎました。」
夫より一通の挨拶が済むと、

「すつかり成人になつておしまひだねエ、口髭まではやしてサ。」
叔母は茶をつぎながら、自分の顔を見て言つた。

「だつて最早二十七ですよ叔母さん。髭が可笑しければすつちまひませう。」

「そんな立派な髭を除らないでもいゝよ。」叔母は笑つた。

「笑へば今夜すつてしまひます。」

「そして色も黒くおなりだねエ。」

「オヤ、首も序に除てしまひませう。」

叔母は如何ばかり可笑しき事と雖も、決して大聲で笑はない。たゞ莞爾と笑ふ、其笑顔は未だ四十とは思はれない、見た處、四年前と變らなかつた。顔の邊には血色が淡く射して圓い肉づいた顔は昔のまゝに白かつた。其優しい、人柄のよきうな眼元で、自分の顔を頻りと見ながら話された。

「小川でも皆な宜しくといふことでしたよ。」

「さうですか、皆様達者ですか。」

「皆達者ですよ。そして峰雄さんに早く遇ひたいつて言つて居ました。」

「先達手紙で叔母様に願つて置いた、離座敷の方はどうでせう。」

「それがねエ、折悪く今寒がつて居てね、多分一週間もしたら明くだらうといふ事だがね。」

「オヤ左うですか、自分は少し驚いた。」

「なんでも朝鮮から客が來てるやうで、其人が離室に滞留して居るやうでした、」といふ叔母の顔は頗る眞面目で有つた。

「朝鮮からの客つて何者でせう。」

何者で有らうが餘計なお世話ではないか。小川は朝鮮貿易を重なる業とし、朝鮮釜山には多くの知

人、のみならず親族すらある家ではないか。殊に麻里布村の者は澤山釜山に移住して居る。朝鮮貿易をする者は小川の外、麻里布には猶ほ四五軒あつて、皆な五十噸、七十噸、乃至九十噸までの合子船を四五艘も持つて居るのである。「朝鮮」の語は麻里布で少しも外國らしく響かない、東京大阪といふよりも今少しく近しく思はれて居るのである。且つ同村の中に編入して有る馬島、麻里布の岸から數丁を隔つる一小島の住民の七分は已に釜山仁川等に住居して、今は空屋に留守居のみ住んで居る次第である。此等の事情よりして、小川に朝鮮からの客が來て居るに何の不思議があらう。或は親戚かも知れない。然し、自分は唯だ理由なく、「何者」といふ不平をこめた侮蔑の言葉を吐くに躊躇しなかつた。

「何者だか私には解らなかつたがね、大事の客らしかつたよ、随分ちやほや取持つて居るやうだつたから。」

「親戚でせう？」

「親類では無いやうだよ、お常さんも別に詳しい事は話さなかつたが、どうも國の者ではないらしい様子だよ。取引先の旦那だらうと私は思ふが、併し夫も推量だから能くは解らない。」

「一人ですか。」

「番頭と二人らしい。イヤ一人は番頭だらうと私は思ふ。」

「其旦那といふのは幾歳位な奴です。」

「私は能く見ないから知らないが、昨夕磯を歩いてるのを遠くから見たが、若い男らしい。」

叔母は何心なく話したのだらう、然し、自分は何だか好い心持がしない。忌々しいやうな、情ないやうな氣持がして、急に小川に行くのが厭になつた。

「叔母さん私は小川の離座敷を借るのは止ませう。」と口元まで出たが、流石に言出し得なかつた。

「幾日くらゐ滞在するのでせう。」解つて居る事を聞いた。

「だから一週間位だといふ事だが、又た明日にも歸るかも知れんやうな話をして居たよ、お常さんは。」

「小川でなくつても何なら淺田の部屋でも宜う御座いますかね。」

「だつて小川ではお前の來るのを皆な待つて居ますよ。離室が明くうち母屋でもよければ明日からでも來て下さいて大變よろこんで、お前の來るのを樂みにして居ましたよ。」

「さう。」

少しは胸が涼々したやう。然し、母屋は左なきだに多人數の家内で狭いことを知つて居るから、兎も角も朝鮮の客の去るのを待つことにした。

先づ其はどうしても宜いとして、結極、叔母は綾子の事は何事をも語らなかつた。其名前すら口に出さなかつた。何故だらう。

叔母既に然り、無論、自分の口から何で綾子の名が出されう。然し自分は甚だ物足りなく感じた。午後は叔母と共に土産物の分配方を定めて、親戚の三四軒、其他にも使者を立て、送届け、小川へも、五人の姉妹の一人は嫁して家に在らず、殘の四人に夫れ、土産の印だけは送つた。一品、母にも隠して來た物は叔母にも見せず、手づから綾子に贈るつもりで行李の底に潜まして置いた。

其 十

其翌日、晝飯が済むと、山家の常として、叔母も下婢も雇男も、皆な涼しき處を選んで晝寢をして了つた。山家の尤も靜な時はこの時である。野にも山にも人影を見ない。

叔母は自分にも少し寢んだらよからうと、奥の涼しき小座敷に枕まで出して呉れたが、東京では晝寢の習慣がないせゐか、寢て見る氣にならないので、懷に一二冊の書物を入れて、飄然と家を出た。浴衣一枚に兵兒帶、大きな麥藁帽子にステッキ一本、清風は懷に入り放題である。

時は正に盛夏の口中、日は眞上よりぢり／＼と照りつける。併し自分には斯の夏らしい夏の、日盛りの尤も暑い時、あてもなく野山を漫歩することが如何なに住い心持であらう。斯な時には自分は何時も夏の徳を讚美する。たゞ理由もなく身が軽くなつて、氣が確然りして、何か心に深く決する

處あるかの如く感じて横行濶歩するのが例である。夢神ひとたび紅塵の都より飛んで、西の空遠く雲の彼方に通へば、胸を引緊らるゝやうな思がして、如何なる用事をも事情をも打捨て打破つて、飛んで歸りたく、心も空になるのは、實に此の横行濶歩の時を思出すからである。

其處で自分は先づ我近郊中の最も高き丘なる「高塔」と稱するに登つた。高いと言つても麓から十分もかゝらないで其頂に達することが出来る。満山たゞ姫子松ばかりで立寄る木蔭もないが、眺望は第一である。これを向へ越ゆれば更に小なる丘あり、其頂は老松數株、蛇のやうな根を組合はして茂り、麓には雜木の林が取巻いて居て、眺望もよく亦た休息するには尤も適して居る。自分は「高塔」の頂に立つて暫時我故郷の全景を見渡し、遠く南の空、山ひらいて海面の見ゆるあたりには雲の峰兀として聳ゆるを見、毎時ながら我村落の美なる、穏やかなる、靜かなる、そして豊穰なるを祝福して後、此小さな丘へと來た。

松の根に腰をかけ、懷から一冊を取出して膝にのせ、さて大空を仰ぐと、空は鋼鐵を張詰めたかと思はるゝまでに高遠一色、凝つて動かず、太陽は瞬もしないで唯だ熱と下界を見つめて居るやう。たゞ人に迫る一道の活氣みちちとて、うつらうつらと眠り且つ醉へる青葉の末よりは陽炎たちのぼり、正に天地の精氣煥發して其極に至れりと覺えた。此時、乾坤聲なきに聲あり、耳をすませば直ぐ頭の上なる松の梢をわたる風の音は冬の夜の風よりも更に幽遠の調を奏して居る。

書はラセラス傳である、自分は幾度もこの書を読んだ、然し依然として我愛讀書の一たる眞味は失せない。讀みくゞて幾干もなく、身の此谷に在るを忘れ、心はアビシニヤ「幸福の谷」を辿つて居る。あゝ人は幸福の谷に住みながらも、年若き血は更に幸なる原をもとめて流れ出でんことを希ふものかなど思ひつゞけ、何時しか波瀾なけれども却つて春海一望、霞の如きジョンソンの筆は自分を捉へて容易に放たず、斯くて時の經つのを忘れて居た。

「さうだ！幸福の國は何處にある。」自分はふと頭を舉げて、眼を半ば閉ぢ夢想の翼を空際放つた。日はやゝ西に傾いたが、夏の日盛りは實に此時と言つても宜しい。空には銀をのべたやうな白雲一片、悠々として動いて居る。草も木も野も山も悉く日の光に酔うて、精溶け髓まどろみ、周圍の林で小蟬が、懶げに單調に、聲を曳いて居る、それが恰度日の光の波動を無窮に傳へて居るかのやうに思はれ、長い夏の日が此まゝをやみなく續く如く感じられた。

而も人力を以て壓ゆ可からざる、自然の不羈奔逸の氣、天より地より雲より山岳より縦横に交叉して、勃々として自分に迫るを感じた。

「さうだ！眞の幸福の國は何處にある。」自分は起つて、深き意に沈みながら、其處らを彼方此方と歩きはじめた。恰度、昨日の朝、我家の丘で歩いたやうに大股で。

「眞の自由こそ眞の幸福ではないか。眞の自由は我が如き心に多少の準備ある者が田園の生活を營

む事に依つて始めて得らるゝのではないか、我に恒産がある。即ち衣食の自由がある。我には讀書の嗜好がある、即ち心靈の慰藉がある。我には此自然がある、即ち心と體の牧場がある。

「凡て此等の者は天が自分に與へた賜物である。何を苦んで此賜を捨て、自ら好んで都會の生活に此身を投ずるのだ。『事業のため』、『義務を盡さんが爲め』、『國民民福の爲め』、『人類の爲め』、なるほど實に左うかも知れない。希くは以て自から欺く勿れである。凡て此種の美名を以て爾を束縛する勿れである。

「自分は果して少しの束縛を感じずして、都會の生活を樂んで居るか。決して左うでない。虚榮の奴隷に非ずんば、奢侈なる遊戯の使童である。只だ日一日と何者か眼前三尺の先に浮動する處の金色體を逐ひつゝ生活して居るのである。少しも落着いて、俯仰して、此天地の生を受用する暇がないではないか、其上ならず、此事に附いては彼の人、彼の事に附いては此人と、夫れく競走すべき人を有し、或は嫉妬し、或は羨み、或は冷笑し、或は崇拜す。見よ、すべて是れ奴隷の心情の狂態ではないか。

「愚なるかな。」と自分は思はず足を停めて衝立つた。此時ふと胸に浮んだのが綾子である。

「さうだ！若し不幸にして綾子は我妻たらざるも、其でも宜しい。『戀』、『名譽』、なんだ！冷笑したくなる。此心は何者の奴隷たるをも許さない。たゞ自由なる、淳朴なる、剛健なる、不羈獨立なる生

活！それだ！それだ！沙漠に住む獅子の生活こそ我願である。野蠻？野蠻なら何だ。我は野蠻を愛す世に盡すべき義務とや、人は獨立不羈の生活、不平満足而して自由の生活を營むべき權利を有して居るのだ。自から欺いて倫理學とかいふ奴隷の信條を招牌とすべき義務はない！」

思ひつゞけるにつけ、自分は思はず莞爾として微笑せざるを得なかつた。

「眞の幸福は此谷にあるのだ！」

「眞の生活は此山林にあるのだ！」自分は今度こそと決心して丘を下つた。然し直ぐ此まゝで東京に歸らないといふのではなく、兎も角、従前の通り都會に居て、思ふ放題に働いて自由に生活して、其で面白くないやうなら、何時でも、直に足の塵を拂つて此故郷に歸つて來る、其時は如何に此胸が清々するだらうと思つたばかりであつた。

「左う都合よく行けば宜いが。」運命の神が私語やく。

其十一

家へ歸つて見ると、河村といふ親戚から二三日滯在の積で遊びに來いとの手紙が來て居た。河村は箕山の麓なる曾根村に在て、我家より一里半の行程である。叔母の勧めで直ぐ仕度をして家を出た。田舎家の事ゆゑ、別にこれといふ待遇もないが、今も猶ほ小學校々長を務めて居る此家の老主人は自分を昔ながらの子供扱ひにするだけ、自分も我儘を言つて勝手に遊ぶ事が出來て、二日間を面白

く送つた。すつかり子供に成りすまして何も考へず、一日は老人のお供をして近處の沼に鮒釣に行つた。其日の夕暮の事であつた。釣つて來た鮒と我爲に水場の魚塘から上げさせた鱸で晚餐が開かれ、其座敷は我故郷一郡の稻田林野を一眸の中に撥め得る好位置にあることゆゑ、村洒ながら美味く飲まれ、老夫婦と自分と三人、陶然として酔うた時、老夫人は自分の顔を笑ひながら眺めて、「しかし貴様も最早貰つて可えぢやらう。」

「何をです。」

「嫁をサ。」

「最早可いでせうか。」

「可えとも。東京には別品が多いから選取りぢやらう。」

「貰うなら小子は故郷で貰ひたいと思つて居ます。」

「ハ、ハ、お多福ばかりで爲方があるまい。」

「さうで無いでせう。」

「さうかね、お氣に入つたのがあるかね。」

「有りさうですなエ」と自分が答へたので、黙つて聞いて居た老先生と夫人は、顔を見合して笑つた。多分この兒も最早や隅には置けなくなつたと思つたらしい。

「誰だらう其幸福な娘は。」

「幾多も有りますよ。」と言つて今度は自分が笑つた。

「先づ其中で首尾よく及第したのが一番幸福者よ。」老先生が口を入れた。

「さうとも、峰雄さんに貰はれて東京に住むなら女の果報ぢやらう。」

「然し私は最早可い加減に田舎に引込まうと思つて居ます。」

「馬鹿をお言ひなされ。田舎の者は如何かして東京に出ようと思つて居るに、貴様のやうな技倆のあるものが、わざ／＼東京から此田舎に煤りに戻つて如何なるものか。第一東京の母親が承知なさらんわ、其ねエな馬鹿なことは。」老先生は眞面目で、十五年前と同じ口調で教訓を垂れた。

「さうですかねエ」と答へて自分は氣にも掛けなかつた。老先生も亦た我一時の出任せとばかり思つたか、教訓も其ぎり止み、後は楽しい罪のない雑談に移つて三人心地よく酔ひ、晝の鮒釣の疲勞で自分も早く眠つて了つた。其翌日、暑くならぬ中にと、朝早く我家に歸つた。

其十二

其晝時分、麻里布の小川から使者が來て、朝鮮の客は昨夜出發つたから、直ぐにも來て宜ろしいとの事である。且つ使者の話に依ると猶ほ三四日滞在の積りが大阪に向つて急に立つことになつたらしい。使者に來た男は五郎と稱て、元は貧家の孤兒であるのを、小川で可憐さうに思ひ、引取つて世

話をしたので極く幼少の時から小者として使はれ、今日では主人と同船して航海することもあり、年輩は自分より二三若い者が年よりは老けた若者である。自分は以前から此男は能く知つて居た。

それでは夕暮前に行くからと使者を返へした。返へして見たが流石に心は何となく穩でない。無論自分は小川にゆけば歓迎せられるが例である。娘等は皆な自分と極めて親しい、自分のことを兄様と稱呼して居る。然し自分は今度四年目で歸郷つたので、此以前十八であつた二番娘の露子は二十二、十五の小娘であつた綾子が十九の娘盛、其下の子供もそれ〴〵見違へるまでに變つて居るだらう。其處で以前は兄様と呼んであまえるやうに親しかつた此娘等は今度、どんな様子で自分を迎へるであらうか。迎へらるゝ本人は最早昔の唯だの兄様でなく、思想から感情から餘程變つて居るのである。其上、この兄様は一個の大きな望を持つて居るのである。先方でも色々な感情で自分を待つて居るだらう。自分の心の穩かならぬも無理はない。

兎も角從弟の孝一と二人で出掛けた。

其十三

燈の點く時分に小川に着いた。直ぐ離室に通されて行くと、軒端には岐阜提燈がつるしてあり、盃盤が運ばれて居て、主人は待ちきつて居た處あつた。

様子が既に變つて居る。此以前の歸郷の際は唯だ郷里の腕白息子の少し大きくなつたのを迎へた

といふ丈けが、今度は東京からの珍客を待遇するといふ風である。曾てこれまで自分に對して眞面目くさつて挨拶をしたことのない、快活な潤達な主人が、何事ぞ、極く丁寧に辭儀をして、頗る眞面目な顔つきで鹿爪らしい文句を並べて、時候の挨拶から何から正則を踏んで出て來た。

順次に現はれたのが、自分は何時も叔母さんと呼んで居る女主人、露子、綾子、時子、梅子の五人、何れも眞面目な挨拶をして丁寧に辭儀をしたまゝ黙つて控へて居る。兄様所の話ではない、其中にも綾子は澄しきつて居る。露子は第二の母といふ格で末の梅子を傍に引つけて無意味な顔を正面に向けて居る。主人と自分が面白くもない朝鮮貿易談をして居る、其も少しも身の入らない一通りの應答を他の連中は謹んで拜聴して居るのである。孝一こそ大迷惑で、平常も來ては腕白の極をするのが、今日は自分のお影でお客扱にせられ、自分の傍にちよきんと坐て足をもぢくさして居る。

然し主人も斯な窮屈な慕の主人役は元と柄にないので、自分と孝一に入浴をすゝめ、其間に浴衣に着更へて自分を待つて居た。座には主人の外に露子が居るばかり、其他は皆な母屋に引退つて、孝一まで彼方に連れられて了つた。露子はたゞ黙つて酌をするばかり。主人は酒につれて次第に其本色を發揮して來た。次第に其聲が高くなる。

小川家は先代からの船主で、今の主人は竹藏と呼び、可なりの合子船七艘を持つて居て、先づ此近在では金持の一人に數へられ、不足なく世を送つて居るのである。若し一の不足を言へば男の兒のな

いことで、五人の子供が悉く女子。惣領は同郡の豪農に嫁し、次女の露子が家督を取ることに成つて、其養子も略定つて居る。あとの三人が未知數なので、主人の苦の種は先づ此未知數の行末位なことに過ぎない。元氣で率直で、負けぬ氣で、若い時分は北前船を乗り廻はした其道の剛の者、北海の怒濤を叱咤する勇氣と我慢とを有ち乍ら、又瀬戸内の春の波のやうな穏やかな優しい人柄である。如何いふものか自分には過當の希望を囑して呉れて、何時も自分のことを他に吹聴して居た。其處で今有體に言ふが、近在の者は小川の主人は其娘の一人を吉岡の峰雄さんにくれる積りのだと噂し、自分も亦た主人の様子で或は左うかも知れぬと感じて居たのである。若し其噂が事實で、而して自分の思惑が當つて居るとすれば、自分に嫁すべきは綾子の外にない。且つ綾子こそ自分の尤も氣に入つた娘なので。

其處で、自分は今度はこれを決定めて了ひたい積りで歸省つたのである。無論その手續は我が叔母に頼んで、能く先方の様子を探つてもらひ、十分の望を見た處で、叔母の口から其となく話を出し、凡その約束だけ決定めた上で東京の母に電報を打ち、我家で式を擧げる計畫を立て、居た。そして自分は暫時此離室に滞在して、面白く海で遊びながら綾子當人の様子と心持とを略々確める積りであつた。無論自分の口から主人に向つてそんな話の糸口をも示すべき筈でない。併し、ないは主人が酒に酔つたまぎれにでも、それに似た謎語くらゐは掛けてもらひたかつた。處が主人

は酔ふに連れて、朝鮮貿易に關する氣煽ばかり吐いて、互の身の上話など少しも爲さない、爲さうにもない。

「相變らず元氣ですわね」と自分は已むを得ず楫を少し横に取つた。

「イヤ左う言うて貰うと嬉しいけれど最早駄目だ。この節は自分で何處ともない衰へたのが知れますわい。」急に弱いことを言ひだした。

「そんな事を！其身體を御覽なさい。」

「イヤ全たくですよ。身體は以前十分に鍛つた奴ぢやから見た處では、貴様の身體よりか頑固かも知れんが、最早心が弱つて居る。船ならキールが朽ちかゝつて來たのぢやから、とても長くは役に立ちませんワイ、それから見ると貴様などと羨ましい。これからうんと働かうといふんぢやから。」

「どうして僕なんか駄目ですよ。」
「そねえた事がありますもんか。貴様など十分學問はしてお居てるし、人間は智慧者ぢやし、出世するなアこれからぢや。」

「僕は餘り出世したくありません。」無益なことで有つたが、酒のせゐか、つい口が滑べつた。

「何故のう、そねえた事がありますもんか。」と眼に角を立て、叱るやうに言つた。

「出世した處で高が知れて居ます、それよりか早く故郷に歸つて來て、山の世話か田の世話でもし

「長閑に暮らしたはらが善くはありませんか。」

「馬鹿アお言んされな。今から其ねえな坊主臭い事を言うて可えもんか。老人のやうなことお言んさる！」

「さうですかねエ、併し澤山若い者が田舎に住んでるぢや有りませんか。」

「それは其れ、これは此れ、學問が無いなら東京で出世しようと思つても出来ん、貴様のは其れが出来ん、話が違ひます。」

「少しばかりの學問に迷つて、東京で駈競のやうな暮をしないで、別に食ふには困らないし、此方で氣を長く暮らしたはらが人間の幸福ではありませんか。」

主人は黙つて了つた。唯だふーんと言つて、杯の中を熱と見つめて居る。沖からは涼しい潮風がそよそよと吹きこみ、軒の提燈は軽く動いて居る。

「第一、東京に居ては斯な風に落着いて夜が更けやうがお關ひなく、潮風に吹かれながら悠然り酒を飲むで心からの話をする事など、とても出来ませんよ。」

主人は尙もふーんと考へたぎり應へない。夜は寂然として居る。磯を嘗めるやうな波の私語が直ぐ家の下でするばかり、外面は星冴えて薄明く海が光つて見える。自分も何となく感に堪へない心地になつた。主人は急に頭をあげて、

「實に左うかも知れんテ。私なんど何ぼう船で乗り廻はして、港々で仕たい事をして騒いでも、矢張り此阿多々ノ鼻へ錨を投げこんだ時の心持には比べられんからの。」

「故郷は一番穩やかな港ですよ。」

「併し貴様も今少しは波にもまれて来たはらが可からう、今少しは！」

いかで此優しき言葉に逆らうことが出来よう！

「さうです、僕も直ぐ東京から歸ると言ふんぢやアないんです、まア今言つたやうな心持で居るといふだけで、面白くない時は直ぐ歸つて來るといふんです。」

「さうとも、其時は直ぐ歸つてお出でるが可え、波のない港がちゃん待つとるから。」

自分は沁みんと此言葉がうれしかつた。主人は猶も言葉を次いで、

「眞のことをいふと峯雄さんは人間が出来すぎとる。」

「どこがです。」

「今の若い者は少し學問でもすると、直ぐ天下でも取るやうな望を起して騒ぎ廻はる。峯雄さんの其と反對で學問が有つても出世するのが厭ぢやといふんぢやから、大分話が違つてる。併し私は感心ぢや。」

「感心なこと有りませんが、矢張性分てせう。」

「イヤ其ればかりぢやアない、矢張學問の力ぢやらう。私は唯だ貴様が其心持で東京に居て働くな
ら必定出世するぢやらうと思ふ。」

「さうですねエ」と自分は此詰を切上げた。朝鮮の客のことを聞いて見たく思つたが遂に機會が無
くして此夜は已んだ。酒が済んで後、雑談に時を移し、主人は母屋に歸り、自分の寢に就いたのは
十二時過ぎであつたらうか。綾子は一度顔を出したぎり、其後は聲も聞えなかつた。

其十四

二三日滞在して居る中に、娘等の自分に對する遠慮は殆ど一掃されて了つた。自分は以前の兄様
に立還つた。我座敷は集會所の如くなつて、姉の露子までか日に二三度も用事の際を見ては來て遊
ぶやうになり、綾子は半日も我傍に居て自分が孝一や時子柳子を相手にアラビヤナイトの話をし
て聞かすのを傍聴することがある。然し、自分の目には、如何も綾子の様子が變であつた。離室の
縁に腰をかけたぎり、沖の方を茫然眺めて、何か物思に沈んでることがある。

四日目の午後であつた。金手の磯へ遊びに行かうといふ動議が孝一から出て、遂に露子を始め四
人の娘と孝一と自分、五郎が櫓の漕手となり、小川の大傳馬に乗込むて出掛けた。

金手の磯といふは麻里布の子女の遊場で、海中に浮ぶ一坐の岩礁である。満潮の際は僅に其岩頭
を波の上に現はすだけであるが、潮が退くと數十間四方の磯になつて、其岩陰に種々の魚貝が潜んで

居る。其を捕へるは子女の何よりの樂であつた。春先の潮干には幾十人と數へ難き子供が集まる。
自分も小川の人々と從來既に幾度となく此磯に遊んだ。魚又で目下二尺もある黒鯛を此岩陰で突い
た事もあり、章魚を捕へたこともある。海は極めて淺く、磯の周圍で游泳するも危険は更でない。
何より佳いのは景色で、沖を見渡せば杳に祝島其黒き影を水に涵し、其手前に牛島あり、西南は周
防灘と燈灘とが分るゝ處で、其水は遠く四國九州の海峡に連り、天色殊に明かなる日は鎮西の連山
其孫山すら見ゆるばかり鮮やかに現はれて祝島の後景を畫き、更に陸地の方を顧れば水場の入江を
扼する阿多々の鼻は數丁の先に突出して、これに對する小川の離室は其築上げたる石垣を海に涵し、
手を舉げて招けば磯と離室とが合圖が出来さう。馬島の其西端は磯より數十間の間近に其翠松の枝
を翳し、阿多々に連なる箕山の裏は草煙の如く霞みて牧場の様を寫して居る。總ての眺めが鮮やか
で靜かである。一度此磯に春の半日を遊んだ少年は、他日世の波に洗はれて遠く天涯千里の地に流
浪するとも、夢一たび此磯に飛ぶ時、必ずや歸心矢の如きを感じるだらうと思ふ。

我等の船磯に着くと、孝一は最先に下りた。磯には既に一組、吾等の先に來て居たものがある。
皆な麻里布のもので矢張女子が多い。若い男も雜つて居た。此組は我船が着くや歡呼して迎へた。
石は滑る、併し海濱に育つた丈け、露子をはじめ皆な巧に石から石へと連つて歩む。風は沖から可
なり強く吹く、人々の着て居る浴衣は旗の如く翻がへる。然かし岩陰の水は淵の如く湛へて漣すら

立たず玉のやうに澄んで、底の藻は生けるが如く其鬚々を靜に動かして居る。小さな縞の有る雜魚、小首を傾げて熟と藻の先にとまつて居たのが人影に驚ろいて急に岩の薄暗い奥に逃げ込む。呼吸を凝らし鼻が水に着くやうにして、岩の下を覗くと、大きな黒鯛の鰭が鷹揚に水を弄んで居る。魚叉を取直して大概の狙をつけ力をこめて投着ける。岩をかすつた音を聞いただけで、魚は何處にか影をかくして了う。男は先づこの種の慰に現を抜かして居ると、女子は水の全く干た岩の下を覗き或は小石を轉ばしなどして榮螺の類をあさる。無数の岩が落々として其處一面に重なつて居るのだから、多人數の人も散在すれば殆ど誰が何處に居るのか知れない。孝一の如き腕白小僧は岩から岩へと飛びあるいたり、磯の周圍を泳いだりして居る。

自分も魚叉を持つて岩陰々々をあさつて見たが餘り思はしくないので、一の大巖、満潮の際も其頭を現はすべき高さ岩へ這上ぼつて、沖の方を向き、潮風を正面に受けながら衝立つて居た。ふと下を見ると、大きな麥藁帽で肩先まで隠れ、足下には具を入るべき籠を置いた女、小さな岩に腰かけたまゝで沖を眺め、吹きつける風で帽の脷が折り上の方へまくれて居た。綾子らしい。

「綾さん！」自分は岩の上から聲をかけた。綾子は此方を振向いたが、自分を見て莞爾笑つた。自分は岩を下りて綾子の傍へ行つた。

綾子の腰をかけて居る岩は水の際にあるので、二三尺さきまでは小さな波が寄せては返へして居

る。この時、日はやゝ西に傾き、水を射て銀を流したやうに燦爛と光り、其反射が綾子の顔を隈なく照らして暑さうなれど、綾子は氣にも留めぬらしい、其白い顔の眼元を淡紅く染めて居る。

「綾さん何をして居るの、其處で。」

「何も取れませんか、休んで居ります。」と綾子は自分を見上げながら「峯雄さんは？」

「僕も何にも捕れない、最早歸りませうか。」

「未だ早う御座いますよ。」

自分は綾子の横の岩に腰かけて、斜横に向合つた。唯だ二人、斯う向合つて話すのは今度小川に來て初めてである。

「峯雄さんは何時東京へお歸んになりますの。」綾子は低い聲で、覗きこむやうにして聞いた、其調子が何となく沈んで居る。

「何時ツて、未だ決めないが、未だ二週間、事に依つたら三週間は此方で遊ぶ積りですよ。」

「さう」と綾子は言つて、更に「去年は何故にお歸りなさりませんでしたの。」

「休暇が一週間しか取れなかつたから、東京の近處へ遊びに行つて了ひました。今年も當前は一週間の休暇だけでも、故郷の方に少し用事があり、墓參かたゞ歸國るからと言つて無理に四週間休暇を貰つたのです。」

「去年は皆なが待ちきつて居りました。」

「今年は待たなかつたのですか。」

「最早こんな田舎にはどうせお歸りんさることはないと思つて居りました。」

「處が矢張り歸つて來ましたよ。何時歸つて見ても故郷は同じ事だが、つまり故郷ほど佳い處はありませぬえ。」

「さうでお座りますか。私は何だか東京へ行つて見度うて。」

「行けば可いぢやありませんか、今度私の歸るとき一同に行きませんか、姉さんと三人で。」

綾子は軽く嘆息をついて、

「さうなると私はどんなにか嬉しう御座りますが、最早それも出來んやうになりました。」

自分は眼を瞠つた。

「何故です、何故最早出來ないんです。」と忙しく聞いた。胸には言ふべからざる不安の感が充ちて、思はず自分の聲は振へた。

「たいさう思はれますの。」

其時、ぬつと我等の傍に衝立つたのが五郎である。綾子は直ぐ顔を背けて了つた。そして何時しかその顔は蒼ざめて居た。五郎は黙言つて自分と綾子と見比べて居たが、其血相は全て變つて居る。

日に焼けて濫紙色をした顔は言ふべからざる凄味を帯び、其險惡な毒々しい眼をぎよろ／＼さして居たが、

「最早歸りませう。」と荒々しく言放つた。而して急いで船に乗り、大聲を揚げて、

「歸るぞ／＼、掛圖々々する者は置とくぞ！」と怒鳴つた。綾子は怒を帯びた眼で、きつと五郎の方を見たが、齒を喰しぼつた儘、黙つて船に乗つた。

其十五

自分は疑惑の淵に沈んだ。綾子は何故最早東京へ行くことが出來ないか。何故五郎はあんな舉動をしたか、何故綾子は怒つたか。

自分は綾子の柔和な氣質、能く事に耐へ忍ぶ力、如何なる場合にも怒の色を顔に現はすことなき温順な心を能く知つて居る。それが今日は殆ど女子にあるまじく思はるゝほどの怒を含んだ眼で五郎を睨んだ。

自分は能く五郎を知つて居る。渠は天性正直な男である。併し小川に養はれながらも、親なく兄弟なく家なく、又親戚すらもなき身の上を自から悲み、其結果として極めて片意地な頑固な性質の男に成つて居る。自分の氣に向かぬ時は三四日も仕事をしない。或場合には女主人を平氣で罵り、或は主人の娘を叱り飛ばすことがある。其爲め既に幾度となく小川の家を放逐された。然し如何に追

ふとも犬は其主人の家に歸り来る如く、渠は何時の間にか歸つて来て、知らぬ顔で仕事を爲し、知らぬ顔で臺所に上り込んで飯を食ひ、そして夜は何時もの如く物置の二階に寝て了ふ。これが渠の常用手段で小川でも其上渠を追出すことは爲し得ない。小川の娘は皆な渠と共に成育ち、渠の守で育つた。

自分も渠とは寧ろ仲のよいはうで、横着な渠も自分には多少の尊敬を表し、自分が小川に滞在中は能く自分の用をして呉れた。自分は渠の怒り易きを知つては居れど、未だ曾て今日のやうな險惡の相を現はした渠を見たことがない。今日のやうに無禮な舉動を自分に示したことはない。自分は渠の人を人とも思はぬ横着を知つては居れど、今日ほど渠の傲慢な態度を見たことがない。

すべてが疑問である。綾子は磯より歸つたまゝ、離室に顔を出さない。自分は入浴のとき、母屋へ行つて其となく様子を見たが別に變りはない。露子に向ひ「綾さんは」と聞いたら、露子は何氣なく、「二階で裁縫をして居ります」と答へた。

何て酒が美味からう。自分は夕飯をそこ／＼に済まして磯へ飛出した。夕暮の海ほの暗く、馬島の谷は晚煙を罩めて居る。自分の胸は益々搔き亂れるばかり、呼吸も塞りさうな重い鉛のやうな憂愁が我心を壓へて居る。若しやと思ふ一種の恐怖に襲はれる事も度々て有つたが、其時は嘲る如く之を追拂つた。

彼是一時間も波打際を往きつ復りつして居たが、離室の縁から「兄様々々」と呼ぶ聲がした。子供等が自分の譚を待つて居るのである。離室に歸つて見ると、露子も綾子も居ない、時子と梅子と孝一だけである。自分は子供に失望させるが氣の毒で、苦痛を忍びつゝ強ひて昨夜の續きを語り聞かした。話すうち主人が入つて來たが、九時を打つて、子供等の散じた後、主人は自分と二口三口雑談して、他に何か言ひさうにして居たが、自分の様子の自から平常と變れるを見て、そこ／＼に歸つて了つた。自分は直ぐ磯へ出た。

其十六

自分の頭は熱し居れども、身うちには怪しき寒慄を覺えた。自分の今まで計畫して居た樂しき生活法が一時に破壊するのではないかと思ふ毎に、自分は思はず足をとめて、波打際に凝立した。小川の主人が何か言ひたげにして居たのは何だらう、自分は更に一の疑惑の種を作つた。今日、金手の磯へ行つた時乗つた大傳馬が、もやひを陸の杭へ取つて水際から五尺許りの處に浮んで居る。自分はふと乗つて見る氣になつてもやひを手繰り傳馬を寄せて飛び乗つた。之は濱邊に住む人のよく行る事で、夏の夕暮など斯くして船の艫に腰を掛けて居ると涼しさも一層であるので。自分が飛乗ると傳馬は又する／＼と沖に出たが、もやひが有るので直ぐ止まつた。暗い沖から潮風が軽く吹いて居たが、錨を投げて綱をゆるめてあるので船はふら／＼しながらも磯に横はるやう

なことはない。自分は艦に腰をかけたまま、熟として物思に沈んで居た。大空は能く晴れて銀河は冴えに冴えて居る。麻里布の浦を擁する山は黒く屏風のやうに峙ち、水場の入江に碇泊する帆前船、合子船、和船などの舷燈檣燈は遠く闇の中に光つて星のやうである。海に望んだ家々の燈火は金蛇のうねくと水に映じ、何處となく三絃の音すら聞える。

磯づたひに、だみ聲を振立て、船唄を歌ひながら来るものがある。其聲は五郎であつた。渠は次第に傳馬の方へ近づいて來たが、もやひの處まで來て、これに足をかけしものか、前へのめりさうにして衝立ち、自分の方を透し見て、

「誰か。」と怒鳴つた。

「乃公だ！」

「誰か。」と再び怒鳴りながら、ざぶくと水を踏んで船に近づき、ひらりと飛乗つた。裸體同様の装いで自分の傍に來て、自分の顔を覗込んだ。酒の臭がぶんと鼻を撲つた。

「吉岡の若旦那か、フン。」

「乃公だが如何した。」

「フン！」

「何がフンだ。」

「貴様は今日金手で綾嬢さんと何を話した。」

「何を話さうが餘計なお世話だ、汝の知つた事か！」

「フン！何を話したか言うて見しようか。」

「餘計なお世話だ！汝こそ今日何んであんな無禮をしたウム、コラ！」

「フン、何が無禮ぢやらう、私が何を爲たらう。」

「自分の胸に聞いて見ろ！無禮な奴だ、綾さんは汝の何だ、主人ぢやアないか。」

「何を胸に聞くのぢやらう。」と五郎は人を嘲る靜かな口調と人に傲る落着いた態度で船端に腰をかけた。

「馬鹿野郎！」自分はむしやくしやくして唯だ渠を罵つた。

「彼方へ行け！馬鹿野郎！」

「さうよ、貴様は智者ぢや。何でも御存知ぢやらう、綾嬢さんが近いうち朝鮮へ行くのも。」

「何だ、何を言ふんだ！」自分は殆ど夢中に叫んだ。

「フン御存知ぢやらう、此間まで離室に滞留して居つた客の處へ綾嬢さんが嫁くことに決定つたのを、御存知ぢやらう。」

「何を言ふんだ！それが如何した、乃公が知つてたら如何した、馬鹿！」自分は躍起となつて罵つた

「何を言ふんだ！それが如何した、乃公が知つてたら如何した、馬鹿！」自分は躍起となつて罵つた

「十日もしたら彼客が大阪から歸つて来るぢやらう其時よく解る。私は馬鹿か貴様が智慧者か、フン、フン！」飽くまで落着いて言つた。

「コラ彼方へゆけ！行かないか。」自分は猛然と衝立つて、片手にステッキを握りしめた。

「どら歸つて寝るかナ。」と嘲るやうに言つて、渠は船を下り、舷に倚りながら又此方に向けて、

「綾嬢さんは私の何だと聞きましたの。」

「黙れ！彼方へゆけ！」と自分は渠を見下ろして叫んだ。

「フン！言ひましようか、私の情婦で御座ります！」

「何だ！」自分はステッキを閃かして五郎の肩先を打つた。

「打つたな。」渠は苦痛と憤怒とを壓しつけた聲で唸つて、二足三足後に退きながら自分を睨んだ。

「フン！」とさも毒々しく嘲けつて、大股に水を蹴りながら、忽ち闇の中に消えて了つた。自分は

ステッキを投げ捨てたと思ふと頭がぐら／＼して來て、倒れさうなを踏しめ、夢路を辿る如くして離室へ歸つた。

其十七

局面は一變した。

自分は其翌日早朝、急に用事が出來たと稱して孝一は残し、一人車を急がして我家に歸つた。叔

母には何も話さず、唯だ舊友を訪ひたくなつたとの口實を作つて、直ぐ旅装を整へ、田布施の停車場から汽車に投じて西へ向つて馳せた。切符に徳山までのを買つたが、實は徳山へ下りて何を爲るのか、誰を訪問するのか、其より何處へ行く積りか、其様ことは少しも考へなかつた。唯だ一時も早く地を變へたく思つたのである。

何たる相違であらう！僅か十日前には色々の樂さを前に控へ、種々る空想を描いて汽車の窓に倚つたのが、今は恥、怒、惑、限りなき悲痛を懷いて、たゞ茫然と車中のベンチに此身を投げんとは！

自分は強ひて何事をも思はざるよう力めた。初めは窓外の景色をも眺めず、新聞をも見ず、唯だ眼を閉じて居たが、悲哀は時として味ふに足るべきも、恥辱と憤恨に至つては、我心これに觸るゝ毎に殆ど全身の血の逆流するを覺え、到底これに抗ふことは我力及ばず、これに觸れざるよう力める外、仕方のないのを感じたから、或停車場では新聞を買ひ、或停車場ではプラットホームに下りて一分間の散歩をすら採つた。

徳山より馬關、馬關に二三日滞在して此處の裁判所に務める友人と飲み、馬關より山口に引返へし、此處に一週間許り滞在し、我舊友を一々訪問し又舊友を集めて遊び、それより更に萩に出て、萩より山口に還り、斯の如くして彼是二週間以上の月日を唯飲酒と雑論と圍碁との間に送つた。何を得たか。何をも得ない。唯だ睡眠の不足と飲食の過度より生ずる荒々しき感情、野卑なる慾

情だけを贏け得た。あゝ此の如くして自分は遂に如何なるのだらう！

萩から山口へと引返した日の夕暮であつた。自分は餘り頭の痛いので一日の疲勞をも厭はず一人、龜山の麓なる幅廣き道を散步した。夕闇のほの暗い中を歩いて中學校の校舎の前まで來た。恰度夏期休業で門は閉ぢられ、寄宿舎の窓よりも燈火もれず、さしにも廣き校舎の内外が寂然として居た。十餘年前、自分も亦た此校舎に居たのである！ 自分は暫時龜山の黒き影を眺めて居たが、此時、言ふべからざる悲哀胸を衝いて湧き、柵に倚つたまゝ聲を飲んで哭した。

其翌朝直ぐ山口を立つた。自分は心に堅く決する處あり、一寸故郷に歸つて叔母に逢ひ、直に東京に向つて出立する積であつた。未練にも綾子に渡すべき機（きり）のなかつた祕密の土産（みやげ）、それは何であるか言はない、其を行李の底に入れて携へて來たが、山口を立つ前の夜、寸々に破つて了つた。

其十八

運命は何時まで我を弄せんとするぞ！

綾子は死んで、而も悲惨なる最後を遂げた。叔母の泣きながら物語る事實は真相を得て居ない。叔母の話に依れば、

我が小川を立つた日より五日目、彼の朝鮮よりの客大阪より歸つて、直ぐ結納の取交しが濟んで結婚の事は決定り、其より三日經て客は愈々釜山に歸るべく、そして小川の主人は綾子を連れて客と

共に朝鮮に渡り、目出度き式は彼地にて盛に擧げる筈に決定つた。其出立の前日、これが當分故郷への名残と、小川の主人が主張して、一家擧つて、船も二艘を用意し、酒肴を積んで金手の磯へと遊びに出た。無論、彼の客も其一人であつた。

處が午後三時になつて空はよく晴れて居たが急に風が起つて、見る／＼沖は白くなつた。併し海に慣れて居る者ばかり、且つ此邊の海が荒れた處で高の知れたものゆゑ、關はず遊んで居た。併し海が浅いだけ波は益々高く、金手の磯は忽ち白波の勢烈しく圍む處となつた。そこで愈々歸る事になり、船を磯の陰に廻はした。此處も船の動搖は強いが、深い丈けに直に岩の下に着け得るので、先づ子供より順々に乗らしめ、船に在つて其手を執る役を五郎がした。船は舳を岩に打着けながら上下にあほるので中々乗り悪い。綾子の番になつた。五郎が其手を取つたと思ふと、如何なる機か五郎の足が滑べつて、二人は眞倒様に落ちた。小川の主人は驚ろいて直ぐ飛び込んだが、間に合はない。二人の死體は別々に引上げられた。

以上の如くである。そして五郎は游泳の達人ゆゑ、若し酔つて居なかつたら二人とも無論助かつただらうといふ推測であつた。

總てこれらの事は事實の真相を得てない、と自分は思つた。叔母は語り終つて、思ひ出したやうに、自分に宛てた綾子の手紙を渡した。手紙の文言は、

「突然の御出立につき御心のほども相わかり其夜は悲しく泣き明し候私の口よりは何事も申し上げ兼候何にも姉より御聞取り被下度候遠からず朝鮮へ参る身には今一度お目にかゝり度く願へどそれもかなはず候随分御身を御大切に御出世のほど蔭ながら祈上候なほ幾末永く御忘被下まじく候」この手紙を読み了ると共に、一の恐ろしき疑が自分に起つた。事に依ると自分は五郎に欺かれたかも知れない。

「叔母さん此手紙は何時來ました。」

「お前が立つた日の翌日、朝早く使者が持つて來てお前が歸宅つたら渡してと言うて行きました。」

自分は直ぐ小川へ行つた。

主人の語る處は叔母の話と同じである。主人も亦た事の真相を知らない。併し自分と雖も更に意味深い事實が潜んで居ることを知つて居るばかりで、其が如何なることかは殆ど解らない。疑より疑へと心は迷ふばかりである。自分は露子に綾子の墓へ案内して呉れると頼んだ。露子は其と悟つて、直ぐ自分を促して小川を出た。

墓は小高い丘の上なる、小川家累代の墓地に在る。丘を周つて砂川があつて其に石橋が架り、これを渡ると左右は人の脊を没するほどの薄生ひしげる小徑あり、爪先あがりつまさきにこれを登ると間もなく墓地に出る。墓地からは東に向つて近郊を見わたすことが出来る。

自分と露子は此墓地に達するまで殆ど一言も交はさなかつた。露子は木標のみ立てる新墓に向つて禮拜し、座を自分に譲つた。自分は殆ど正面に墓に對し得なかつた

「峰雄さん此處へお掛けになります。」と露子は松の根なる石の塵を拂つた。

「一體まア如何したのです、僕には少しも解りません。」と自分は先づ口を開いた。

「妹の手紙を御覽になりましたか。」

「見ました。」

「それ私も斯んな事にならうとは夢にも思はなかつたので。貴様が急に我宅をお立になつた日、晝過ぎに近藤の叔母さんの處から、貴様は山口の方へ遊びにお出になつたといふ知らせが來ました、それを妹が聞いて直ぐ二階へ上がったまゝ下りて來ませんから、如何したかと私が上つて見ると泣いて居ました。」

「泣いて！」と自分は思はず眼を瞠つた。露子は最早眼に涙を一ばい合んで居た。

「私は其時五郎は金手の磯で貴様と妹とに大變無禮を爲たことを聞きました。」

「さうです、僕も彼の晩五郎に會つて、何故五郎があんな無禮をしたか其の理由が大概分りました。」

「きつと左様で御座りませう、妹もさう申して居りました、きつと五郎が何か餘計なことを貴様に

話したらうツて、口惜さうに泣いて居りました。」

「綾さんと五郎と何か関係でも有つたのですか」と自分は思切つて問うた。

「貴様はさうお思ひなれますか。」露子は涙の眼を睜つて、きつと自分を見た。

「唯だ五郎が妙なことを言つたからです。」

「それは餘まり妹が可哀さうで御座ります。」と露子の唇は戦慄へて涙は頬を流れた。

「この前貴様がお歸りになつた時は、妹はまだ十五で御座りましたが、如何いふものか月日の立つにつれて貴様をお慕ひ申して、一昨年の夏も去年の夏も、貴様のお歸りを待ちきつて居りました。私はこれを能く知つて居りましたが妹も私の知つて居ることを知つて、私には何でも話し居りました。貴様が時々私共に手紙をおよこしなされる度に、妹が一番喜んで三度も四度も繰返して讀んでは丁寧

に自分の用箋筒に納めて置きました。處が彼の五郎で御座ります。」

露子は少し言ひ淀んだ。自分は熟と唇を噛んだ。

「彼が去年の暮あたりから煩さく妹に着き纏つて、これには妹もほとく困りましたが、御存知のやうな氣質で御座りますから、父母にも申さず、唯だ私のみに打明けて、或時は二人で相談し、直ぐ父母に話して彼を追出してうかとした事も御座りました。處が彼奴は馬鹿の向う見ずと片意地な奴で御座りますから又た後で如何な仇をするかも知れず、五郎も時々妹に向つて、若し何處かに

嫁くやうなら必定邪魔をしてやると左様言つて赫しますから、二人も彼には成るべく關はぬ様にして、妹も一人で五郎に遇はないやうに逃げて居りました。」

「さうでしたか！」自分には殆ど總ての事情が讀めた。と思ふと慚恨の念が胸を衝いて起つた。

「それで少しはお解りで御座りませうが、妹は全て蛇に見込まれたと同じで、私も眞實に可哀さうでなりません。處が父が此春朝鮮に參りました時。日野屋といふ大問屋へ妹を嫁ることに略約束したらしう御座ります、私共も眞實此頃までは何にも知りませなんだ。さうすると、先達日野屋の若旦那が番頭を連れて突然やつて来て、其時初めて父は約束のことを妹や私に話しました。妹は此の話を聞いた時、唯だ黙つて居りました。私は妹が如何する積りだらうと其晩聞いて見ましたら、父が一度約束して、先方が又た彼アやつて来た以上は嫁く、と申しました。

『そしてお前は峰雄さんの方は如何するの』と聞きましたら、

『姉さん、其は最早言うて下さるな、私は斷念めました。私だけ幾多ら思うても、こればかりは如何もしかたが御座りません、恰度五郎が私を思ふのと同じ事御座ります。それだから何時まで五郎に狙はれて苦むよりは、死んだ積りで何處へでも嫁きます』と申しました。私は泣きました。妹は耐へ性が能う御座りますから、蒼い顔をして熟と慄へて居りましたが、用箋筒から貴様の手紙を出しまして、

「姉さん之れを貴様の方へ納つて置いて」と私に渡しながら
 『姉さん私ほど不幸なものが有りませうか』と言つて、其處へ突伏して泣きだしました。」
 自分は最早聞くに堪へなかつた。拭うても拭うても涙は溢れ出る。
 「解りました！ 僕が全く思ひ違へをして居ました。五郎が僕を欺したのです。五郎が故意と綾さん
 を殺したのです。」

「さうで御座ります！ 五郎が殺したので御座ります、それを誰も知らんで怪我に落ちたのと思つて
 居ります。」

露子は泣入つた。自分は、

「お露さん！」

「ハイ。」

「綾さんは僕の心を知つて居ましたらうか。」

「今度我宅へお出でになつて、妹は初めて知りました。それで私は、未だ結納が済まんだから今
 の中、父へ話して如何にか爲て貰へと申しましたら、其れでは父の立つ瀬がなくなり氣の毒だから、
 黙つて行く、自分は全然あきらめたと申しました。」

これ犠牲である、自分は最早此上を聞くことが出来なかつた。小川には又た明日出直すと言つて

露子に墓地で分れた。

夏は半以上を過ぎ、秋は既に來た！ さなきだに自分には、夏の將に逝かんとして秋氣漸く動く頃
 が尤も哀愁の深きを催すなるに、更に此の悲、悔、恨を懐いて、斜陽かすかに野末に残る寂しき
 野路を一人辿つた。眼に滿つる丘、林、野、川、先頃まで我を愛し我を慰め我が爲めに微笑した者が、
 今は冷然として、自分を迎へるやうである。

其十九

其翌日、小川を訪うた。今度の打撃は全く主人の心魂を挫いて了つた。あゝ憐れなる老水夫！ 渠
 は最早先きの元氣はない。

「僕は明後日あたり東京へ立たうと思ひます、最早當分故郷には歸りません！」
 「何故の、まア今少し遊んでお行きなされな。」

「憐れむべし、主人は何も知らない、知らないが可いだらう。」

自分は其夜、我家に歸り、強ひて眠らうとしたが、連日の疲勞にも關らず寢就かれない。

叔母の止めるのも聴かないで、近郊を目的もなく歩いた。悲哀の甘きは、泣くべし、歌ふべし、
 其苦きに至つては、唯だ冷やかなる涙の力なく頬をつたふばかりである。

不羈、獨立、自由！ 人は此地上に於て其十分を享有すべき約束を持つて居ない。

「戦闘！さうだ戦闘こそ人の運命だ。たゞ夫れ戦闘それ自身が人の運命だ。行かう、明日^{あすた}立たう、明日！」

別天地

上ノ一

「やア内田君！」と呼ぶ聲に振り回つて見ると野田大尉である。

「やアこれは珍らしい、君は此船に乗つて居るのかね」と自分は尋ねた。

「イヤ君が僕の事を聞くよりも、君が先づ此船に乗りこんだ理由から言つて貰ひたいものだ。」と野田大尉は其逞しい頬髯を両手の掌で摩り上げた、これは此人の以前からの癖で、自分はこれを見て、先生昔のまゝだなと思つた。

「別に理由は無、便乗だ。」と自分は故意と手軽く言ふと、大尉は、

「便乗は解つて居るが、目的は何だと言ふのサ。」言ひつゝポケットからシガーを出して、

「如何だ、喫煙室に行つて話さうぢやないか。」

「よからう！」と同意し二人は左舷の一室に入った。東京丸は今しも波穏かな周防灘、豊前の沖を進みつゝあるのである。

「目的は何だ。」と大尉はソファに身を投げて再び問うた。

「從軍サ！」

「又か！」と大尉は驚いた顔をする。

「驚かんでも可いぢやないか、君だつて又出かけるぢやアないか。新聞記者は二度從軍すべからずといふ規則もないやうだ。」

「相變らず理窟を捏廻はすねえ。其れで？」

「それでは？」

「それで海陸何れの從軍だ」

「情ないことを聞くぢやアないか。一度艦橋に立つて砲烟を浴びた人間が今更鞋かけて軍隊の後からノコノコと歩けもすまいぢや。」

「強さうなことを言ふが、それで軍艦は何に乗るのだ。」

「それを聞かれると少しばかり閉口するが、これも命令だから致方もない、實は「千代田」だ。」

「オヤ！眞實かね」と野田大尉、其髯面を突出して半分笑ひ、半分驚いた風。

「せめて富士か、それとも磐手へでも乗せて貰ひたかつたのに、「千代田」とは僕も少々凹んだよ。」

「オイ、贅澤を言ふな。僕も「千代田」へ乗組むのさ。」

「眞實か」と今度は自分が驚いた。

「イヤ全く之は嘘のやうだがね、日清の役も同じ艦で半年以上も暮しサ、今度も亦君と僕が同じ艦に乗り込むたア實に妙だ。實は千代田の水雷長が病氣で急に退艦しなければならんことになり、其後釜を僕が命ぜられたのだ。昨日まで吳の水雷團に居たのが昨夜突然命令が出て、今日直ぐ出立さ。」

「愉快々々呑う、以て再會の祝杯を擧げ、以てお互の健康を祝さう！」と自分は飛上がつて喜び、ベルを押した。

「大賛成！」

使童が來たので自分は、

「ビールを持つて來て呉れ。」と命ずるや、野田大尉は、

「シャンペンにして呉れ！」

「食堂へ持つて参りますから。」と使童は言ひ捨て、去つてしまつた。二人は直ぐ食堂に行つた。

自分は野田大尉ほど愉快な軍人は少ないと思ふ。彼と相知つたのは明治二十七年十月、自分が大同江で吉野艦に乗込んだ日からである。彼は其時少尉で分隊長であつた。士官次室には種々年少士官が居たが其中でも自分は野田と最も親しくしたのである。

軍人氣質の中で一番自分の好んのは、率直らしく舉動つて内心甚だ下劣なことである。自分の知つて居る某大尉は例の率直を行き、都合の可い時ばかり大言壯語して禮儀を無視する。又某中佐は

率直の皮を被つて傲慢の實を行ふ。又某大尉は率直で以て外見を張る。一口に言へば、軍人は率直の二字で其品性の下劣を覆はんとする者が随分少くない。心ある者から見ると、これほど見苦い者はないのである。

然るに野田大尉は軍人であるから率直なのではなく、品性が如何にも眞實であるから、自然と其舉動が率直なのである。

彼は能く語り、能く論じ、能く黙する。そして總てが自然に出るので彼の一舉一動には少しも虚偽の影がなく、何時も晴れ々として居る。

彼は随分激論することがある。一步も譲らんで舌戦することがある。しかし其爲に相手の恨を買ふやうなことの無いのは、彼の心事の何處までも公明正大であるからであらう。

從軍中、自分に最も親切なは彼であつた。彼は自分が艦内の生活に慣れないで、種々の不便や苦痛を被むる時、常に何くれと世話をして、心から自分の相談相手にもなり、自分の保護者ともなつて呉れたのである。

日清戦役の時、海軍從軍記者は皆な何れの軍艦でも十分なる待遇を受け、軍人の彼等に對するや。出来るだけの親切を盡したに相違ないが、然し恐らく内田康三なる自分が吉野艦に於て受け得た程の愉快なる生活をば、彼の戦争の最中に受け得たものは恐らく他にあるまい。それは外でもない、野

田大尉當時は一の年少士官たりし此男のお蔭であつたので、自分は少なからず野田に感謝して居ると同時に其人物を敬重して居つたのである。彼も亦、自分をば唯だ一個の新聞記者として見るばかりでなく、何處かに變つた處のある、朋友とするに足る男と見て呉れたらしい、であるから、其當時艦内に於ての仲の善かつたことは無論のこと、自分が退艦して後も、度々手紙の往復をなし、彼が上京した時け四五回も自分の家を訪ねて呉れた程であつた。

然し、彼は要するに海上の人、自分は陸上の人、彼は劍の人、自分は筆の人、二人の生活の餘りに異なつて居る爲めに、心ならずも何時しか互に疎遠になつて此二年ばかりは會つたこともなく、手紙も往復し得なかつたのである。

其が今度の戦争で又もや、同じ軍艦に乗り組み得ることとなり、而も互に思はざる便乗船の甲板の上で出會ふとは！我等二人シャンペンの杯をあげた手の震うたのも無理はないだらう。

上ノ二

「君は少しも變らないねえ」と野田大尉は自分の顔を見て言つた。「何しろ相變らず元氣の可いのが何より嬉しい。」

「僕も變らないだらうが君も變つて居ないやうだ。新聞記者と軍人は何時も氣が若いから、それで變らないのだらう。若宮大尉や山口大尉などは其後如何だね。山口の屁理窟には流石の僕も數々た

ぢろいだが、先生今度は何に乗つて居る？」

「屁理窟が中つて彼奴今は中々羽振が可いぞ、旗艦に乗つて禪を掛けて居る。」

「彼奴が！」

「イヤ驚かんでも可い。彼奴あれで中々才物だよ、君とは喧嘩ばかり礼つて、随分士官次室を騒がしたが、實際、君と議論をやつて政治問題にしる又哲學じみたことにしる彼だけの理窟を捏廻すのは次室の中で彼一人だつたらう。」

「さうさ、馬鹿ぢやアないが惜しいかな膽力が足りない。」

「ハハツハツ、、、又君の人物評が初りかけたぞ山口だつて男だもの人並の膽は持つて居る。」
 「だから可けない、人なみより多くの智慧を持つて居るものは、人並より多くの膽力を持つて居なければならん。若しさうでなく膽力は人並で、智慧は人並に優ぐれて居たら其人は、人並よりも却つて臆病なことをするものだ。なぜならば智慧は人をして前後左右を顧慮せしむるものだから、やゝもすると大事の場所て敵に一着を輸するやうなことをする。けれども此邊の消息は足下等、武人の容易に解する處ぢやないサ。だから山口もモテるのだ。」

「御説法難有う。何しろ君は益々元氣だ、一つ君の元氣を祝さう。」と野田は杯を舉げた。

「敢へて僕の元氣とのみ言ひ給ふな、お互の元氣を祝さう。」と自分も杯をあげた。二人の杯の相觸

れた時、野田は莞爾と笑つて、

「今度の對手は此前の對手とは大分調子が異ふから、君も覺悟して居ないとならんぞ。」

「何の覺悟を。」と自分は杯を置いて故意と問ひかへした。

「まさかの時の覺悟サ」と野田大尉は言ひつゝ杯を干して「今度も先のやうに士官室や次室で太平樂を言つて居て、それで戦も勝つて通信も出來ると思つたら當が違ふかも知れんぞ。」

「別に覺悟も不要んだらうと思ふ。陸軍と異つてやられるなら新聞記者も諸君と同じことで記者だけは特別を以て艦の沈む時に空中にぶら下る譯でも無いからナ。それに今から思へば此前の戦争は殆ど慰半分のやうであつたが、當時はどうして、僕だつて大に覺悟して艦隊に従軍したのだ。けれども考へて見ると、覺悟も何も要つたものでない、要之プラス、マイナスだ、死を冒すからには又其だけの愉快があるし、戦争を見物するだけの樂には死といふ危険が附随するのは當り前だらう。」

「さうさ、先づ理窟を言へばさうサ」と大尉は陶然と酔つて窓の下のソファに身を横たへながら言つた、其様は死も生も彼に取つては別に問題に非ず、たゞ自然に來るべき自然であるらしい。

二人は暫時黙つて居た。自分も佳い心地に酔つて來た。此刹那、言ひ難き樂しさが自分の心に湧き上がった。

「あゝ愉快！」と自分は思はず叫び、そして同じくソファに身を投げた。大尉は唯だ微笑んで自分

の顔を見て居るのである。

自分は此樂みを自分ならぬ若い人達にも知らしたいと思ふ。然し、實地を経た人でないと到底解るまい。

東京丸は戦時の御用を命ぜられた運送船に過ぎないけれど、自分は既に軍艦に乗つて居ると同じ心持になつて居るのである。嗚呼、戦時に於ける艦内の生活、戦争を見物して、其を通信する外、艦内に於ける一の勞役をも持たぬ新聞記者の生活！世にこれほど楽しい生活があらうか、戦争なり、故に意氣昂り、軍艦なり、故に別天地なり、別天地なり、故に擾々たる浮世の煩累を絶ち、而して此別天地には飲む美酒を蓄はへ、食ふに肥えたる牛、熟したる果物を用意し、眠るに柔軟なる床あり、廣濶なる自然の大觀は四方を圍み、オゾンを送る潮風は大口を開いて吸ふがまゝなり。且つ生や死や、運命の手に託して朝と夕とを計られざるが故に昨日を思はず明日を思はず、今日現時の事は今日現時にして足り、今飲む酒は今の命なるに於てをや。自分は曾て此生活を一度したから如何しても其味を忘れることが出来ず、今度も随分止めた友もあつたけれど、心一度この生活を思ふや、名譽も富貴も長生も何のそのと、決然として再び従軍記者の一人となつたのである。

「君は千代田に乗つたことがあるかね。」と突然大尉が問ひかけた。

「イヤ一度もない、どんな艦だね。」

「さうサ、どうせ小ぼけな巡洋艦だ、が小じんまりして居て、割合に住みよい艦だ。砲は十二珊以上のものを持たんから攻撃力も弱いし、又薄つぺらい「ベルト」だけのことから防禦力も弱いが、あれでも此前の戦争では本隊の二番艦として可なり働いたものだ。」

「何にしる僕は新造船に乗りたかつた。併し君が千代田に乗り組むから最早何より満足だ。やられるなら同時にやられたいものだ。さうぢやアないか。」と自分は大尉の顔を見て言つた。

「運だから何とも言へんサ。」

「だから僕は君の武運長久ならんことを祈り、僕の筆運の拙からざらんことを願ふ。」

「大丈夫！「千代田」それ自身が元來運の好い艦で、此前の戦争でも旗艦の次に位して何の戦にも加つたけれど遂に負傷者一人出さなかつた程だ。」

「イヤ今度は其天佑なる者を頼みにしたくないものだ。」

「無論サ！」と大尉は叫んで身を起した。此時、東京丸の監督として乗込んで居る武富中尉が入つて來たので談話の花は愈々咲いた。

上ノ三

東京丸の佐世保に着いたのは翌日の朝であつた。我國全艦隊の大部分は此軍港に集合して此處を艦隊根據地として居たのである。「三笠」、「初瀬」以下一萬噸以上の六隻の戦艦を初として「常磐」、

「八雲」、「出雲」、「磐手」、「淺間」、「吾妻」等の甲装巡洋艦等、堂々として居並んだ様は、實に壯觀だ、これを日清の役と比較し自分は今昔の感に堪へなかつた。

「吉野」は無論「千代田」も満更悪い顔の方ではなかつたのが今では小さくなつて（實際小さいのだから仕方がないとは言へ）海岸に近く停泊して居る。「松島」以下三隻の姉妹艦は曾ては我艦隊の本隊を組織し、我海軍の中堅となつて、戦闘艦の任務に當つたのが、今度は海防艦として他の軍港に分布してある始末。

自分は東京丸の甲板に立って堂々たる此光景を見渡して殆ど見とれて居ると、野田大尉、
「どうだね随分すばらしいだらう。」と得意満面。

「イヤ全く素晴らしいもんだ。實に壯んだ。これで勝てなければ嘘だ。」

「さうも行かんよ。先方にも可なり艦を揃へて居るからね。然し、何にしろ之だけ並んだ處を見ると負けさうには思はれんねえ。」

「海洋島の役も三舍を避けるといふ程の大決戦をやつて貰ひたいものだ。どんなに壯快だらう、え、どんなに痛快だらう！」

「やるかも知れんよ。此方で持重して居ても先方で仕かけるかも知れない。先方の鼻呼吸は随分荒いやうだから。」

「やるべし、やるべし、持重は畏縮を意味する。」

二人で壯に意氣を揚げて大言を吐いてるうちに、船は次第に港内深く進み、程能き處に投錨した。短艇の用意が出来るや、野田大尉と自分は二三の行李を積み直ちに「千代田」をさして送られた。

左舷の舷門から入ると直ぐ上甲板に出る。士官室及艦長室は上甲板の艦尾の方があるので自分は野田大尉に従て先づ艦長室を訪うた。

艦長は大宮大佐。年の頃四十一二、色の黒い、寧ろ小男の、圓い顔、圓い眼、そして土佐音の快活な人物。自分は此前の戦争の時、二三度遇つて知つて居るが、其頃は「嚴島」か「橋立」かの航海長を務めて居たと記憶する。

自分を見るや、

「やア久濶！昨日旗艦で誰か一人新聞記者が我輩の艦へ乗組む事になつたと聞いた實は今日か明日あたり来るだらうと思つて居つたが、君ぢやつたか。君なら二度目だから大丈夫だ、慣れない人ぢやと君も知つて居る通り軍艦の事は一寸様子が解らんから何から何まで世話をせんとならんが、それが女の世話と違つて男世帯ぢやもんで……」と言ふ處へ、ドアを敲く音、コツ／＼。

「お入り」と艦長の鋭い聲。闔が開くや候補生が二歩三歩つか／＼と入つて来て、
「只今郵便物を出します。」

「それでは之を」と艦長は卓上の書翰三通を候補生に渡し「君がチャージかね。」
 「そ、さうです。」

「それでは成るべく早く歸艦するやうに。」

「ハイ」と嚴格に答へて候補生は室を出て去つた。

「けれども君は慣れて居るからそんな心配はいらん。」と艦長は自分に向つて話頭を続け「處て君の部屋ぢやが、さうぢや病室が空て居る、二三日水雷長が臥て居つたが綺麗に掃除が仕てある筈ぢや。兎も角あれを君の部屋とするのぢや仕方ないから、病室が嫌ならハモクに寝なければならんぞ。」

「病室結構です。何處でも構ひません。」

「病室と言うても士官の病室ぢやから普通の部屋と變らん。まア行つて見給へ、清潔なもんぢや。」と艦長は言ひつゝ天井から下つて居るベルを押した。十七八の少年が入つて來た、艦長室のボーイらしい。「士官室のボーイを呼べ」と艦長が命ずるや、間もなく骨格の逞しい水兵がやつて來た。艦長、

「病室は綺麗になつちよるぢやらうな。」

「綺麗に片付いて居ます、砲術長の行李が一つ入つて居るだけで………」

「それは直ぐ砲術長の部屋にもどすが可い。今日から此方が彼部屋に住むことになるのだから他の部屋同様には是から掃除をするのぢや。それから食事は士官室ですするのぢやから其積で席を取る。其

外萬事士官同様にして氣をつける。此事はお前から外の者へも傳へて置くのぢや。」と艦長は更に自分に向ひ、

「それぢや君兎も角部屋を作らへ給へ。」

自分は、艦長の好意を謝し、ボーイの後に從いて艦長室を出た。病室は左舷にあり、士官室の直ぐ前、ケビンの後背、第一分隊長の部屋の右隣に在つて、位置は申分ない。又た室内は寢臺二個を備へ、電燈、洗面の器具、戸棚、抽斗等皆な用意され、蝦茶色の佛蘭西織のカーテンまで中々行届いて居る。ボーイは何にくれと世話を爲て自分の爲には立派な居室を作つて呉れた。

部屋の事を終るや、自分は直ぐ士官室に入ると、最早彼は晝飯時で、士官諸氏は大概集まつて居たから、一々挨拶を爲て直に雑談に移つた。

野田大尉を初め、日清戦争の時士官次室に居た連中も今や既に大概士官室に來て居るのである。そして自分こそ諸氏を悉く知らないが、諸氏は大概新聞記者なる自分の名を知つて居るのである。諸氏は心から自分を歓迎して呉れた。

下ノ一

敵の艦隊は何處に在る?

旗艦へは常に諸方面から種々の報告が來て、敵艦隊の消息は大概解つて居るだらう。然しこのこ

とは艦隊主腦の任務であつて、他の諸艦はたゞ旗艦から出る命令に由つて動くばかり其外のことは何も知らないで可しい。又知るべき義務も権利もないのである。

であるから諸艦共に甚だ呑氣で平時と少しも變らないのである。否、寧ろ平時よりも更に呑氣である、といふものは、戦時ゆる艦内の諸規律は却て幾分か寛にして安らかに、戦員をして氣を養ひ、心を伸べ、齷齪の念より脱して濶達の度胸あらしめんことを計つて居るからである。且つ軍艦内の生活は陸軍の兵營内に於ける生活とは、元來趣を異にして居るのである。

軍艦では軍艦其物が一の世界であり、又家であるので、例へば陸軍士官は自分の家庭から兵營に通ふけれど、海軍士官は艦の中に住んで居て、其住んで居る場處の仕事をすると艦は彼等の家であるのだ。従つて艦の内の生活には家庭的趣味を加へて來るのである。家庭的趣味といへば要之、娛樂分子だ。談話、飲食、遊戯等それ々に樂みを持たし、慰みを持たすのは當然だらう。

其處で自分は此家庭の一員になつたのである。そして戦時に在つて戰略を思はず、たゞイザといふ場合に打つべき大砲を打ち、發射すべき水雷を發射すれば其で事が足ると心得て居るだけの呑氣なる生活に加はつたのである。而も新聞記者として。

朝から寝るまで、對手變れど主かはらず、議論や雑談の主人公は何時でも自分である。艦隊は停泊したまゝ動かない。自分が乗組んでから幾日となく、自分は通信文一つ書くべき事なく唯士官諸氏

と共に面白く日夜を送つて居た。

或晩のこと夜食が済んで入浴、既に湯から出た人は筒袖の和服に着更へて或は椅子に倚り或は窓の下のソファに身を横へて雑談を初め居る。一人、柿崎といふ大尉は當直で食事が後れ、卓に着いて且つ食ひながら談話に口を入れて居る、

自分も湯を終へ、和服に着更へて椅子に靠れて居た。その内に士官室は次第に賑はうて來る、艦長もケビンを出て現はれる。湯あがり一杯と葡萄酒を命じて卓に兩臂を杖き顔を淡赤く染めて陶然として居るのは機關長、デブくんと肥つと身體をソファに埋めてシガーを噛むやうにしてふかして居るのは第一分隊長の關大尉。野田大尉は自分の横に腰かけて相かはらず其頬髯を揉み上げて笑味を含んで居る。士官室で一番年の若い第三分隊長の白井大尉は年に似合ぬ黒白頭を撫でながら口を尖らして滑稽を吐いて居る。黙つて新聞紙の讀残しを拾つて居るのは方面にして朱顔、何時も氣憤しげな様子を爲て居れど其實人柄の好い副長の沖少佐。饒舌にかけては一步も人に譲らず、其蒼白い額に金縁の眼鏡をかけて四邊を見廻しながら口角泡を飛す軍醫長の正岡大軍醫。唯だにこくと笑つてばかり居て容易に口を開かず、「マサカさうでもあるまい」を口癖にして居る出羽主計長。議論好きの、政論好きの、列國の形勢を口にし艦隊の強弱を説き、進んでは外交政策の批評にまで及ばうといふ第二分隊長は當直で艦橋にあり、未だ士官室に現はれないので、一室の光景は自慢話

か失策談か友人の身の上話か、美味い物の噂位で笑聲を聞くばかり、咄々として人に迫る雄辯壯語の、やゝ荒々しい模様は少しもなかつた。

「オイ此處に面白い事が出て居る、ハツハツハツ、、、」と先づ自分で笑つて突然口を入れたのは副長、新聞紙を手にして「亭主の名は貞次郎、噂の名はおまき、それで噂の力が馬鹿に強くつて始終亭主は殴られ通し、おまきに時々ファン縛られ戸棚にブチ込まれるのは。え、それで亭主は、逃げ廻つて友達の家隠れると直ぐ又噂がやつて来て引招つて歸るといふのは。」

「ハツハツ、、、、歴制な噂もあつたものだ。そんな噂は亭主が女でも作らへやうもんなら姦通見つけたといつて重ねて四ツつに爲るぜ。」と艦長が合槌を打つ。

「マサカさうでもあるまい。」と出羽主計長が例の辯を出す。

「主計長にでもそんな噂があつて見ろ、今時分は四十八切位に斬りさいなまれて居るだらう。」と白井大尉は直ぐ翻弄にかゝつた。けれども人の好い主計長は今一度「マサカそんなことは」と言つたので此面白さうな題目、折角副長が提出した話頭も其れぎり立消えて了つた。

其處で話は前に立返り、日清戦役の懷舊談となつた。然し、あの當時は諸氏多くは少尉であつたので餘り大した手柄話も持つて居ない。多くは下働きとして苦しかつた不平や愚痴であつた。

「先づ一番面白い事を爲たのが新聞記者サ、ねえ内田君、如何だね」と鋒先を自分の方へ向けたのが

正岡軍醫長。

自分は「さうです」とも言へないから、矢張不平のお仲間入をして、

「必ずしも左様でない。これ諸君の目から見れば、随分氣樂に見えたらうが、本人には可なり苦しいことがあつた。第一大荒の日など一日飯を食はないで部屋隅の方に蒼くなつて引込で居ると、意地の悪い先生がボーイを使者によこしてお汁粉を作らしたから一杯食ひに來いと言ふ。最早澤山だと謝絶れば折角だから一杯とボーイに持して寄す、全く彼には閉口したね。」

「ハツハツハツ。けれども概して君達の方が我々から見ると樂だぞ、我輩共は相撲をとる方、君達の方は見物人ぢやからな」と艦長は言つて「ボーイ、乃公のウイスキーを持つて來い！」

「イヤ通信といふ大仕事を持つて居ます。威海衛の砲臺攻撃の時でも彼日の暮方に百尺崖の下に歸つて投錨すると、諸君は湯に入る、酒を呑む、氣焔を吐く其傍で僕は仕事を初めたのです。一日甲板や艦橋の上に立つて、砲煙を潜るやら、彈丸が頭の上を掠めて荒膽を挫かれるやら、身體は綿のやうに勞れて居て、サア其からが僕の仕事。湯に入らず、酒も呑ず、一呼吸も休まず明け方の四時まで筆を走らす苦しき。終には僕卒倒しかけたほどです。ストーヴの火は消える、硯の水は氷る。足の先は痛い程冷えて來る、頭は火のやうに燃える。とても諸君の解すべからざる苦みです………」

艦長の差した杯を受けてウイスキーを一口、更に言葉をつがうとすると例の主計長、

「マサカさうでも……………」

話頭は轉じて女の噂になつた時、自分は士官室を出てブーブデッキに登つて見ると、外は春の臘月、大空も海も穩かに霞んで夢の如く、居並ぶ艦は數十艘なれど燈火一點の洩るゝなく港内寂々として無人の境かと思ふ許り、流石は戦時の光景を示し、沈黙の中に殺氣を含み春月の下に秋氣を横へ、壯士慘として驕らざるの概あり、自分は暫時これに對して端なくも來るべき大決戦を想像した。

下ノ二

其翌日であつた。午後六時ごろ艦長は旗艦から歸つて來るや直に令して總員を甲板に集め、

「全艦隊今夜二時に出港する。事に依ると明日午前中に敵艦隊に出會ふ。其處で今、一言して置く。各々持場を守つて戦う。平氣で戦う。別に今更注意すべきことはない。平常の技倆を明日こそ示して貰ひたい、分散！」

頗る簡單。これを艦長は靜かに手輕に言渡した。其處で直ぐ士官諸氏はケビンに招かれるだらうと自分は思つたに反して別にそんな様子もない。たゞ上陸を堅く禁じた事とそれとなく今夜は宴樂勝手たるべしとの意を水兵等に示したことゝの外、平時と少しも變らないのである。

自分はホールの方へ行つて見ると、水兵の意氣當るべからざる勢。彼等は互に勝手な氣焔を吐いて居る。酒は量が定であるから亂醉することは出來ない。中には兩腕を振廻して武者振ひを爲て居る

者もある。士官室に最も遠ざかつた船首水雷室の間近な一區劃では六七人の老水兵が集まつて今更

のやうに黄海激戦の當時を語り合つて我勝に手柄話を爲て居る。自分を見て一人が、
「如何でせう。明日は確に敵に出遇ふのでせうか。」

「艦長が彼あいはれるのだから何か確なことがあるだらう。」と自分が答へるや、他の一人、
「さうだ。それでなければ總員に向つてあんなことを言ひ渡す譯がない必度旗艦へ確な筋から

急報があつて、敵艦隊は何時頃出港し何の方角に向つて進航した位のことか解つたに違あるまい。ねえ貴下。」

成程此の推測は當らずと雖も遠からざるものと思つた。又實際其筋では随分確な急報を得るの途があるのを自分も薄々知つて居たのである。

「まあそんな事でせう。何しろ明日こそ樂みだ。何卒先年に劣らない大勝利を得たいものですなア。宜しく願ひますぜ。」と自分の言ふや、一人やゝ酒の廻つたのが、

「大丈夫です。大丈夫です。要之彈丸を餘計中てた方が勝てせう。それならばお來なさいだ、この狙は外れツこなしだからなア」と身構へをする。此先生、砲員に違ひない、傍から又一人が、
「けれども十二珊ちやア情けないなア」と口惜さうなことをいふのを聞いて身構の水兵、

「なアに、敵だつて甲鐵艦ばかりぢやアない、十二珊で土手腹に穴の開きさうな艦は幾多もあらう」

と大氣焔。

「敵の方でも此方の土手腹に風穴を開ける」と一人が笑つて首を縮める。

「風穴なら可いが水穴だ」と一人が相槌を打つ。

「其時は潔く水底の藻草となるばかりだ。」と身構の男、慨然として腕を扼する。

「イヤ乃公は藻草だけ御免を被りたい。」と先程より黙つて伏目になつて酒を嘗るやうに吞て居た水兵が眞面目で言つたので、自分は思はず噴出し、其處を去つた。

それから士官次室に行つて見ると、狭い一室に押並んで、航海士や分隊長、小主計や小軍醫、年齢は二十四五を頭として二十一二の候補生に至るまで八九人、年少氣鋭の本色を發揮して居る最中であつた。

自分を見るや山尾といふ少尉、未來のアドミラルを以て自稱して居る航海士はいきなり、

「来た、来た、内田君が来た！ 今君を待つて居た處だ。まア一ツ」と杯を差した。

「大に意氣を上げてるぢやアないか」と自分は人々の間に割つて入り「辭世の一首も出來たかね」

「今時の軍人に辭世など捻くつて戦に出る悠長な奴はないよ。彈りながら我輩の頭上には常に天佑が宿つて居るからなッ」と第二分隊長、其赤い顔をヌツと前へ突出す、口の悪い小軍士、

「天狗が舞うてるぢやないか。」

「だから飛んで來た彈丸を天狗が拂つて呉れるといふ寸法かね」と自分が口を添へる。

「馬鹿を言ひ給へ。僕の身體が弾き返すのだ。」と第二分隊長躍起となる。

「それぢやア矢張り死にたくないのだ。」と甲板士官の江木少尉冷かに言ふ。

「糞！ たゞ死ぬものか！」と第二分隊長、憤然として怒鳴る。

「それぢやア如何する？」と言はれてムツと行塞り暫時怒の兩の眼を剝いて居たが、力任せに卓を打ち、

「チエツストー！ 昔の「フリゲート」時代のやうに艦と艦と衝觸んかな。僕最先に飛込んで敵のアドミラルと組打をやるんだが。」

「オイ、静に仕て呉れ、酒がこぼれる」と航海士は手を振りながら「貴様は駄目だ、敵は大男の北方の熊ぢやアないか。組打なら直ぐ負ける。」

「馬鹿を言へ、乃公は灸所を知つて居る！」と妙な手つきを仕たんで、航海士、ぬからず、

「擧丸を掴むかね」と言つたので一度にどつと噴飯して了つた。此時ボーイの一人が部屋の外から、

「内田様！ 水雷長が貴下を呼んで居ます。」

其處で自分は士官次室を出て士官室に歸つて見ると、此處もなかく盛んである。水雷長野田大尉は卓の一隅に倚つて酒を用意して自分を待つて居た。

「如何だらう、首尾よく敵に出遇ふだらうか」と自分は矢張もどかしく思つて聞くと、野田は笑ひながら、

「まア出遇ふ筈になることゝ信ずるサ。出遇つたら百年目、出遇はなかつたら其れまで。」

「出遇ひたいもんだなア」

「さうサ、其時は君と酒を飲むのが今夜ぎりとなるかも知れない。だから先づ祝杯を舉げて置くんだ。」

「さうだ！ 何方が死んでも名譽の死だ。祝杯大賛成！」

二人は差向ひで飲み且つ語つて居ると、艦長が入つて来て自分を見るや、

「君今夜は十分眠て置き給へ。所謂の通信といふ大仕事を持つて居るのだから。」と笑ひ乍ら言つた。

至極尤な注意ゆゑ、自分も可い加減にして、自分の部屋に歸り、寢臺に上つたが、明日のことを豫想して種々な空想を描き暫時は眠り得なかつた。

下ノ三

揺り動かされて眼を覺すと傍にボーイが立つて居た。自分は驚いて跳ね起き、

「如何したんだ。敵艦が見えたのかね。」と眼をこすりながら言へばボーイは笑つて、

「艦長がお呼びになります。」と言ひ捨てゝ去つて了つた。顔を洗ふのも、衣服を改めるのも手早く

匆々

にして部屋を飛び出し、甲板に出て見ると、艦長を初め三四人の士官が艦橋に集つて天の一方を眺めながら何事か話して居る様子に、サテこそと自分は大きく急ぎで艦橋に登ると、艦長は莞爾かに、

「如何だね、寢足りたかね。」

「寢過しました。如何です敵艦は。」

「此の見當を見給へ」と兩眼鏡を渡したので受取つて遠く水平線を望めば、幾條なの煤煙、天末を糸の如く引いて居るのである。

「敵艦でせうか。」

「さうらしいね。君まア朝飯でも食て來給へ、未だ餘程時間がある。」

其處で自分は士官室に歸つて見ると、諸氏は靜かに朝飯を食て居る處であつた。けれども様子が平常と別に變らない。現に關大尉の如きは皿の中の乾物を箸でつまきながら、ボーイに向つて、

「オイ、こんな乾物が食へるか。かち／＼して板のやうだ。明日の朝から乃公には鮭を焼いて呉れ。」

と小言を言つて居た位。自分も唯だ「お早う！」と言つたきり直ぐ食事に取にかゝつた。

空腹は何よりの禁物と自分はずめ込める丈けつめ込み終つて甲板に出た。

我は一艦隊五艘、全六艦隊、三十艘、外に驅逐艇隊及び水雷艇隊、堂々海を壓して針路を海洋島

朝日は麗かに輝やき、風なきて春の海穩かに霞み、無心の鷗は其白き翼を搏つて彼方此方を翔け廻つて居る。

自分は艦橋に立ち艦長の傍に在つて見物することにした。といふものは艦長の傍をさへ離れず居れば總ての號令が解るのみならず、敵艦の運動に就いても質問することが出来るからである。

煤煙の次第に近づくにつれて船體が明かに水平線上に現はれて來た。正しく敵の艦隊！精銳二十艘を並べて進んで來る。

彼方にも我艦隊を認めたとに相違ない。而も此方に向つて進航して來るのは大決戦の覺悟と見えたり。

國家安危の決する處！此海戦にして首尾よく勝たんか、其餘は知るべきのみ。斯う思へば今更ら鼓動の昂まるのも無理ではあるまい。

我も進む、彼も來る。距離は次第に近まつて來た。勢は愈々迫つて來た！
見よ！我旗艦の檣頭に戦闘旗が上つた！

一大混戦！！

何れが敵、何れが味方？ 砲煙天を焦し、砲聲海を齧へす。互の陣形すら殆ど亂れ終つた！最新

式の軍艦、最新式の砲、最大速力、而して實に新時代の最大海戦！

嗚呼世にもこれより更に壯絶、慘絶の光景があらうか。自分はたゞ茫然として、眺めて居た。

何れが勝ち、何れが敗亡る？ 唯が天知るのみ。たゞ見る、黒煙の兀として高く天を衝くのは或艦の燃えるのである。砲煙の間よりすかし見れば敵艦の一と覺しきが半ば沈みながら猶ほ砲撃を續けて居る。彼は不幸にして水雷艇を率ゐて居なかつたに引換へ、我は幸にして水雷艇隊を連れて居る、この大混戦を得たり賢しと水雷艇は縦横に馳せ煙に隠れ艦に隠れ、彼方に現はれ、此方に没し、白晝攻撃を行つて散々に敵を惱して居るらしい。

「千代田」は前艦の艦尾を見て進むのみ、後艦の續くや否やを思ふ暇はない。右舷砲と艦首艦尾の二門、總計六門を以て敵と思ふ艦に打ちかけ、呼吸もつがざる有様何人も一語を發しない。たゞ艦長の叱咤、分隊長の號令を聞くのみ。

どすんと徒ならぬ衝動があつたと思ふと「千代田」は中央下甲板のあたりに一丸を喰つたのである。忽ち傳令使の一人飛んで來たり、

「艦長！ 副長が負傷されました。」

「ヨシ！」と艦長はたゞ一言。其言の終るか終らぬに又もや一丸、三番砲のシールドに中つて破裂し、砲員數名バタ／＼と倒れた。負傷者は、士官室、其他下甲板の一部を治療所に充て、其處に猶

豫なく運び込まれるのである。

百雷轟き、千電閃めく。實に白日光を失ひ、朦々として此世の様とは思はれず。

「どうだ、激戦ぢやアなア。」と艦長遂に自分を顧みて一語を洩した。

「負けは仕ますまい！」

「解らない！」

急ち巨丸あり。艦首を斜にかけて飛び來たり、轟然として破裂したと思ふと、艦首の砲員の倒るるが早いか、破片の一個飛んで艦長の右の腕を拗り去つた。倒れさま艦長は、

「水雷長を呼べ！」と叫び、傳令使は走り去る、艦長は士官室に運び去られる、此瞬間、これ現、これ夢、自分は殆ど自失したやうに衝立つて居た。

間もなく水雷長野田大尉が艦橋に馳せ上つた。彼は艦長副長共に倒るや前任士官のゆゑに、今や一艦の首脳となつたのである。

一丸又飛んで自分の横を掠めた刹那、自分は吹き飛ばされて、アナヤと思ふ間もなく甲板の上に墜落し、其儘氣絶して了つた。

自分は病室に横はつて居た。病室則ち自分の部屋に。砲聲は既に止んで居る。電氣燈が點て居る。

船は進航して居る。

自分の横の寢臺に横はつて頭部に繃帯して居るのは野田大尉であつた。

戦は大勝利！ 敵艦の沈没し焼滅したのは九艘、白旗をかゝげて捕獲されたのは三艘。其他と雖も廢艦同様になつて僅に逃げたのであつた。

我艦隊の沈没せしは二艘のみ。たゞし各艦とも多少の破損を受けざるはなく艦員の半、死傷したのを見ても如何に此海戦の猛烈であつたかゞ想像されるだらう。

戀を戀する人

秋の初の空は一片の雲もなく晴れて、佳い景色である、青年二人は日光の直射を松の大木の蔭に
よけて、山芝の上に寝轉んで、一人は遠く相模灘を眺め、一人は讀書して居る。場所は伊豆と相模の
國境にある某温泉である。

溪流の音が遠く聞ゆるけれど、二人の耳には入らない、甲の心は書中に奪はれ、乙は何事か深く
思考に沈んで居る。

暫時すると、甲は書籍を草の上に投げ出して、伸をして、大欠をして、

「最早宿へ歸らうか。」

「うん」と應へたぎり。乙は見向きもしない。すると甲は巻煙草を出して、

「オイ君、燐寸を貸せ。」

「うん」と出してやる、そして自分も煙草を出して、甲乙共、のどかに喫煙ひだした。

「君は如何思ふ、縁とは何ぞやと言はれたら？」

と思考に沈んで居た乙が靜かに問うた。

「左様サね、僕は忘れて了つた。……何とか言つたツケ。」と甲は書籍を拾ひ上げて、何氣なく答へ
る。乙は其を横目で見て、

「まさか水力電氣論の中には説明してあるまゝよ。」

「無いとも限らん。」

「あるなら、其内搜して置いて呉れ給へ。」

「よろしい。」

甲乙は無言で煙草を喫つて居る。甲は書籍を拈操つて故意と何か搜して居る風を見せて居たが、
「有つたよ。」

「ふん。」

「眞實に有つたよ。」

「教へて呉れ給へ。」

「實はやツと思ひ出したのだ。圓とは……何だツたけナ……圓とは無限に多數なる正多角形とか何
とか言ツたツケ。」と、眞面目である。

「馬鹿！」

「何んで？」

「大馬鹿？」

「君よりは少しばかり多智な積りで居たが。」

「僕の聞いたのは其圓ぢやアないんだ。縁だ。」

「だから圓だらう。」

「イヤこれは僕が悪かつた、君に向つて發すべき問ではなかつたかも知れない。マア靜に聞き給へ、僕の問ふたのは……………」

「最も活動する自然力を支配する人間は最も冷靜だから安心し給へ。」

「豪いよ。」

「勿論！そこで君の謂ふ所のエンとは？」

「歸らうぢやアないか。歸宿つて夕飯の時、ゆる／＼論ずる事にしよう。」

「サア歸らう！」と甲は水力電氣論を懷中に押込んだ。

かくて仲善き甲乙の青年は、名ばかり公園の丘を下りて温泉宿へ歸る。日は西に傾むいて、溪の東の山々は目映ゆきばかり輝いて居る。まだ炎熱いので甲乙は閉口しながら溪流に沿うた道を上流の方へのぼると、右側の函根細工を賣る店先に一人の男が往來を脊にして腰をかけ、品物を手にし

て店の女主人と談話して居るのを見た。見て行き過ぎると、甲が、
「今あの店に居たのは大友君ぢやアなかつたか？」

「僕も、そんな気がした。」

「後姿が似て居た、確に大友だ。」

「大友なら宿は大東館だ。」

「何故？」

「僕が大東館を選んだのは大友君からはなしを聞いたのだから。」

「それは面白い。」

「きつと面白い。」

と話しながら石の門を入ると、庭樹の間から見える縁先に十四五の少女が立つて居て、甲乙の姿を見るや、

「神崎様！朝田様！一寸來て御覽なさいよ。面白い物がありますから。早く來て御覽なさいよ！」と呼ぶ。

「又た蛇が蛙を呑むのぢやアありませんか。」と「水力電氣論」を懷にして神崎乙彦が笑ひながら庭樹を右に左に避けて縁先の方へ廻る。少女の室の隣室が二人の室なのである。朝田は玄關口へ廻る。

「ほら妙なものでせう。」と少女の指さす方を見ても別に何も見當らない。神崎はきよろきよろしながら、

「春子さん、何物も無いぢアありませんか。」

「ほら其處に妙な物が。……貴様お眼が悪いのねエ」

「何物です。」

「百日紅の根に丸い石があるでせう。」

「彼れが如何したのです。」

「妙でせう。」

「何故でせう。」といひながら新工學士神崎は石を拾つて不思議さうに眺める。朝田は此時既に座敷から廻つて縁先に來た。

「オイ朝田、春子さんが此石を妙だらうと言ふが君は何と思ふ。」

「頗る妙と思ふねエ」

「ね朝田様、妙でせう。」と少女はにこ〜。

「さうですとも、大に妙です。神崎工學士、君は酔拂らつて春子様をつかまへてお得意の講義をして居たが忘れたか。」

「ねエ朝田様！その時、神崎様が巻煙草の灰を掌にのせて、此灰が貴女には妙と見えませんかと聞くから、私は何でもないといふと、だから貴女は駄目だ、凡そ宇宙の物、森羅萬象、妙ならざるはなく、石も木も此灰とても面白からざるはなし、それを左様思はないのは科學の神に歸依しないのだからだ、とか何とか、難事しい事をべら〜何時までも言ふんですもの。私、眠くなつて了つたわ、だからアーメンと言つたら、貴下怒つちやつたぢやアありませんか。ねエ朝田様。」

「さうですとも、だから其石は頗る妙、大に面白しと言ふんですねエ。」

「神崎様、昨夕の敵打ちよ！」

「たしかに打たれました。けれど春子様、朝田は何時も靜肅で酒も何にも呑まないで、少しも理窟を申しませんからお互に幸福ですよ。」

「否、お二人とも随分理窟ばかり言ふわ。毎晩々々、酔ては討論會を初めますわ！」

甲乙は噴飯して、申し合したやうに浴衣に着かへて浴場に逃げだして了つた。

少女は神崎の捨てた石を拾つて、百日紅の樹に倚りかゝつて、西の山の端に沈む夕日を眺めながら小聲で唱歌をうたつて居る。

又、少女の室では父と思しき品格よき四十二三の紳士が、此宿の若主人を相手に圍碁に夢中で、石事件の騒などは一切知らないでパチ〜やつて御座る。そして神崎、朝田の二人が浴室へ行くと

間もなく十八九の愛嬌のある娘が圍碁の室に来て、

「家兄さん、小田原の姉様が参りました。」と淑かに通ずる。これを聞いて若主人は顔を上げて、やや不安の色で、

「よろしい、今ゆく。」

「急用なら中止させよう」と紳士は一寸手を休める。

「何に關ひません、急用といふ程の事ぢやアないんです。」と若主人は直ぐ盤を見つめて、石を下しつゝ、

「今の妹の姉にお正といふのが居たのを御存じでせう。」

「さうでした、覚えて居ます。可愛らしい佳い娘さんでした。」と紳士も打ちながら答へる。

「そのお正が此春國府津へ嫁いたのです。」

「それはお目出度い。」

「ところが餘りお目出度くないんでしてな。」

「それは又？」

「どういふものか折合が善くありませんて。」

「それは善くない。」

「それで今日來たのも、又何か持上つたのでせう。」

「それでは早く行く方が可い。……」

「なに、どうせ二晩三晩は宿泊のですから急がないでも可いのです。」と平氣で盤に向つて居るので紳士も其氣になり何時しかお正の問題は忘れて了つて居る。

浴室では神崎、朝田の二人が、今夜の討論會は大友が加はるので一倍、春子さんが驚かすだらうと語り合つて楽しんで居た。

二

箱根細工の店では大友が種々の談話の末、漸とお正の事に及んで、

「それぢやア此二月に嫁入したのだね、随分遅い方だね。」

「まあ遅いはうでせうね。貴下は何時ごろお正さんを御存知で御座います？」

「左様サ、お正さんが二十位の時だらう、四年前の事だ、だからお正さんは二十四の春嫁いたといふものだ。」

「全く左様で御座います。」と女主人は言つて、急に聲をひそめて、「處が可憐さうに餘り面白く行かないとか大ぶん紛糾があるよう御座います。お正さんは二十四でも未だ若い盛りで御座いますが、旦那、五十歳とかで、二度目さう御座いますから無理も御座いませんよ。」

大友は心に頗る驚いたが別に顔色も變へず、「それは氣の毒だ」と言ひさま直ぐ立ち上つて、
「大きにお邪魔をした」とばかり、店を出た。

大友の心には此二三年前來、何卒此世に於て今一度、お正さんに會ひたいものだといふ一念が蟠つて居たのである、此女のことを思ふと、悲しい、懐しい情感に堪へ得ないことがある。そして此情感に耽る時は人間の淺間しサから我知らず脱れ出づるやうな心持になる。あたかも野邊にさすらひて秋の月のさやかに照るをしみんと眺め入る心持と或は似通へるか。さりとして矢も楯もたまたらずお正の許に飛んで行くやうな激越の情は起らないのであつた。

たゞ會ひたい。此世で今一度會ひたい、縁あらば、せめて一度此世で會ひたい。とのみ大友は思ひつけて居た。何ぞ其心根の哀しきや。會ひ度くば幾度にも逢へる。又逢へる筈の情縁あらば如斯な哀しい情緒は起らぬものである。別れたる、離れたる親子、兄弟、夫婦、朋友、戀人の仲間の、逢ひたき情とは全然で異つて居る、「縁あらば此世で今一度會ひたい」との願の深い哀みは常に大友の心に潜んで居たのである。

或夜大友は二三の友と會食して酒のやゝ廻つた時、斯ういふ事を言つたことがある「僕の知つて居る女でお正さんといふのががあるが、容貌は十人並で、たゞ愛嬌のある女といふに過ぎないけれど、如何にも柔和な、どちらかと言へば今少しはハキ／＼してもと思はるゝ程の性分は何處までも正直な

同情の深さうな娘である。肉づきまでがふつくりして、温かさうに思はれたが、若し、僕に女房を世話して呉れる者があるなら彼様のが欲しいものだ」

それならば大友はお正さんに戀ひ焦がれて居たかといふと、全然、左様でない。たゞ大友が其時、一寸と左様思つた丈けである。

四年前、やはり秋の初であつた。大友が此温泉場に來て大東館に宿つたのは。

避暑の客が大方歸つたので居残の者は我儘方題、女中の手もすいたので或夕、大友は宿の娘のお正を占領して飲んで居たが、初は戯談のほれたはれた問題が、次第に本物になつて、大友は遂に其時から三年前の失戀談をはじめた。女中なら「御馳走様」位でお止になるところが、お正は本氣で聞いて居る、大友は無論眞剣に話して居る。

「それほどまでに二人が艱難辛苦してヤツと結婚して、一緒になつたかと思ふと間もなく、ポカンと僕を捨て、逃げ出して了つたのです。」

「まア痛いこと！それでは貴下は如何なさいました。」とお正の眼は最早潤んで居る。

「女に捨てられる男は意氣地なしたとの、今では、人の噂も理會りませんが、其時の僕は左まで世にすれて居なかつたのです。たゞ夢中です、身も世もあらぬ悲嘆さを堪へ忍びながら如何にもして前の通りに爲たいと、恥も外聞もかまはず、出来るだけのことをしたものです。」

「それで駄目なんでしょうか。」

「無論です。」

「まア、」とお正は眼に涙は一ばい含ませて居る。

「私が夢中になるだけ、先方は益々冷えて了う。終ひには僕を見るもイヤだといふ風になつたのです。」そして大友は種々と詳細い談話をして、自分が如何ほど其女から侮辱せられたかを語つた。そして彼自身も今更想ひ起して感慨に堪へぬ様であつた。

「さぞ憎らしかつたでしょうねエ。」

「否、憎らしいと其時思ふことが出来るなら左まで苦しくは無いのです。たゞ悲嘆かつたのです。」

お正の兩頬には何時しか涙が靜かに流れて居る。

「今は如何なにして居てゝす」とお正は聲をふるはして聞いた。

「今ですか、今でも憎いとは思つて居ません。けれどもね、お正さん僕が若し彼様な不幸に會はなかつたら、今の僕では無かつたらうと思ふと、残念で堪らないのです。今日が日まで三年ばかりで大事の月日が、殆ど煙のやうに過つて了ひました。僕の心は壊れて了つたのですからねエ」と大友は眼を屢瞬たいた。お正ははんけちを眼にあて、頭を垂れて了つた。

「まア可いサ、酒でも飲みませう」と大友は酌を促がして、黙つて飲んで居ると、隣室に居る川村と

いふ富豪の子息が、酔つた勢で、散歩に出かけやうと誘ふので、大友はお正を連れ、川村は女中三人ばかりを引率して宿を出た。川村の組は勝手なふざけ散らして先へ行く、大友とお正は相並んで靜かに歩む、夜は冷々として既に膚寒く覺ゆる程の季節ゆゑ、溪流に沿ふ町はひっそりとして客らしき者の影さへ見えて、月は冴えに冴えて岩に激する流は雪のやうである。

大友とお正は何時しか寄添うて歩みながらも言葉一ツ交さないで居たが、川村の連中が遠く離れて森の彼方で聲がする頃になると、

「眞實に貴下はお可哀さうですねエ」と、突然お正は頭を垂れたまゝ言つた。

「お正さん、お正さん！」

「ハイ」とお正は顔を上げた。双眼涙を含める蒼ざめた顔を月はまともに照らす。

「僕はね、若し彼女がお正さんのやうに柔相い人であつたら、こんな不幸な男にはならなかつたと思ひます。」

「そんな事は、」とお正はうつむいた、そして二人は人家から離れた、礫の多い凸凹道を、靜かに歩んで居る。

「否、僕は眞實に左様思ひます、何故彼女がお正さんと同じ人で無かつたかと思ひます。」

お正は、そつと大友の顔を見上げた。大友は月影に霞む流の末を見つめて居た。

それから二人は暫時無言で歩いて居ると先へ行つた川村の連中が、がや／＼と騒ぎながら歸つて来たので、一緒に連れ立つて宿に歸つた。其後三四日大友は滯留して居たけれど、お正には最早、彼の事に就いては一言も言はず、お給仕毎に楽しく四方山の話を爲して、大友は歸京したのである。爾來、四年、大友の戀の傷は癒え、戀人の姿は彼の心から消え去せて了つたけれども、お正には如何かして今一度、縁あらば會ひたいものだと思つて居たのである。

そして來て見ると、兼て期したる事とは言へ、さてお正は既に居ないので、大に失望した上に、お正の身の上の不幸を箱根細工の店で聞かされたので、不快に堪へて、流を溯つて溪の奥まで一人て散歩して見たが少しも面白くない、氣は塞ぐ一方であるから、宿に歸つて、少し夕飯には時刻が早い、酒を命じた。

三

大友は、「川があるなら呼ぶから。」と女中をしりぞけて獨酌で種々の事を考へながら淋びしく飲んで居ると宿の娘が「これをお客様が」と差出したのは封紙のない手紙である、大友は不審に思ひ、開き見ると、

前略我等兩人當所に於て君を待つこと久しとは申兼候へ共、本日御投宿と聞いて愉快に堪へず、女中に命じて膳部を弊室に御運搬の上、大に語り度く願候

神 崎
朝 田

大 友 様

とあるので、驚いた。何時ごろから來て居るのだと聞くと、娘は一週間ばかり前からと云ふ直ぐ次の返事を書いて持たしてやつた。

お手紙を見て驚喜仕候、兩君の室は隣室の客を驚す恐あり、小生の室は御覽の如く獨立の離島に候間、徹宵快談するもさまたげず、是非此方へ御出向き下され度待上候
すると二人が、やつて來た。

「君は何處を遍歴つて此處へ來た？」と朝田が座に着くや着かぬに聞く。

「イヤ、何處も遍歴らない、東京から直きに來た。」

「そこで此夏は？」

「東京に居た。」

「何をして？」

「遊んで。」

「そいつは下さらなかつたな。」

「全くサ、そして君等は如何だ。」

「伊豆の温泉めぐりを爲た。」

「面白い事が有つたか。」

「随分有つた。然し同伴者が同伴者だからね。」と神崎の方を向く。神崎はたゞ「フ、ン」と笑つたばかり、盃をあげて、ちよつと中の模様を見て、ぐびり飲んだ。朝田もお構ひなく、

「現に今日も、斯うだ、僕が縁とは何ぞやとの間に何と答へたものだらうと聞くと、先生、この圓と心得て」疊の上に指先で○を書き、

「圓の定義を平氣な顔で誦誦したものだ、君、斯ういふ先生と約一ヶ月半も僕は膳を並べて酒を呑んだのだから堪らない。」

「それはお互サ」と神崎少しも驚かない。

「然し相かはらず議論は激しかつたらう」と大友はにこ／＼して問うた。

「やつたとも」と朝田、

「朝田の愚論は僕も少々聞き飽きた」と神崎の一言に朝田は「フ、ン」と笑つたばかり。これだから二人が喧嘩を爲ないで一ヶ月以上も旅行が出来たのだと大友は思つた。

三人とも愉快に談じ酒も相當に利いて十一時に及ぶと、朝田、神崎は自室に引上げた、大友は頭

を冷す積で外に出た。

月は中天に昇つて居る。恰度前年お正と共に散歩した晩と同じである。然し前年の場所へ行くは却つて思出の種と避けて溪の上へのぼりながら、途々「縁」に就いて朝田が説いた處を考へた、「縁」は實に「哀」であると沁み／＼感じた。

そして構造の大きな農家らしき家の前庭來ると庭先で「左様なら」と挨拶して此方へ來る女がある、其聲が如何にもお正に似て居るやうに思はれ、つい立どまつて居ると、往來へ出て月の光を正面に向けた顔は確かにお正である。

「お正さん」大友は思はず呼んだ。

「大友さんでせう、」と意外にもお正は平氣で傍へ來たので、

「貴女は僕が來て居るのを知つて居たのですか」と驚いて問うた。

「も少し上の方へのぼりながらお話しませうか。」とお正は小聲にて言ふ。

「貴女さへかまはなければ。」

「私はちつとも、かまひませんの。」

それではと前年の如く寄添うて、溪をのぼる。

「眞實に妙な御縁なのですよ、私は今日、身の上に就いて兄に相談があるので、突然に参りますと、妹が小聲で大友さんが來宿するといふのでせう、……………」

「それぢやア貴女は僕より一汽車後で来たのだ。」

「さうなの。それで今夜はごたくして居るから明日お目にかゝる積りで居ましたの。」

さて大友はお正に會つたけれど、そして忘れ得ぬ前年の夜と全然同じな景色に包まれて同じやうに寄添うて歩きながらも、別に言ふべき事がない。却つてお正は種々の事を話しかける。

「貴女いつかの晩も此様でしたね。」

「貴下彼晩のことを憶えて居らっしゃる？」

「覚えて居ますとも。」

「私はね、何にもかも全然覚えて居て、貴下の被仰つた事も皆な覚えて居ますの。」

「僕もさうです。そして今一度貴女に會ひたいとばかり思つて居ました。今度も實は其積りで来たのです。無論何家へ嫁いて居て會へる筈は無からうとは思ひましたが、それでも若しかと思ひましてね……………」

「私も今一度で可いから是非お目にかゝりたいと思ひつゞけては、彼晩の事を思ひ出して何度泣いたか知れませんが……………ほんとにお嫁になど行かないで兄さんや姉さんを手傳つた方が如何なにかかつたか今では眞實に後悔して居ますのよ。」

大友は初めてお正が自分を戀ひして居たのを知つた、そして自分がお正に會ひたいと思ふのと、

お正が自分に會ひたいと願ふのとは意味が違ふと感じた。自分はお正の戀人であるがお正は自分の戀人でない、たゞ自分の戀に深い同情を寄せて泣いて呉れた柔しさを戀ひしたので。そして自分は戀を戀する人に過ぎないと知つた。實に大友はお正の戀を知ると同時に自分のお正に對する情の意味を初めて自覺したのである。

暫時無言で二人は歩いて居たが、大友は斯く感じると、言ひ難き哀情が胸を衝いて来る。

「然しね、お正さん、貴女も一旦嫁いだからには惑はないで一生を送つた方が可しいと僕は思ひます。凡て女の惑ひからいろんな混雜や悲嘆が出て来るものです。現に僕の事でも彼女が惑うたからでせう……………」

お正はうつ向いたまゝ無言。

「それで今夜は運よくお互に會ふことが出来ましたが、最早二度とは會へませんから言ひます、貴女も身體を大切に於て幾久しく無事でお暮しになるやうに……………」

お正は袖を眼に當て、

「何故會へないのでせうか。」

「會へないものと思つた方が可いだらうと思ひます。」

「それでは貴下は最早會ひたいとは思つては下さらないのですか。」

「決して其様そなたことはありません。僕はこれまでも彼女に會あひたいなど夢にも思はなくなりましたが、貴女には會あひたいと思つて居ましたから……」

「それではお目にかゝる事が出来る縁を待ちませうね。」

「ほんとに、さうです。貴女も今言つたやうに、くよくよ爲しないで、身體からだを大切にお暮くしなさい。」

「難有なう御座ごいます。」

夜の更ふたりくるを恐れて二人は後へ返し、溪流たに谷に渡せる小橋の袂たもとまで歸つて來ると橋の向うから男女の連つれが來る。そして橋の中程ですれちがつた。男は三十五六の若紳士、女は庇ひ髮はの二十二三としか見えざる若づくり、大友は一目見て非常に驚いた。

足早あしはやに橋を渡つて、

「お正さんく。彼れです。彼の女です！」

「まア、彼の人ですか！」とお正も吃驚して見送る。

「如何して又、こんな處で會つたらう。彼女も必定きつと僕と氣が着いたに違ひない。お正さん僕は明日

朝出あす發たちますよ。」

「まア如何して？」

「若し彼女が大東館にでも宿泊とまつて居たら、僕と白晝でつく出會はすかも知れない、僕は見るのも嫌です。」

往來で會ふかも知れません、如斯こんな狭い所ですから。」

「會つても知らん顔して居れば可いぢやア御座ごいませんか。」

「不愉快です。殊に今度貴女に會つた場合、猶ほ不快です。」

翌朝早く大友は大東館を立つた。大友ばかりでなく神崎も朝田も一緒である。見送り人の中にはお正も春子さんも居た。

園 遊 會

自分は園遊會が何よりの好物。招待されて謝絶こたわつたことはない。處が今度、淺田老侯の澁谷の別邸で催される園遊會は空前の大仕掛と聞きながら二週間前から風邪かせの心地とこで床に就いて居るため、十の七八までは出席出来ないものと諦あきらめて居たのである。

二三日前から無類の好天氣、例の秋高く馬肥ゆとかいふので當日の盛況も思ひやられながら、自分自分は頗る瘦せが見え、この分では到底出席覺束なしと落膽して障子にうつる華やかな秋の夕日影を床の中で眺め、眼ばかりバチつかして居たのである。

處へ妹の國子が入つて來て

「兄上御氣分は。」

「甚だ快くないね。」と言つて少し考へ「死にたくなつた。」

「マア！兄上は眞實ほんじつに病弱やまひよわいよ、風邪位かせで死んでどうなりますか。」

「だから風邪かせで死ぬとは言はないよ、死にたいといふのだよ。」

「マア！如何して。」と首尾よくと妹を驚かした。

「だつて淺田侯の園遊會に出られさうもないもの、此の分ぢやア。」

「では私だけ出ませう。兄上はお留守居るすゐしていらつしやいな。」と妹も左るもの、眞面目まじめで言つて横よこを向いて編物かみものを爲て居る。

二人とも暫く無言。自分は何とか巧妙ちやうまことを言つて妹をつゝいてやらうと考がへて居ると妹が

「兄上！自分の返事を爲しないのを見て、

「兄上！」

「何で御座います。」

「兄上はそんなに園遊會を嗜好すだいですか。」

「如何どういたしましたして、大嫌おきらひで御座います。」

「だつて園遊會に行かれないから死にたいとおつしやつたぢや有りませんか。」

「最早もつと死ぬことは見合せました。」

「左様で御座いますか、それで私も安心致しました。先刻さうまから心配でくゝなりませんでした。」と言ひさま、つと起つて部屋を出て去つた。引きちがへて女中が運ぶ夕ゆふの牛乳ちゅうにゅう。池の鶯うす鳥が俄に騒ぎ立つて鳴くのは妹が餌えさでも與るのであらう。

其夜は静に眠り、翌日からは気分大に快くなつたので、明後日は押しても出てやらうと腹では決
定しても顔には出さず、間際になつて妹を狼狽かし、舌戦に敗けた敵き打ちと獨り微笑んで居た。
自分に取って淺田侯は舊藩主である。言ふまでもなく侯は中國の大諸侯其財産の幾百萬なるを知
らず、澁谷別邸の如き實に小公園ほどの廣サ、而も其善美の點はとても東京市の公園と稱する不完
全な空地とは比べものにならない。自分一家は常に侯爵邸に出入し老侯は殊の外、自分と妹國子と
を愛して居られるので今度の園遊會には、假令自分が園遊會を好まぬにしても、是非出席しなけれ
ばならなかつたのである。況て自分は園遊會が何より嗜好、場所は淺田侯自慢の澁谷別邸といふ次
第。少しばかりの病を押す位、自分には當然であつた。

愈々今日といふ日の朝、自分は服を着更へて居ると、妹が入つて来て

「オヤ兄上お出かけ？」とや、驚いた風。しめたと自分は眞面目な顔で

「あア一寸と出て来る。」

「だつて未だお顔の色が悪う御座いますよ。」

「出て來たら却つて気分が復るだらう。喜助に仕度しろと言つてお呉れ。」

妹は何處までも自分が園遊會に行くとは思つて居ないらしい。

「どうせお出かけになるなら園遊會にいらつしやいな。」

「イヤ行くまい、餘り人ごみに出ることは可くあるまいから。然しお前は如何しても行かないと悪
いよ。姫様に悪いから。」

「兄上が行つしやらないと面白くないけれど……。」

「だつて二人とも行かなくちゃ老侯にも悪いよ。十時からといふんだから最早仕度したら可らう。」

私のことは病氣と傳へてお呉れ。」

自分は車を飛ばして直ぐと澁谷村へ。

二

時は一時間早かつた老侯は山の吾妻屋と聞いて、山に登つて言ると、二十七貫肥滿の老人老いて益
益健、今しも假山とは言へ老松繁りて眞山を欺く小高い丘の吾妻屋に倚りて、心持よげに庭園の準備
の行届けるを打眺めて居らるゝ處である。傍には二三人、家従とお庭師。

「ヤア廣澤、早い喃、先登第一ぢや。」と自分を見るや、何時も變らぬ寛濶の高聲なり。自分は先づ
招待の禮を述べ、次に今日の好天氣を祝すると、

「天氣は無類ぢや、この案排なら大概な無精者も出て來るだらう。時に國子は如何した、來たか？」
其處で自分は國子を出抜いたことを語り、老侯にも國子が來た時、未だ自分を見ない風に挨拶し
給へといふや、

「ハッハッハッ、これは面白い、一つ國子を口惜らせて泣かしてやらう、この節は急に大人びて乃公が調戲つても中々泣かなくなつたから喃。」

老侯上機嫌。我策成れり、自分は嬉しくつて堪らない。斯なると感心なことには自分平常の心掛空しからず、全然有頂天になつて了ひ、風邪も何處へやら「さうだ」と更に一策を案出して時こそ來れと待ら受けて居た。

十時を打つや、馬車、人車、掛聲勇ましく來るはく。何にしる招待状を出した數が一千枚を越ゆる二百。二百は來ないと見ても千人の客である。貴族、大臣、政事家、實業家、新聞記者、文學者、學者、官吏、軍人の數々、貴婦人令嬢も赤た少からず。一々これを迎へて庭口より直ちに庭園へと通す老侯以下の骨折も尋常ではない。

自分は老侯等の後に隠れて居ると十時を過ぐる三十分頃妹の國子は大めかしにめかしこんで威勢よく乗り込んで來た。老侯は率直に

「兄上は如何した？」と何處までも知らぬ顔に爲て御座る。自分は人々の蔭からそつと妹の様子を覗がつて居るとも知らず、國子は最も懇懇に、

「兄は先日來風邪氣で床に就いて居まして、今日はとうとう參ることが出来ませんで御座います。大變殘念がつて居りました。御前へも宜しくといふことで御座います」とさわやかに述立てたので、

老侯

「イヤ其は殘念、格別のこともなければ可いが」と、飽くまでしらはくれて居らるゝ。

「難有う御座います」と妹はしをらしく挨拶して庭へ廻り四五人の令嬢連に加はつた。

さて是から自分の番だと急いで自分も庭口へ廻り松林の横なるベンチに倚かゝつて二三の知人と世間話を爲ながら、心ひそかに妹の仲間がやつて來るのを待つて居た。

庭園に入る前に人々は接待員からプログラムの綺麗に印刷されたるを貰つて居る。これには庭園の略圖まで加へてあるので初めてこの廣大な庭園に足を入れたものも決してまごつく心配はない。どの林の角へゆけばピーヤホールが有る。どの隅へゆけば蕎麥屋が有る。シヤンパンは何處、果物は何處、鮎は何處、其他所謂る酒池肉林の何れなりとも人々の好むのに従つて受用することの出來るやう、明細に其場處が誌してある。

七八人の令嬢の一組が近づいて來た。思ふに池の畔にゆく積だらう。其中に國子が雜つて居る。

「廣澤君見給へ、揃つて居るね。四邊眩きばかりなりだ。イヤ君の令妹も居るぜ。」と友の一人が眼をむき出して言ふ。自分は空嘯ぶいて控へて居たが、愈々間近く來たので、ベンチから離れ、

「イヤ皆さんお揃ひですな。」と軽く禮して美子といふ十七歳ばかりの令嬢に向ひ

「美子さん、兄上も見えましたか。」

「参りました。今其處等に居ましたよ。貴所何時お來になりました。」
 「最早先刻來ました。さうですな九時時分でした。」
 「オヤ、だつて今國子さんが貴所はお風邪氣で今日はおいでにならないと被仰いましたよ。」
 と言つて、不思議さうに自分と妹の顔を見比べた。自分は此處ぞと
 「さうですか、それは妹が未だ寢ぼけて居るのでせう。能く顔を見てやつて下さい。」と言つて更に
 妹に向ひ

「國さん、顔も洗はないで白粉をつけちゃア困りますね。」

「オヤさう、私の顔に白粉がついて居て？」と靜かに言つて反對に自分の顔をのぞき「兄上未だ大變お顔の色が悪う御座いますよ、無理を爲さらないで早く歸つてお休みになつたが可う御座いますらう。」

「眞實にさうで御座いますね、お大事になさいまし」と今度は雪子嬢が大眞面目で口を入れたので亦もや大敗北。

「難有ら御座ります」と情ない聲を出してベンチに腰を下すや、花の雲は靜かに動きだして谷に下りてしまつた。

自分は口惜くて堪らんけれど如何とも爲かたがない。左右から友が

「如何したのだ、妙な光景だぜ、君、如何したのだ。」と問ひかけた。

「ナニ如何も爲ないよ。」と自分は平氣で「どうだ、シャンパンでもやらうか。」

自分は先に立つて向うの天幕を指して歩いた。天幕の上には燃るばかりの楓が杖を翳して居る。二十名ばかりの紳士が其前に群がつて居る。

三

さしにも廣い庭が十二時頃になると何方を向いて見ても一團又一團の人。酒氣の加はるに連れて歡笑の聲が處々で高まつて來た。樂隊の奏するマーチは忽ち絶え忽ち起り。煙火は時々思ひ出したやうにボン／＼揚る。

餘興が初まるや舞臺の前の大天幕の下には見る間に人山を築かれたが、しかし是れは來賓の半數にも足りないので殊に婦人のお慰みに過ぎず。酒を呑んで氣焔を吐く年若の連中や斯ういふ場所に於ても尤もらしい顔付をして實務を談じなければ氣が濟まぬといふ老紳士どもは相變らず組を作つて談笑して居る。

自分は病後だけに稍々疲勞を覺えたので仲間から外れて木蔭に休んで居ると、戸塚といふ新聞記者が其ひよろりとした身體を妙に振りながら前を通つて行く、自分は度々この男には出遇つたことがあるので

「戸塚君、戸塚君。」と呼び止めた。

「ヤア廣澤君か、如何しました。少し凹んだといふ形ですな。」

「さうだ少々凹んでるのだ。まア此處へ来てお話しなさい。」

戸塚は其五尺七寸五分なる長い身體を芝生の上にごろり。

「イヤ實は僕も少々ばかりシャンパンに足を取られた形です。」

「君のやうな大兵の癖に食堂も開かない中から左う凹んぢやア困るね。」

「園遊會へ來ると僕は何時でも是れ。眞實の御馳走は食はないで歸るのです。」

「其代り鮭は食ふこと五十二。」

「ハツハツ、、、まさか。」

「時に面白い種が有りましたか。」

「斯ういふ場所は種が有りさうで無いものですよ、つまり畑を見て置くに過ぎませんな。畑とは種の有りさうな人を見て置くだけです。」

「これは驚いた。さうすると君は其畑なるものを見立て、置かうといふのですね。」

「さうです。」

「さうすると君等の方の畑にもやはり肥えたのと痩せたのと自から分れて居るのですか。」

「さうですとも。無論です。」

「僕なんぞ痩せて居て始末にならんでせう。」

「ところが大違ひです。君は餘り肥え過ぎてます。肥え過ぎて居るのも困りますな。葉ばかり大きくて收穫は却つて少ないから。」

「これは驚いた、何故僕は肥え過ぎて居たらう、こんなに痩せて居るのに。」

腕をまくつて見せた、戸塚は見向きも爲ないで、

「君のやうな方は色々のことを喋舌ります。さも仔細らしく議論まで爲て僕等に聞かします。そして結極餘り種になりさうなことを言はないのです。煽れば煽動に乗るやうな顔をして見せるし、此方が十言いへば二十言で返すし、議論を吹きかければ議論で答へるし、嘲れば嘲り返すし、酒を飲めば借に愉快に飲むし、新聞記者の對手として申分はないのです。けれども遂に僕等を空手で返すのは君のやうな人なのです。」と述立て、微笑を洩らした。

「さうすると僕のやうなのは頗る質が悪いのだね。君等の鼻つまみだね。」

「決してさうで無い。君の如きは最も愉快なんで、收穫の有無に拘らず、吾等の敬愛する處です。」

「いや之は難有い、さう褒められては黙つて居られない。彼の店へ行つて君の爲めに一杯健康を祝しませう。」

「大賛成！」と戸塚は起上つた。二人は二歩三歩行くと、一人の軍人、年齢は四十前後大佐の禮服を着たのが、眞赤な顔をして昂然とやつて來るのに遇つた。

「大將！ではない大佐。如何です、お顔の色が大分可いやうですな。」と戸塚は少し嘲ける氣味で呼びかけた。すると軍人、嚴格な顔を速製して戸塚の顔を見たが默禮して行き過ぎて了つた。

「何人だね、餘り見かけない軍人だが。」と自分は訊ねた。

「森川虎五郎と云ふ先生です。僕も二度ばかり遇つただけです。」

「どうです、あゝ言ふ畑は肥えて居さうだね。」

「なか／＼以て。」

「瘦地かね？」

「決して／＼。」

「僕等の仲間だらうか。」

「如何して。あれは巖です。」

「ハツハツ、、、齒も立たない代物かね。」

「さうですな。例へて言へば海中の孤巖ですな。僕等は鳥です。翼を休めるために棲ることもありません。そして其頭に糞を爲てやるから、まんざら捨てたもんでもない。」

「さうすると君は信天翁だ。」

「馬鹿言つちや不可ない。ハツハツ、、、信天翁は面白い！可愛がり給へ、罪のない鳥だ！」

二人は天幕に入つて葡萄酒の杯をあげ、自分は心から戸塚の健康を祝して、さて傍を見ると、木蔭の圓卓を圍んで七八人の洋服紳士、中には田舎出と見ゆるも雜つて頻りと放言大笑して居る。今しも小太川といふハイカラ紳士が古めかしい倫敦通を振り廻して居る眞最中らしい。雜返して居るもの、謹聽して居る者、一人は居眠つて居る。

「先づ日曜には公園にゆくのですな。月曜には町を見物する。火曜日にはウエストミンスターアツペイとかセントポール寺とかを見物するのです。それから水曜日にはナショナルギャラリー——。」

「ギャラリーとは。」と一人の男が眞面目で聞く。

「畫堂です。たいした者が有りますぜ、二十二室に分つて美術の粹をあつめてあります。有名なるターナーは最後の一室を獨占して居ますが、ターナーの風景畫を見ると日本の畫など全然見られませんな。室の左方の壁には一見、莊重沈鬱の畫が並んでいます。これはターナー初期の畫で一口に言ふと自然の外形を描いたものです。右方の壁は光り煌やいた畫ばかり、これはターナー後年の作で所謂空氣を畫いたものです。」とのべつに饒舌る鼻先を

「僕だつて空氣なら畫けら」と一人の男が雜返を入れる。

「さうサ白紙にガラス板を張つて畫縁を着ければ空氣の畫だ。」と一人が合槌を打つ。小太川躍起になつて

「無益だ、君等に美術の話をして無益だ。豚に眞珠を投ずる如しだ。」

「相成るべくは有名なるターナーよりか有名なる倫敦のピフテキを投じて貰ひたいものだ。」

「さうだ君等には食物の談話の方が可いだらう。牡蠣のことを話さうか。」と何處までも罪のないハイカラ先生。

「西洋にも牡蠣がありますか。」と眞剣に問ふ人もあるので世は持てたものなり。

「有りますとも。大ありでさア。而も日本のよりか幾干美味いか知れん。オイスターショップと言つて牡蠣ばかり食はす店が澤山あります。芝居小屋の傍など最も此店が多い。代價も其代り馬鹿に高いね……」とこれから日本人の蠣の失敗談に入らうとする處を、聞き飽きたといふ顔附で一人の男、

「けれども君、品川の牡蠣を食つたことが有りますか。」

「食ひましたとも。」と小太川は正直に言ひかへす。

「何處で食ひました。」

「賣りに來たのを買ひました。」

「だから話せない。日本にだつてオイスターショップがありますよ、品川にあります。朝日の昇るのを見ながら酔牡蠣で一杯傾むける心地つたら有りませんぜ。」

「ハハハ、馬鹿を言つてる！」と戸塚が大聲を上げたので、彼の一組は一度に此方に向いた。

二三人知つた顔もあつたが、互に黙禮したまゝ、近寄らず、我等は直ぐ天幕を出てぶら／＼歩きだした。

「小太川の畑は如何だね。」

「あれは肥えたり、瘦せたり。」

「時と場合で違ふといふ代物だね。」

「得意の時は肥え、失意の時は瘦せ、得意の時は問はないでも種を下し、失意の時は出さうにも種を持つて居ませんね。」

二人はぶら／＼と池の畔に出た。すると岸に臨んで建てた蕎麥屋の中で何人か可笑な調で義太夫を唸つて居る。

『僅なれ共、志、此銀を路銀にして、早う國へいにや、必々煩うてばしたもんなと、銀を渡せば押し戻し、嬉しうござんすれど、銀は小判といふ物をたんと持つてをります、そんなりやもうさんじます、忝うござりますと、なく／＼立つを引とゞめ、夫はさうでも是はわしが志と、無理に持して塵打ち拂ひ——』

「ヨウ！ヨウ！」と戸塚は外から掛聲をして行き過ぎる。

「驚いた向うを見給へ。そら橋の傍の仲間を。英雄が揃つて居る。」と戸塚の示す方を見ると、成程豪傑の手合七八人。

「廣澤君は人物論が嗜好ですか。」

「嫌ひでも有りません。」

「處が其處の連中となると人物論で持切りだから恐れる。古今東西の人物を品評して掌を指すが如くしてすからね。人物論の一つも爲ないものは語るに足らぬと心得てるから面白い。見給へ必定やつて居るから。」

果して然り——、五紋の三十七八の大男、威猛高になつて、

「曹操を奸雄だとか言ふが要するにニイツエの所謂超人だ！」

自分は思はず噴き出した。曹操とニイツエ、餘り其取合せが可笑しいので流石に大男其人も可笑かつたか少し笑を含んで、

「全く超人だ、奸雄もくそも有つたものか見給へ能く豪傑の士を得てこれを自在に用ゐた手腕を。荀攸が袁紹を去つて操に投ずるや、操は何と言つた『吾が子房なり』荀攸を得ては『公達は常人にあらざるなり、吾之れと與に事を計るを得ば當に何をか憂ふべけん。』郭嘉を得ては曰く『孤をして大

業を成せしむるもの必ず此人ならん。』如何だね。愉快ぢやないか。僕は嘘にでも斯う言はれれば其人の爲に身を擲つね。支那の文人どもは内々曹操の大英雄なることを知りながらも必定難癖をつけたがるから癪だ。」

氣焔當る可からずとは此事、二人はそこへ立去り、直ぐ山に登つた。

やはり此處にも五六人の一組吾妻屋に入つて居る。見れば自分の知つた文學者が一名大學教授の理學博士が一名、それに一人の僧侶が雜つて居る。さすがに談話が穩かである。自分達も其中に加はつた。談話の題目は禪、旅行、俳諧、小説、天文など、あれよりこれへ、雲の飄ふ如く軽く移つてゆく。僧侶が理學博士に向つて、

「若し山中で虎に遇ひ、逃路が無かつたら如何なさる。」

理學博士は眞面目な顔で考へて居たが、

「さうですな、それは猛虎ですか病氣の虎ですか。」と問ふ。

「勿論猛虎です。所謂金毛白面の虎です。」

「僕は岩蔭に隠れます。」

「めついたら如何なさる。」

「なるべく見出けられぬやうに小さくなつて息を凝らして居ます。」

「如何しても見出かつて、虎が齒をむき出して來たら。」

「そいつは困りますな。逃げられるまで逃げます。」

「逃げられなかつたら如何なさる。」

「困りましたな。仕方がないから敵んでも對つて見ます。」

「そいつは不可ん。それでは食はれて了ひます。殺されます。」

「是非に及びません。」

「禪の奥義が其處にあるのです。若し今言つたやうな場合には此方も虎になるのです。」と禪僧は得意の眉をあげた。博士は何處までも眞面目で

「如何して人間が虎になれますか。」

「そこが禪です。自分を虎だと觀念して四這になつて、虎を睨み返すのです。さうすると虎の神が此方に移り眞實の虎が長縮します。即ち猛虎に當るに猛虎の威を以てするのです。」

「つまり虎の眞似をするんですな。」

「さうです。」

「失禮ですが貴僧のお顔なら虎と見えろかも知れませんが、僕の顔は少し長過るから無益でせう。」と言つて博士は其清らかな温順な顔をつるりと撫でたのを見て、今まで可笑しさを忍んで聞いて居

た連中が一度に噴出し、禪の談話も立消えさうにした時、突然山の下で先の豪傑連が何に激してか大聲を上げて喚呼きだした。見下すと直ぐ下で、

「君は君の好む處の人物を崇拜しろ、僕は僕の好む處に従う。お互の自由だ」と一人がいふ。

「宜しい、それなら何故ガルバルジを攻撃する？ガルバルジを攻撃するのは僕を攻撃するやうなものだ失敬だ！」

「君はそんなさガルバルジか。」

「勿論僕はガルバルヂーだ！」

と言ふや、山の上の自分等は思はず笑ひかけると、禪僧大眞面目で、

「今言つた人は今の今、ガルバルジに偽つて居るのです。決して笑ひごとぢやありません。虎の神に合すれば虎となり、英雄の神に合すれば英雄となる。不思議はないのです。」と説きつけた。

けれども氣の毒のことには、忽ち響く食堂へ案内の鐘！下の豪傑連は一度に聲をひそめ、ガルバルジも曹操も相擁して食堂の方へ繰込んだ。これより鳥肉、獸肉、魚肉の神に合して鳥となり獸となり魚となるべく吾々も山を下りて、芝生に建て連ねてある大天幕の食堂に入った。

園遊會の食堂が靜肅であつた例を自分は知らない。天長節の夜會ですらナイフとフォークの戦闘だから、況て園遊會をやと思へども、自分は何時ながら不快の感を催すのである。彼處に曹操の智

を以て他の折角運び來つた一皿を奪ふれば、此方にガルバルジの勇を奮つて豚の丸焼を一人で占領せんと眞赤になる紳士あり。シャンパンで杯を洗ひ半分飲んで餘を捨てるほどの男が如何して食堂に入ると斯うも醜體を演じて一片の肉を争ふだらう。

自分は避易して一隅に立つて居ると、戸塚が何時の間にか大皿に山ほど積んで來て、

「廣澤君、來給へ、來給へ！」と先に立つて食堂を出るから自分も續いて外に出る。

「禪僧の教を奉じ猛虎の氣合で、ウンと取つて來ました。二人でも食ひきれまい。」と戸塚は木蔭の圓卓に座を占めた。

「待ち給へ、それぢや僕が飲料を取つて來るから。」と自分は食堂に引返へし、給仕に命じて葡萄酒

二本を得歸つた。

二人は且つ飲み且つ食ひ談話を續けた。

「貴婦人令嬢の姿が見えないが如何したのだらう。」と戸塚はきよろ／＼する。

「婦人の食堂は別になつて居るから見えないのだ。」

「成程さうか。猛虎の群に婦人を投ずるは我淺田侯の處さざる處だ！時に令妹も今日は見えてるでせう。」

「來て居ますとも。」とそれから自分は二三日前からのことを話し、今日の敗北を白狀に及ぶや、

「いや其は近頃の珍話です、家兄顔色なしといふ處だが、實は男子一同の面目に關するから僕が是非敵を打ちませう。」

「宜しい！今少し待ち給へ、食堂から出て來るから、彼の森蔭に待受けて僕も今一戦試みる。」

「助太刀には僕が出ます！高が女でサ、舌頭の戦なら憚りながら戸塚相模守、多年の手練を以て一撃の下に國子さんを破つて見せます。」と先生シャンパンの酔未だ醒めざるに更に赤酒の酔を加へて來たので大氣焔なり。

皿も罎も首尾よく平らげて了ひ、時を見計らつて起上がり、婦人食堂に近き林の横なる休憩所に入つて國子の出て來るのを今や遅しと待ち受けて居た。

暫時すると、四五人の貴婦人天幕の外に現はれ、引續いて一組、一組、現はれて來る。

「そら來た！」

「どれです、どれです。」

「見給へ、そら七八人の年若い一組だ此方へ向いて來るだらう。あの右に立つて、ハンケチを翳して日を避けて居るのが妹です。」

「さうです。さうです占めた！」

「待ち給へ、今僕が招くから」と休憩所の前に立つて自分は手を舉げて其一組を招いた。一同の視線

が此方集るや、國子と他の二三人が何事か囁いた。そして皆々笑味を含んで静かに近づいて来る。
 「併し悠然として押掛けられては驚くな。此奴は恐縮だ」と戸塚相模、今更首を縮めて頭を撫て居る。
 「オイ、毅然し給へ。戦は勇氣にありだ。」

言つてる中に間近う来た。自分は
 「我が敬愛する諸子！ どうですお休憩になつちやア。國ちゃん、お入りよ、紹介する紳士があるから。」
 令嬢達は多勢を頼んで最と鷹揚に座に着いた。長方形の卓は二人の男子、八人の女子で占領せられて了つた。

「國ちゃん此方は東洋新聞の政治部主任、戸塚君です。」と、更に戸塚に向ひ「この女は僕を病氣と偽はつた曲者、妹の國子です。宜しく。」と自分はやつてのけた。

「イヤこれは初めてお目にかゝります。僕は戸塚相模です。相模守大船です。何分よろしく」とやつてのけた。

「宜しく」と國子は言つたばかり、微笑を含んで控へて居る。

「廣澤君は先達から御病氣だつたさうですが、然し全快して結構です。」

「兄は病弱いものですから、少しの風邪にも大騒を致ます。今日も出られないとか申して居ました
 が、私が無理に連れて参りました。兄上大分お顔の色がよくなりましたよ。ほほほムムム……。」

「眞實に廣澤君、先刻お見受申したよりも大變お顔の色がよくなりましたよ。」と雪子嬢の助太刀。
 「久しぶりで御自慢の詩吟を聞かして頂戴な。」と美子嬢の横槍。

斯うなつてはやぶれかぶれ、自分は

「宜う御座います。詩吟でも何でもやりませう。先づお得意の唱歌から願ひませう。」

「戸塚さんは兄と異つて必定何でもお出来になるでせう。兄の詩吟も聞きあきましたから戸塚さんのお得意をお願い致します。」と國子は正面より一本。戸塚はとつかはと、

「イヤ是は恐れ入りました。僕の無風流は廣澤君がよく御存知です。どうぞせう。皆さんの唱歌を願ひたいものです。」

「雪子さん御一同に歌ひませう。」と國子は先づ椅子を起つた。雪子嬢も續いて立ち「秋の空晴れて」といふ唱歌を歌ひだした。聲も態度も申分なき出来。歌の半に至り、美子嬢、富子嬢、文子嬢續いて起ち上り合唱の節面白く歌ひ終つて席に着いた。

「いづれ又お眼にかゝります。」と國子は戸塚に挨拶し、しとやかに禮をして先に立ちテントを出たので令嬢達も續いて起ち、静々と彼方へ歩み去つた。

二人は茫然と其後を見送つて居たが、スドンと揚る煙火の音をきつかけに戸塚は可笑しな身振をして「チエーツ残念ぢやな！」

18841



◀ 聲 濤 ▶

大正六年九月廿七日印刷
大正六年十月一日發行

(定價五拾五錢)

著 者
發 行 者
發 行 所

國 木 田 獨 步
東 京 市 牛 込 區 矢 來 町 三 番 地 中 の 丸
佐 藤 義 亮
東 京 市 牛 込 區 矢 來 町 三 番 地
新 潮 社
電 話 番 町 一 八 九 〇 九 番

振 替 (東 京) 一 七 四 二 番

印 刷 所

東 京 市 神 田 區 宮 本 町 五
電 話 下 谷 四 〇 六 七 番

印 刷 者

新 潮 社 印 刷 部
高 橋 治 一

了

ドストエーフスキイの二大作 ■露文直接全譯■

■全 白痴 ■

米川 正夫 氏譯

(刊 新)

小形全三册美本
紙數千七百頁
定價金二圓
小包料十二錢

賢なる白痴ムイシユキン公爵によつて「眞に美しくしき人間」を描くと共に、爛れた情慾の爲に自らを滅ぼせるラゴージンに於て人間の有する悪魔の一面を描く等、作者が近代の萬魂詩人たるの面目を發揮せる、萬世に輝く大傑作である。而も作其物の偉大なる價值以外、彼が生涯の最大事件——死刑宣告の刹那の實感を描寫し、又彼の深刻なる内生活の基礎とも云ふ可き神聖な病(癲癇)發作に於ける神々しき感覺を細叙せるなど、興味多き物語であると共に、此の作者の研究者にとりて、貴重なる材料に富んでゐる。

■全 罪と罰 ■

昇 曙夢氏序
中村白葉氏譯

小形全二册美本
紙數千五百餘頁
定價一圓五錢
小包料十二錢

「カラマゾフの兄弟」「白痴」と共に、ドストエーフスキイの代表作である。深刻にして敬虔、藝術にして藝術以上のもの。古今を通じて世界を通じて屈指の雄篇であつて、此書を読まざるは實に文學の士の大なる恥辱と稱せられる。本書は直ちに露文の原作より譯出せるもので、忠實にして精到、一字一句だも疎かにせず、よく原作の精神を發揮せるの點は、固より英獨等の重譯書の及ぶところでない。

戦争と平和と相並んで **世界近代文學中の王者** たる本篇は、始めて全譯を公にせらる。

ドストエーフスキイ著 米川正夫氏譯

■カラマゾフの兄弟■

□全三册□
中卷新刊

■一册紙數六百八十頁 ■中版總洋布 ■一册壹圓三拾錢 ■送料八錢

露文直接全譯

ドストエーフスキイは、トルストイと並んで近代露西亞文學界の巨擘たると共に、實に人間の歴史を通じて、上下東西にその偉を絶つる二大天才たり。而して「カラマゾフの兄弟」は、彼が畢生の心血を濺ぎて、その大思想大精神を描き出だせる代表的一大雄篇にして、淫蕩猥雜、放態度なきフォードル、カラマゾフを父とせる三人の兄弟を主人公として、神魔相闘ふ人間靈魂の悲劇を描破するところ、規模ダンテを凌ぎ、結構ユーゴーにまさる。殊に縦横描寫の大手腕、おのづからにして幾多の波瀾多き場面を展開し來り、之れを讀む何人にも無盡の感興を與へ、一たび手にせんか、遂に最後に至る迄巻を措くに忍びざらむ。偉大なる藝術品にして斯くの如き興味多きものは、其の類例甚だ多からざる也。而して邦語に移して三千枚の長篇、今青年露文學者として噴々の聲譽ある米川氏が靈活巧妙の筆によりて茲に譯出せらる。梗概にあらず、抄譯にあらず、眞の完譯——殊に露文より直接に移し來れる全譯は、今はじめて我が讀書界に提供せられたる也。

發賣品
 丁部 落部 候節
 本有之
 東京堂
 御訂正
 第次越申
 候仕可
 .460

錢五冊一		宛錢六料送		名作選集		紙表重二羽		本美極製特			
第一	牛肉と馬鈴薯	國木田獨歩	第十四	明詩歌選	詩壇六家	第二	坊っちゃん	夏目漱石	第十五	戀ざめ	小栗風葉
第三	蒲團	田山花袋	第十六	別れた妻	近松秋江	第四	透谷選集	北村透谷	第十七	はつ姿	小杉天外
第五	春	(全二冊) 島崎藤村	第十七	お艶殺し	谷崎潤一郎	第六	たわが袖の記	高山樗牛	第十八	俳諧師	高濱虚子
第八	爛れ	徳田秋聲	第十九	煤煙	(全二冊) 森田草平	第七	平	二葉亭四迷	第二十	花枕	正岡子規
第九	高野聖	泉鏡花	第二十一	子の花	武者小路實篤	第十	何處へ	正宗白鳥	第二十二	旅役者	長田幹彦
第十二	今戸心中	廣津柳浪	第二十三	物言はぬ顔	小川未明	第十一	耽溺	岩野泡鳴	第二十四	ふところ日記	川上眉山
第十三	耽溺	岩野泡鳴	第二十五	ふところ日記	川上眉山						

